要馬秘極集

四

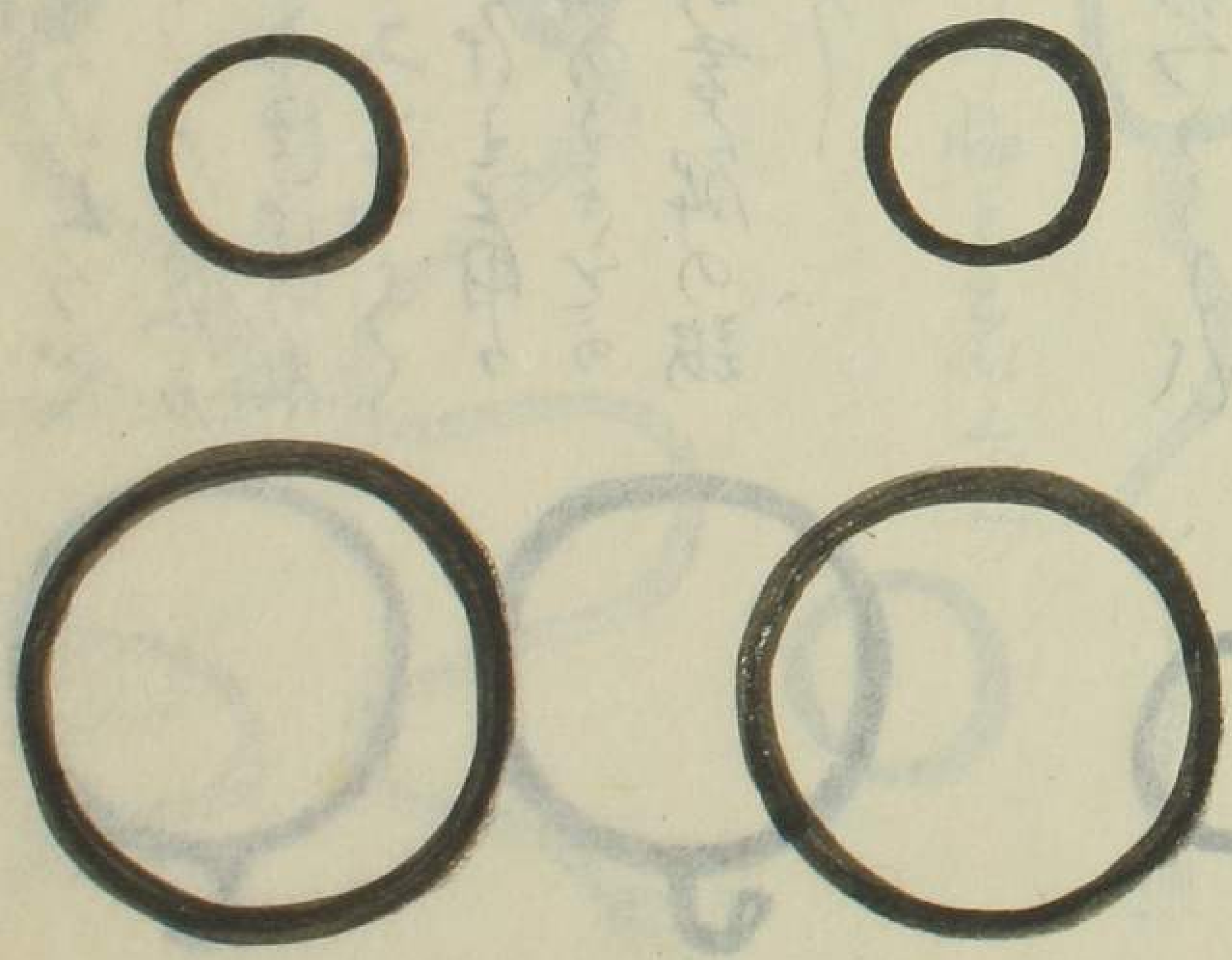
和装本
ケ5
44
163

要馬秘極集巻之八

腰輪之図

劔之巻第三

此大輪ハ腰輪と云 上帯ニ
つくる也 紅 以上ヒワ入るし 小
輪ハ手綱くりの輪と云 二ツ
入るゝ大小かハりなハ大方
かくのことし



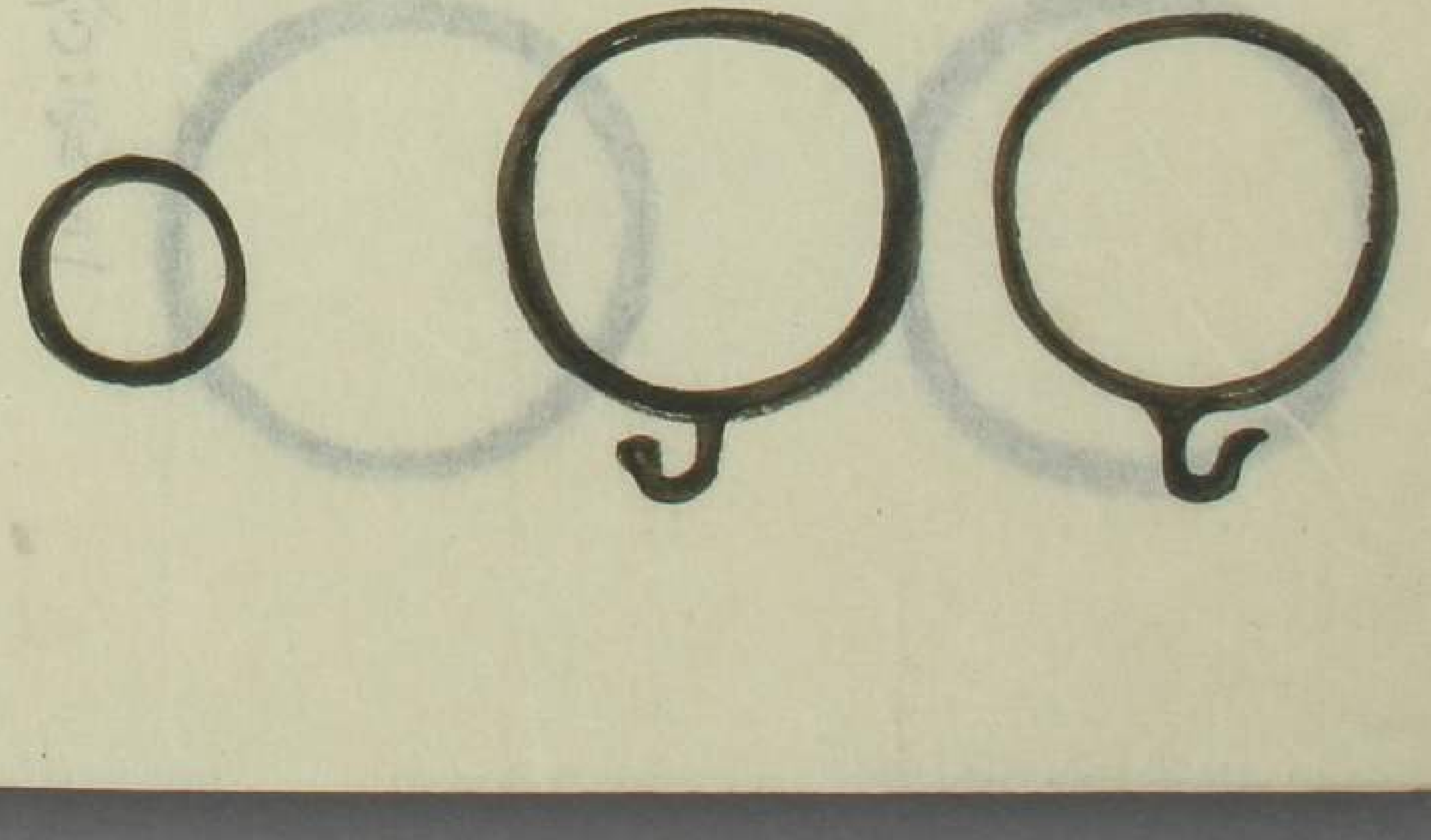
ケ4

掛輪の図

ひけしはかくのことくかきところにあるや
そのかきてある書の子乃うちにたさ房
ゆくゆくの画にあるへしさつほけの茶
の房乃ゆくさきにあるはりを見てつくる
けるとなすけを付へし件乃けまを用ゆ
はいはうなるもののけまふは輪のことくとの
けとをて鍋の色のけとすると刻房解の鍋
ゐのけ国家之は外法にあらさるへし

輪之図

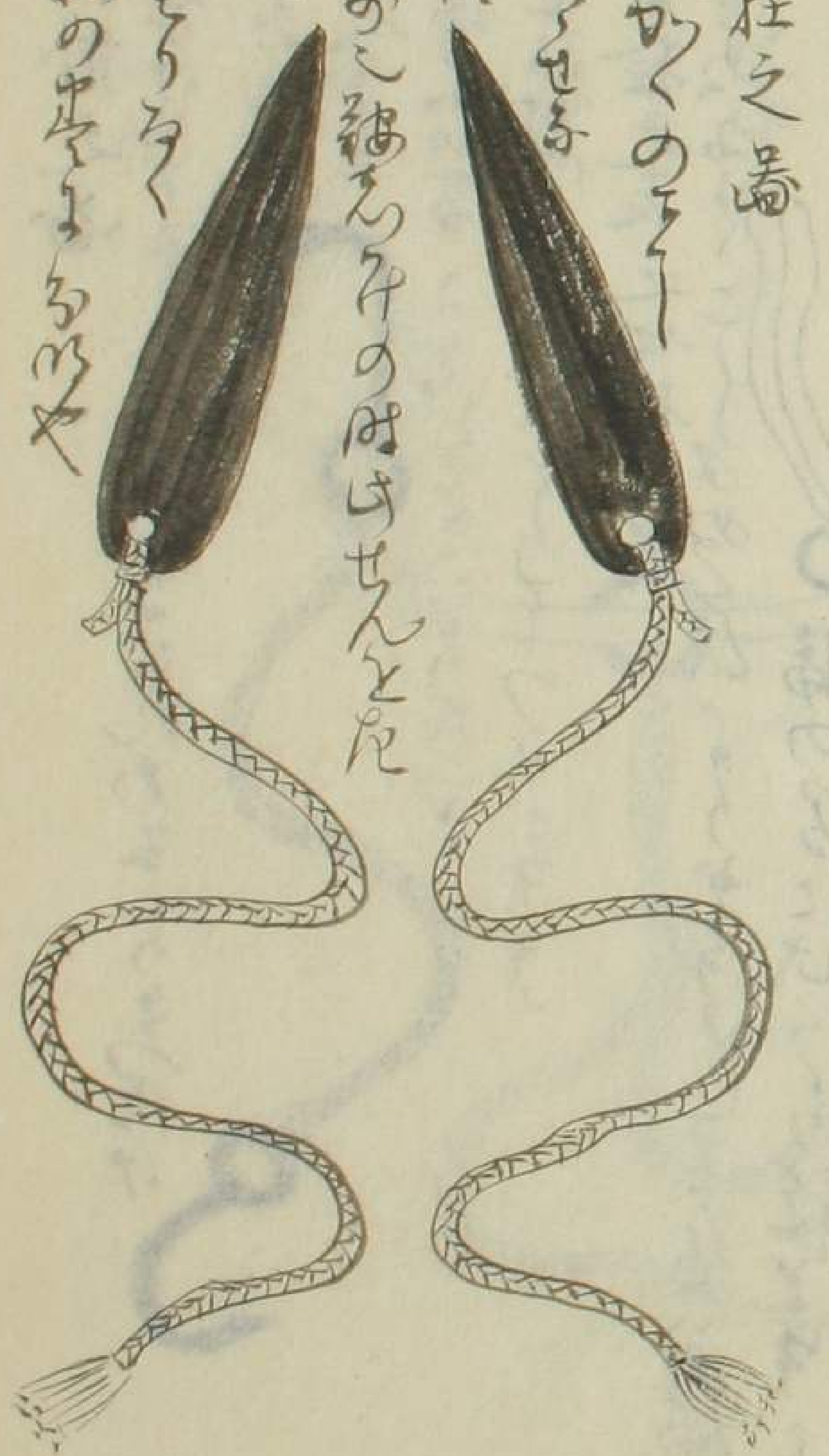
はひかりのしもさ二寸此かつらたは
へいうち結ひはとせんあまりさつはけ



ちからの縄
よりけ結ひ
てはしは房つよく
なそのもとをうりかえてしはひかりの輪とえむいとのへ
入へし

拴之図

はせんたきさ房かくのことし
そうけるて取付せる
つくらぬとは
ゆくんたはおこ鍋ありけの時はせんとた
たおさしとあて
つりさてまうりなく
ぬつるの別鍋の中をまるめや

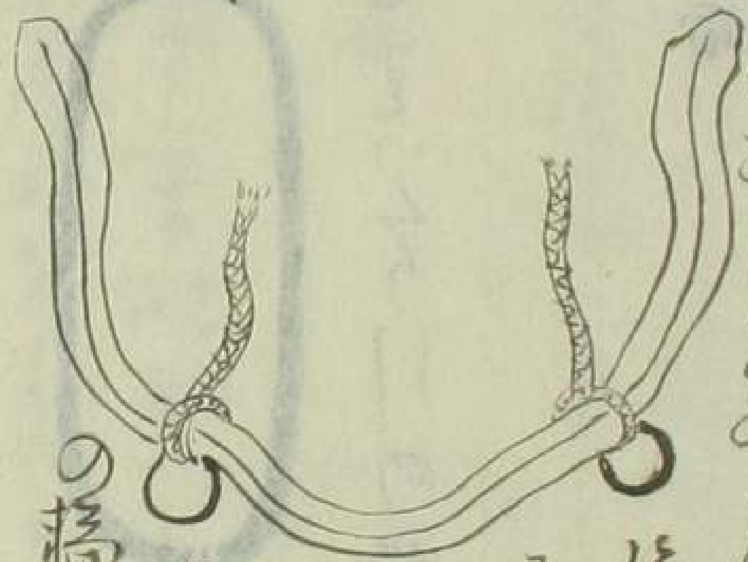


曲掛之図

此かぎ曲掛乃足かけ之下のかたにいるせんあるなりきつけ
とえりの縄よりかけ上乃
かぎにかけまひとへなり
そのうちまくらふとんの帯をかけてとりたて
すいちそへてまとひけるかぎにひとつつきなり
此足かけぬりきぬみくこしくまぬくひかりかるくしてたたみ細

帯栓之表之仕掛之図

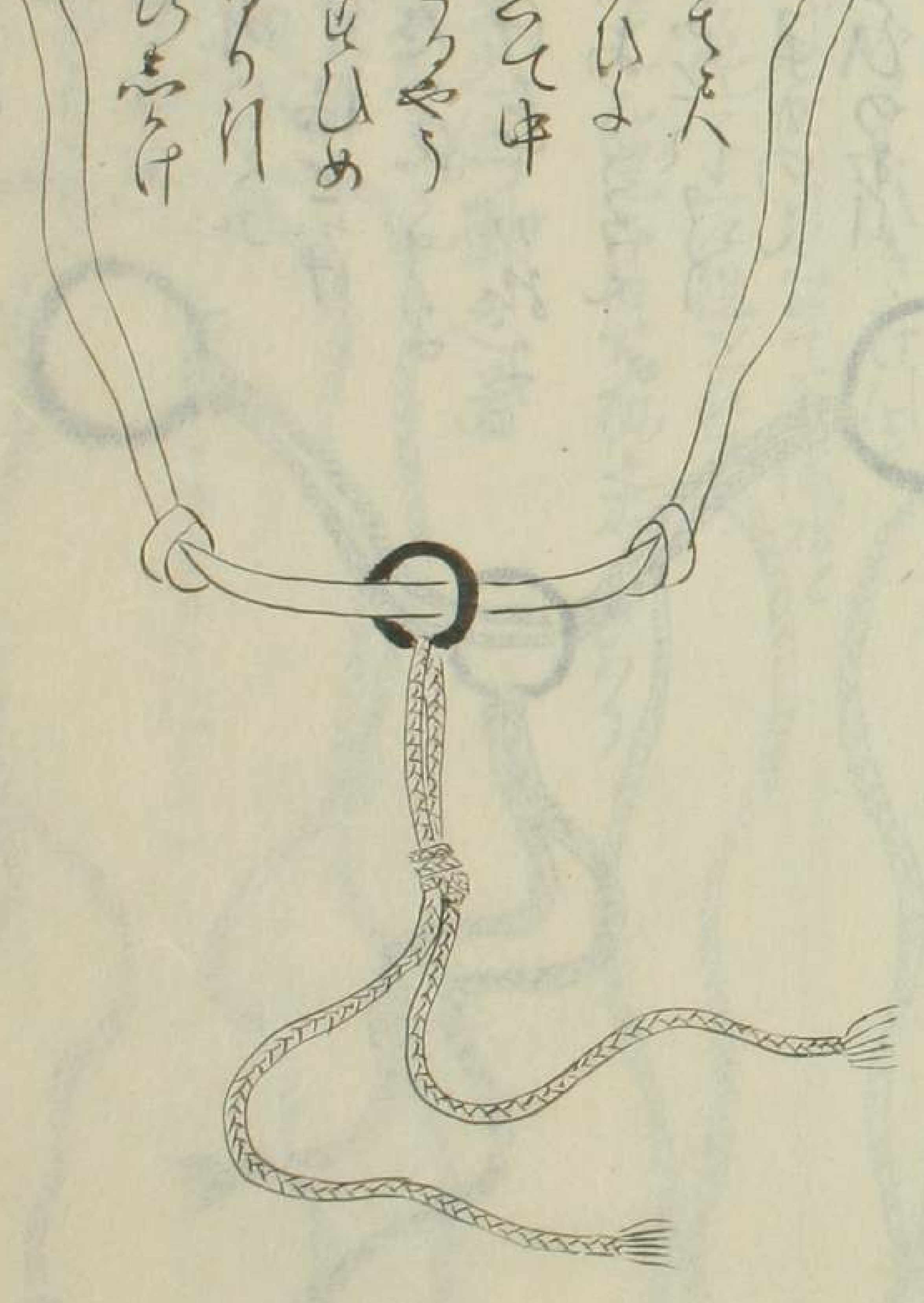
しかしもてくの紐
それりもりまいかい



帯のるにはうち紐を中と
みよ入ぬいくらえてぬいおき
めの所よてはとくかろ
まとゆい付ては紐のなさ
赤にて帯にまろ紐のとをたたん
の輪ろうえ二ツにてくわとに不出

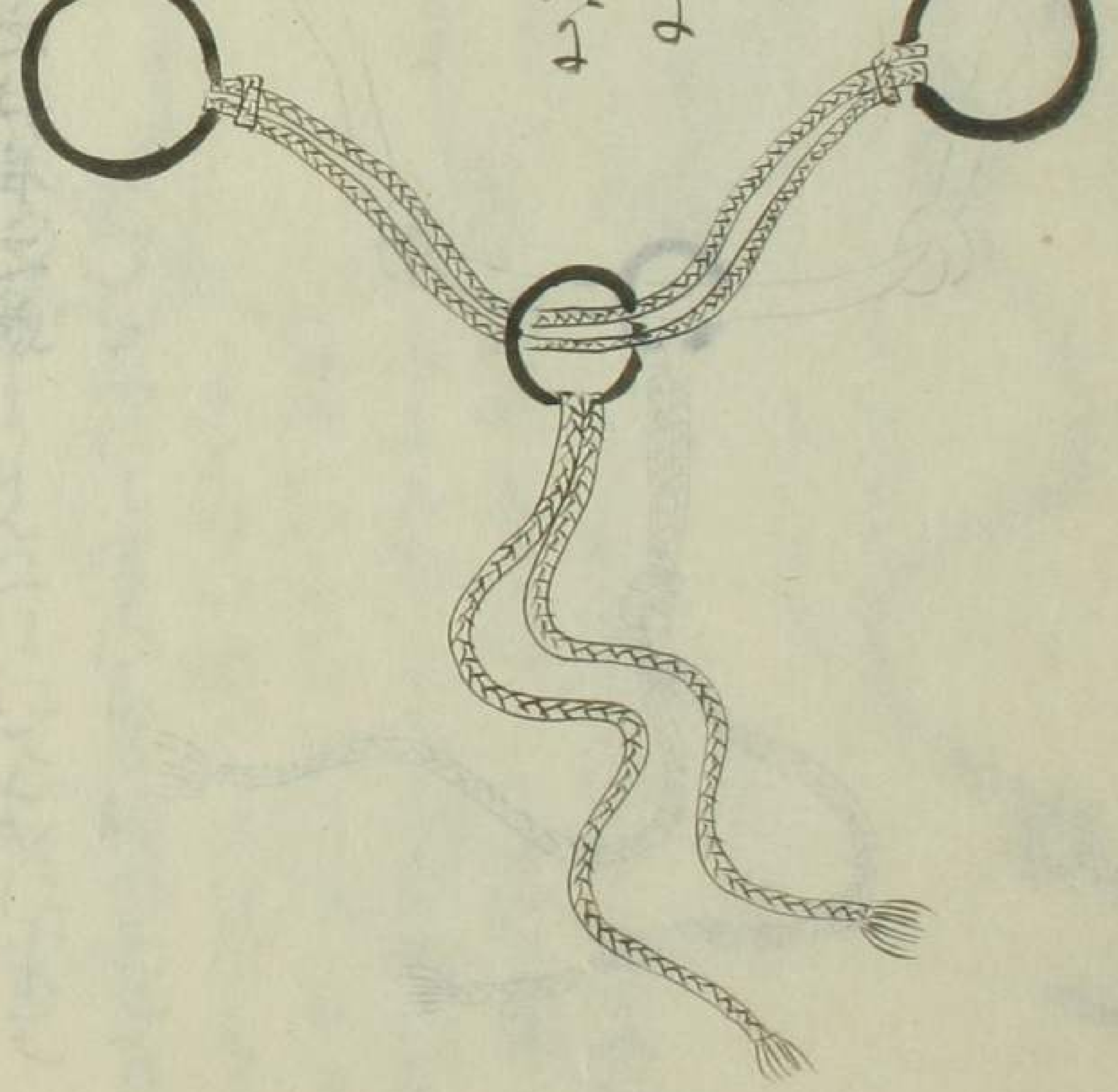
帯栓之裏之仕掛之図

はえかけは
とそくぬの
とひきこさそそえ人
こうしくみめりは
てふるくきて中
のとのぬけさうやう
またれよむきしめ
としてとくろうれ
紐はせかけめ心がけ
のこと
秘乃事ならたり傳



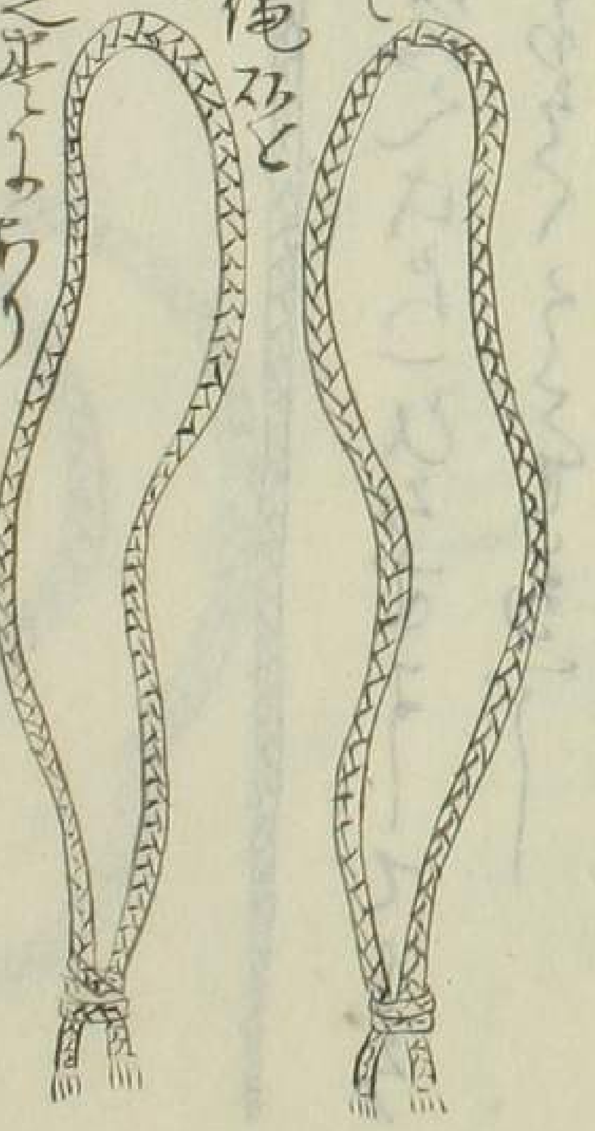
輪好仕掛之図

此しかけハ武んくの
鉄表裏のしかけ也
此鉄しかけの時ハくの
ふくまそまへ輪とかけ
通して是迄ハ法るすま
耳輪之此しかけとそかねま
しかけ金子ハあくるるし
ふるましかけるといへり
一つ二つとして耳かのこ
引綱ハとりくひのあハ
の方ニ一綱ひけをて丈
乃んとてま綱ひきや



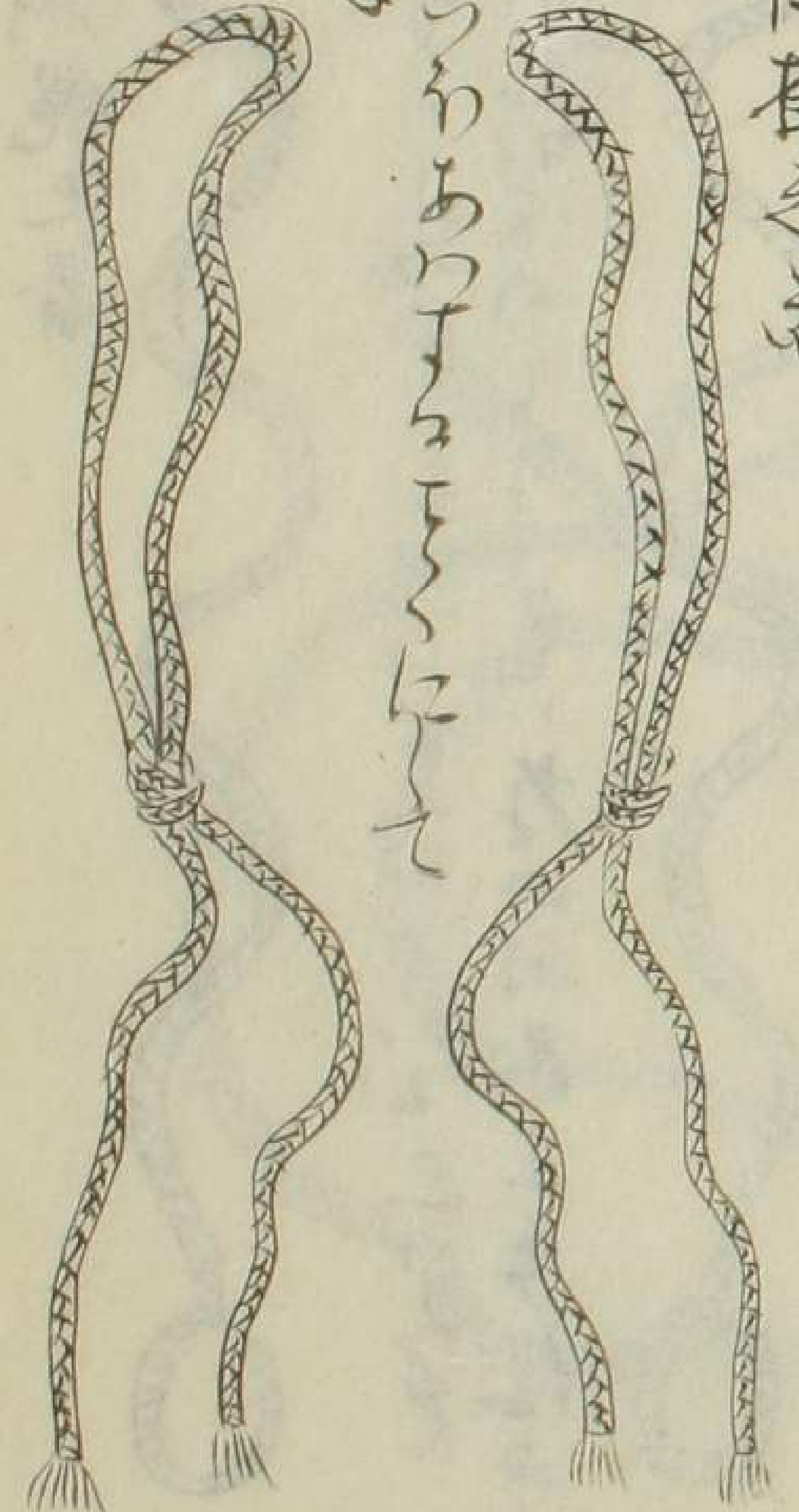
相引仕掛之図

此しかけハひけのしかけるる之此
ひとひめの本力かとまひきかけ仕て
常に下より上へ引ことりしめて手縄ひとと
か出るとも縄ハ抄ゑして三手組を紅て
せんじとめるなるを鉄しかけの此鉄之定とあり

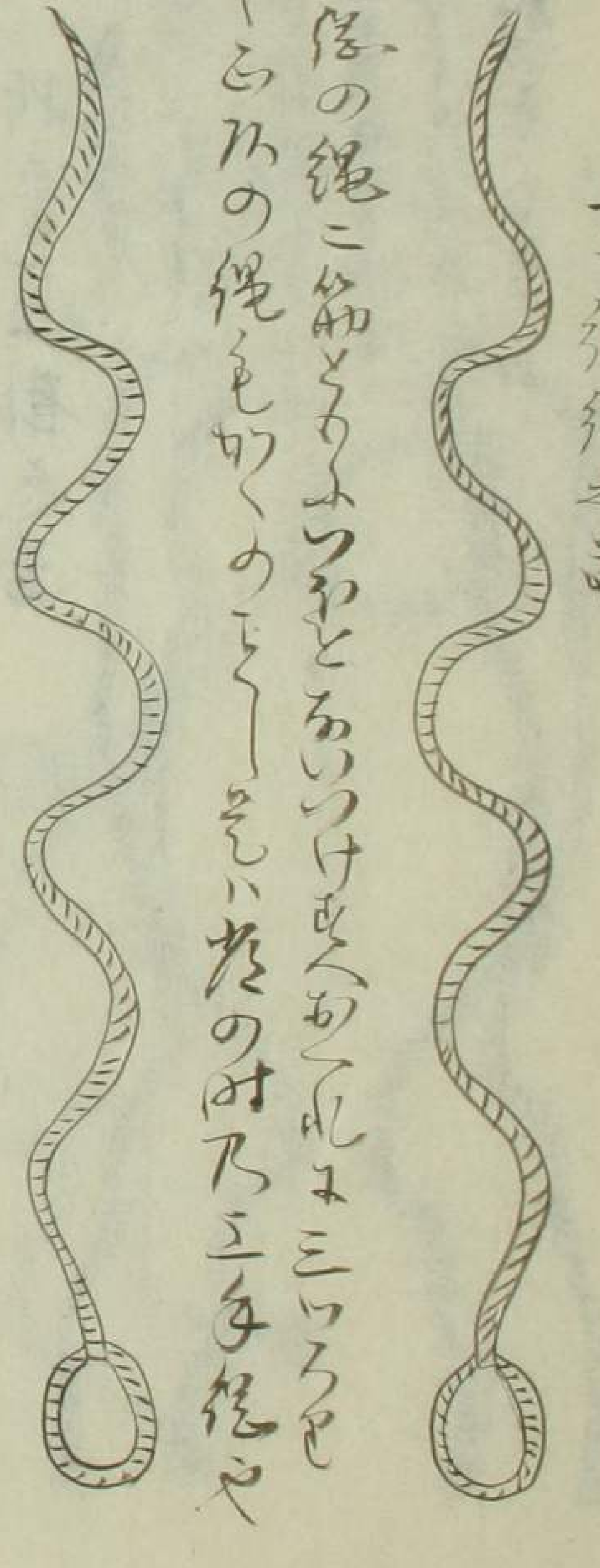


折立之仕掛之図

此しかけ先日ま之
たるのしめて此先た
はつけてこ比そと
くよそしるかたえのつわあいするとくにして
こそんと身かつふま
庭をくしかけの
此書鉄の表ニまま

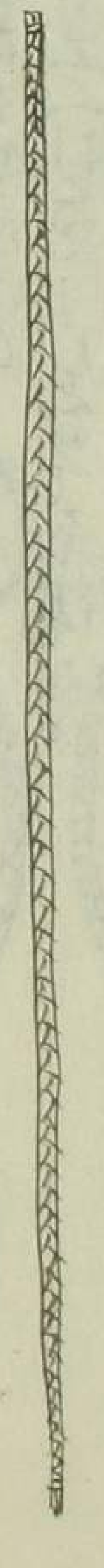


上手綱縄之図



此上手綱の縄ハ二筋ともにつかとにいつけ申へからは三ツろを
まくし而乃の縄も如くのこし是ハ総の附乃上手縄や
此人
こいろ
うまくし

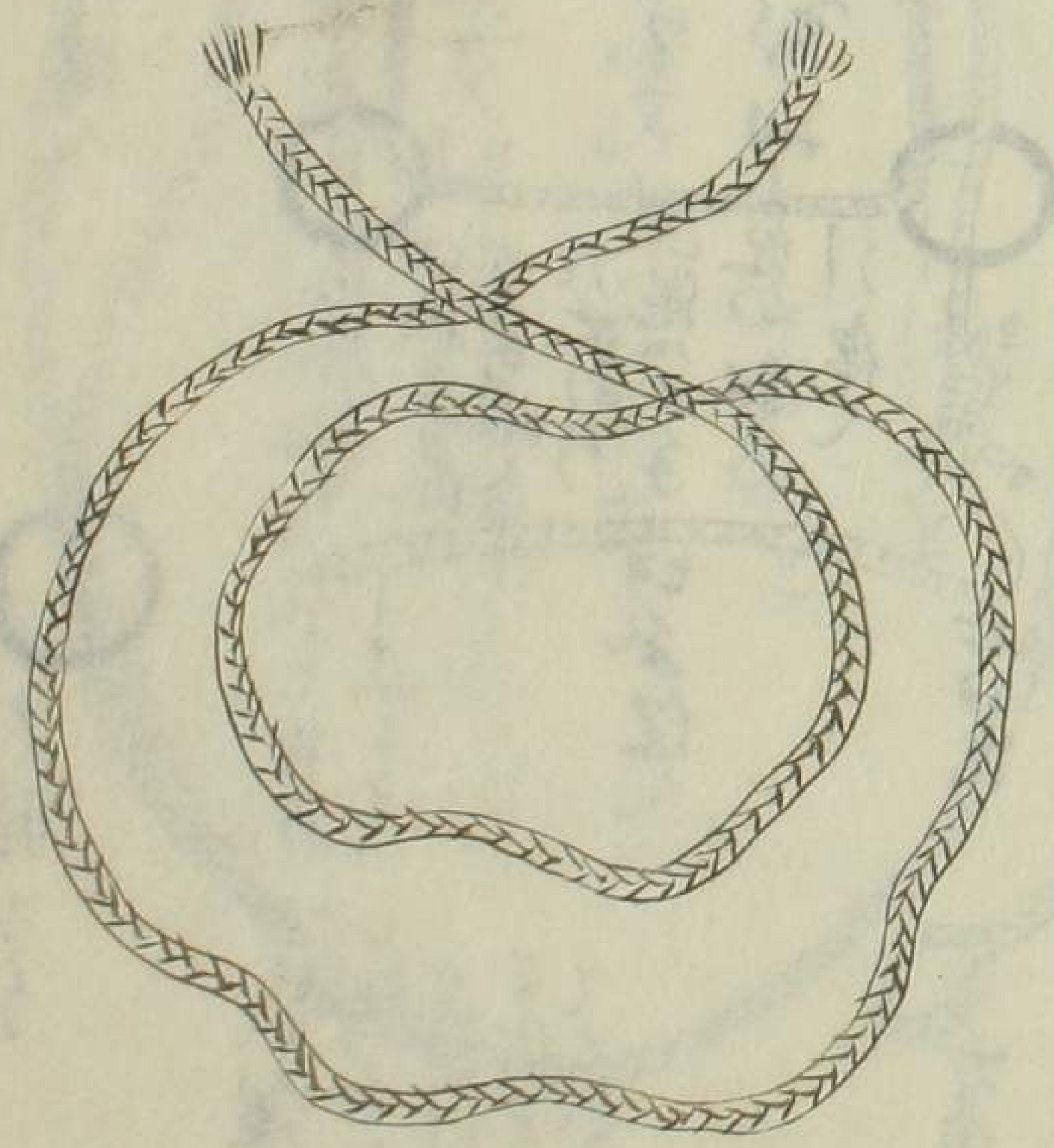
仕掛縄



此縄ハ乃くさしけの縄之此乃しひろまでして長ろ
縄ハ中ふとくわしたくあるくしせ申へし

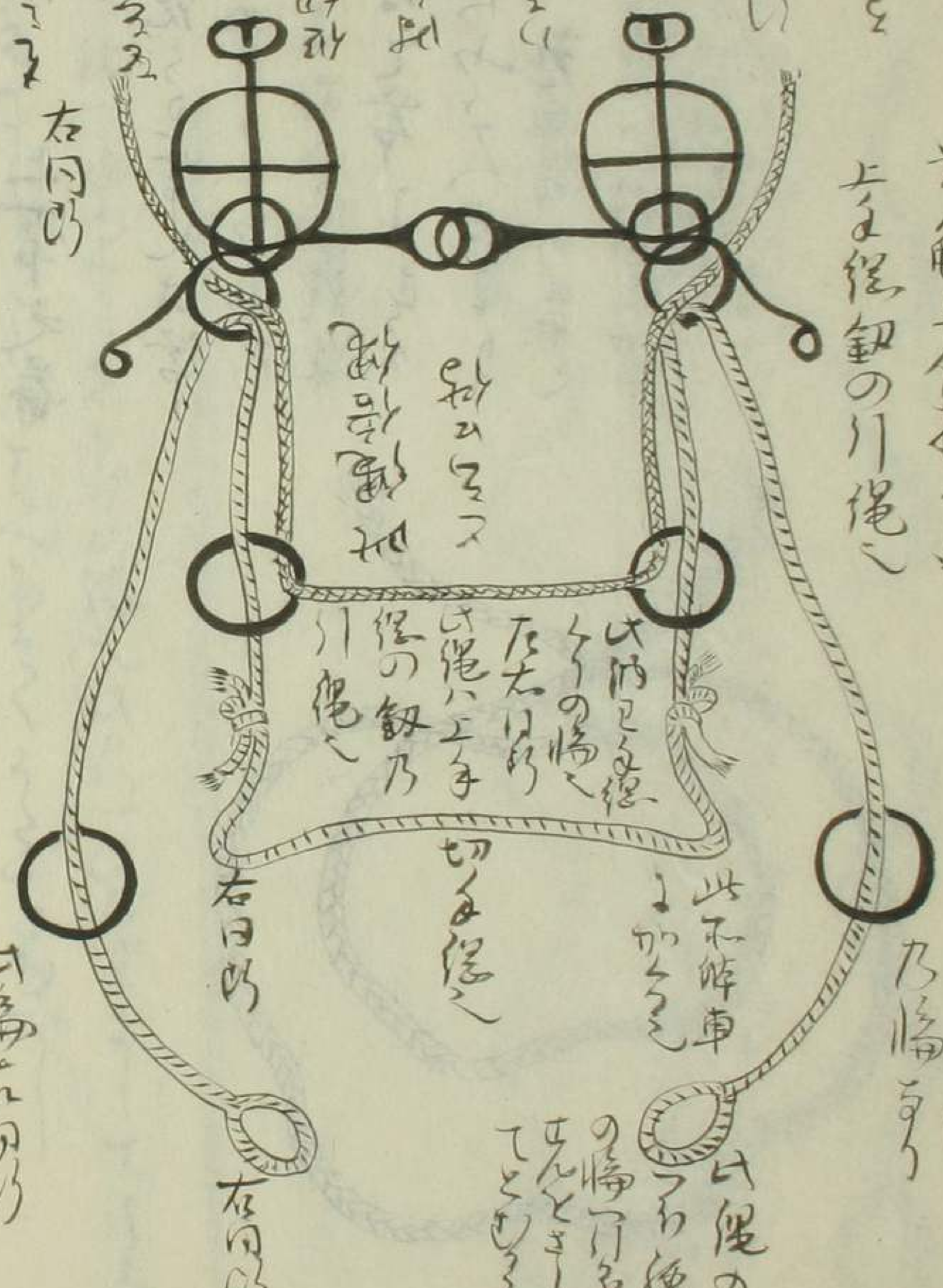
上帯之図

此縄を上帯之此帯
に太のこしろみ乃
上の通に於てら縄に
輪をなして帯にまくる
之は乃めくへまとり
くそハ袴の腰の帯と
筆端にては別上帯
に輪をつけもく



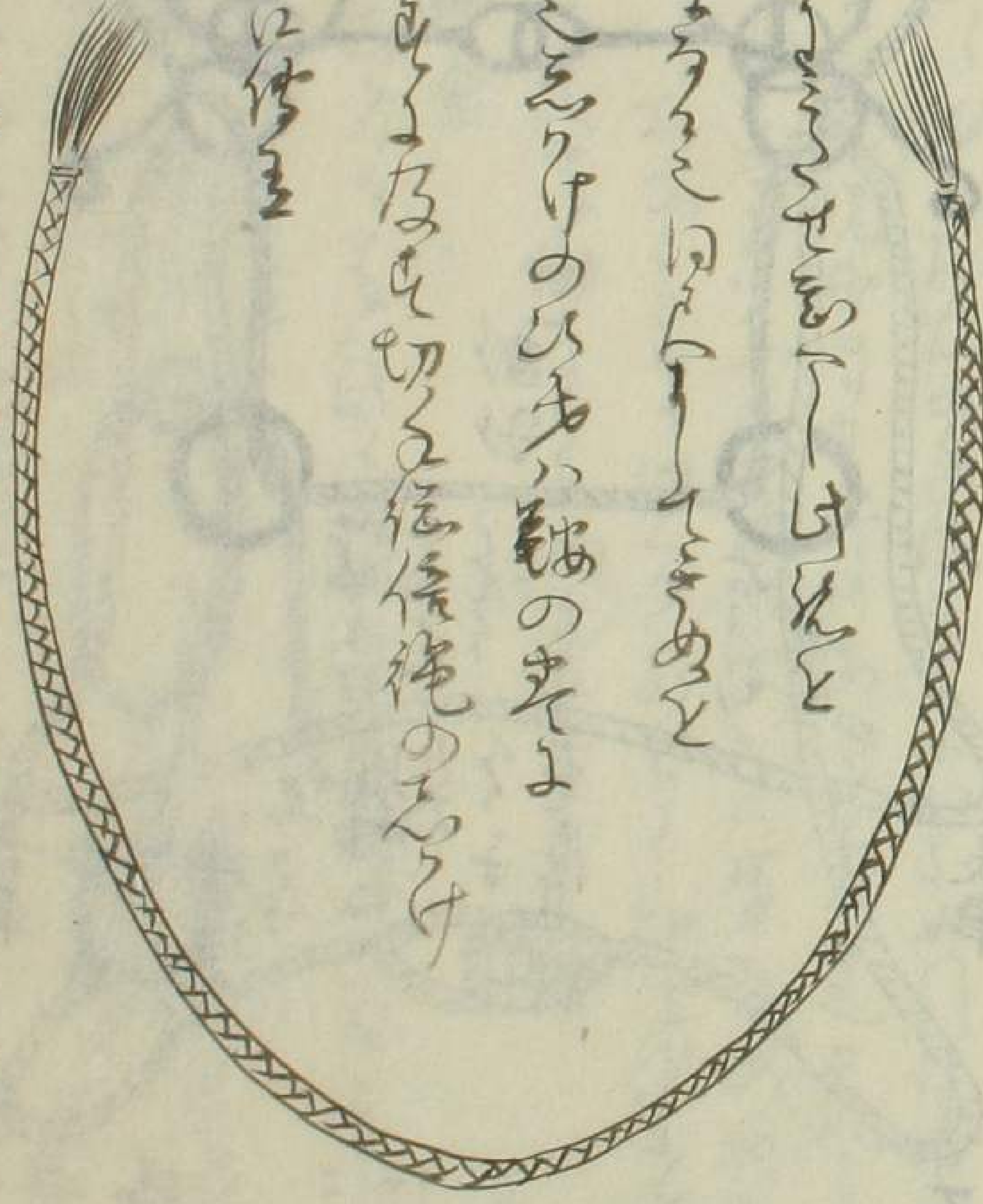
常解之仕掛之図

上手綱鉸の川縄之



此ら常解の鉸ニつけの縄之 此とへを分かつの字ニ要なり
し此縄之ん

手綱先の輪に結ぶ
絡車の両輪



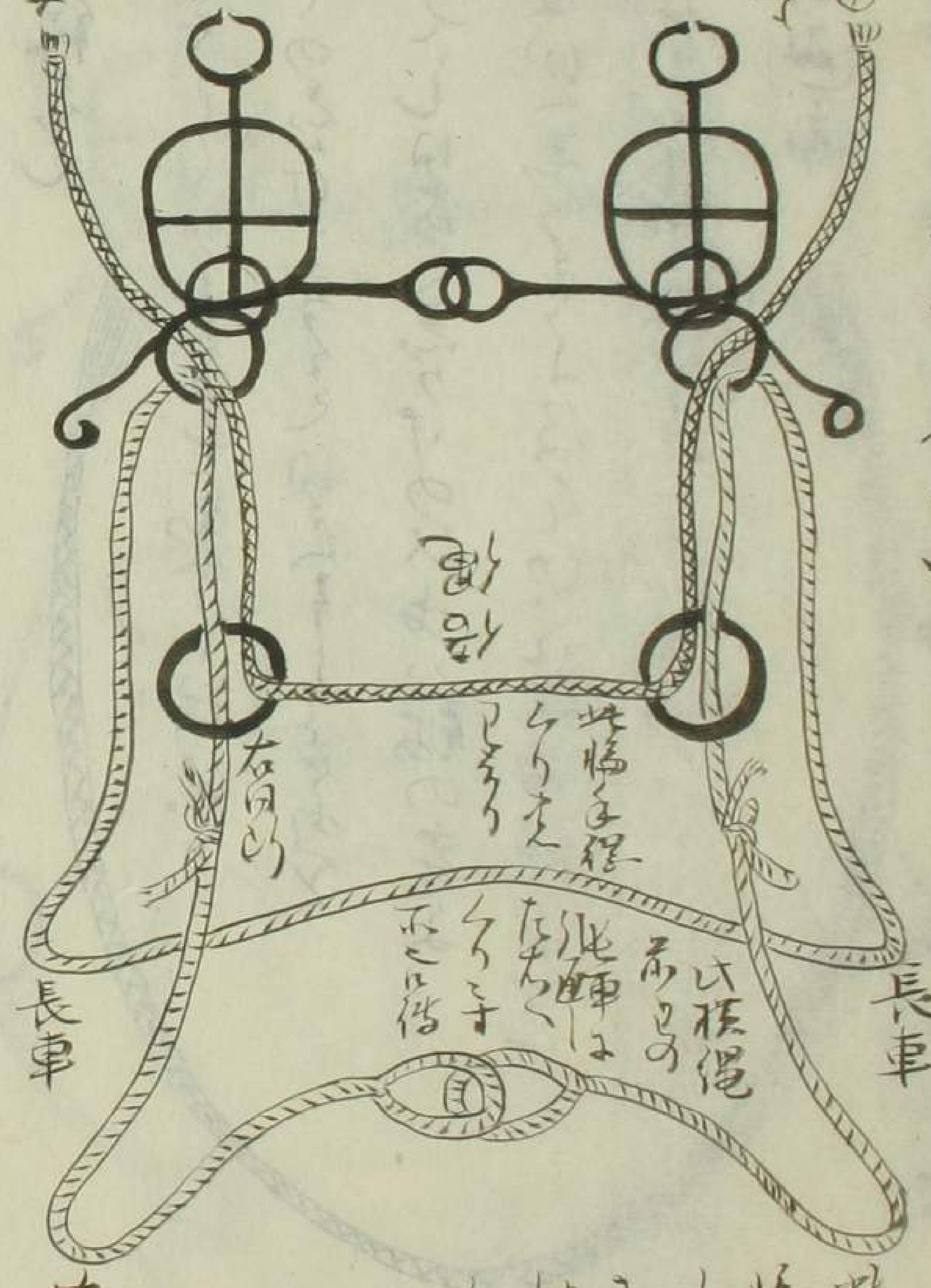
たの鐶をうけの沢ハ手綱の住處なり亦是何の故とんてとゝらる
そ日記之世事の由て上見ゆるは何も手綱乃出組とゝそこし
らさるさ所と申とは則ちたちの手綱をしすおのれの付侍切弁弱
のるいくらくもあ流やすまとひすあくこゝさるとされも軍用
の沙汰ハつれとんてはとるとやお流の安るハ軍さるの兵具とん
てる御ハ心うけ所やとゆるいつくのもくし切手綱とあらる
そゝ緒ともしてる御あるうまぬあるりは口傳

仕掛金

躰連の鐶るせんをとらるるとは是ひつるの輪一寸二分より五寸
二分さゝとゝ切きのらくふをし
いありてはひつるの輪と上帯と下
まりて出ぶる所工ちとのらけ上

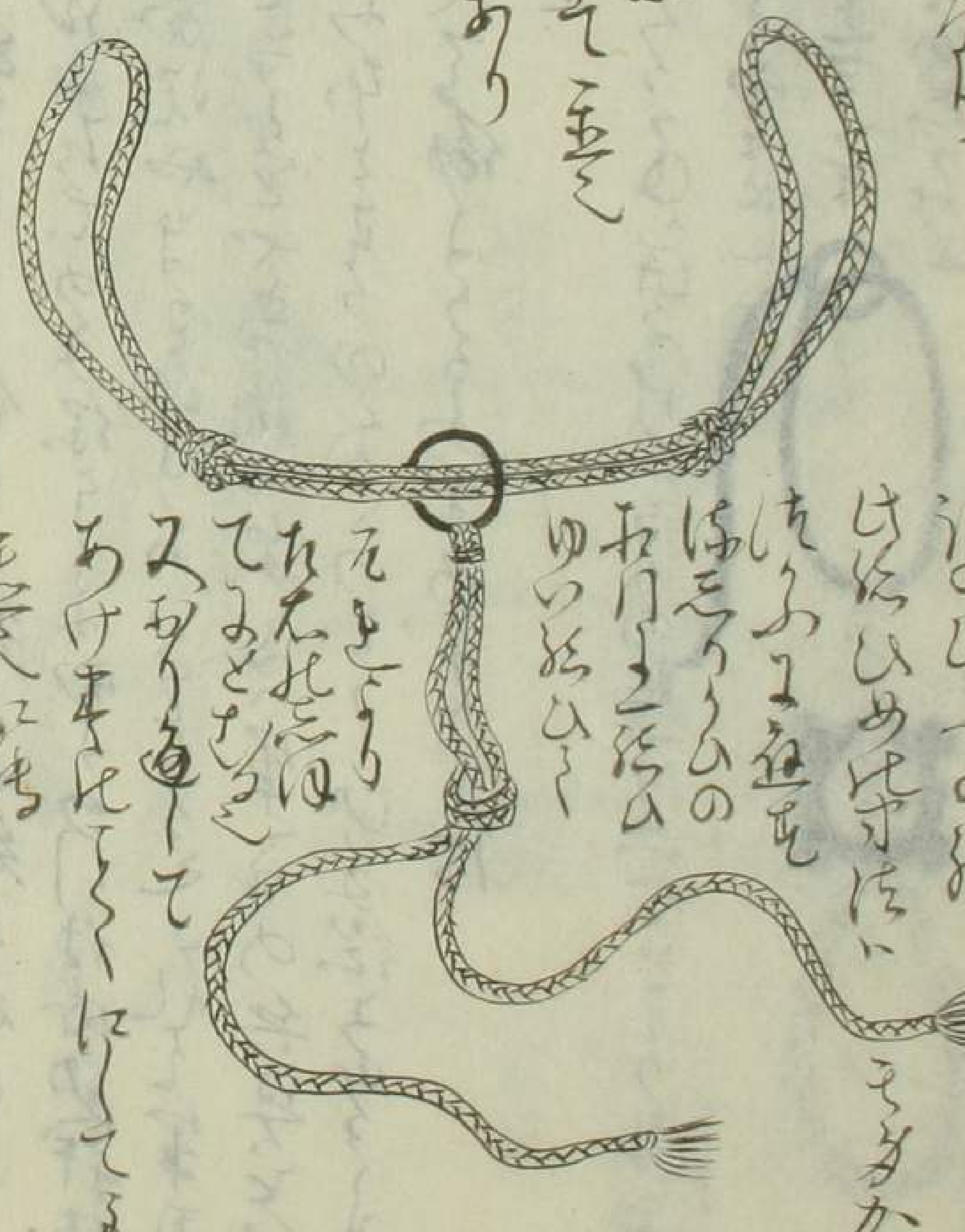
手綱のつるとこれうけてすとりるとおりうけ是所ゆる輪とうけたん
てあひてあとは口傳

躰連仕掛之圖



躰連仕掛之図

躰連の志かけやうなり
はらおび通し輪にし
内と外通しおのへ
とおめけさりせ不
おびめとふとくして垂れ
そのまゝ緒をむすてあり

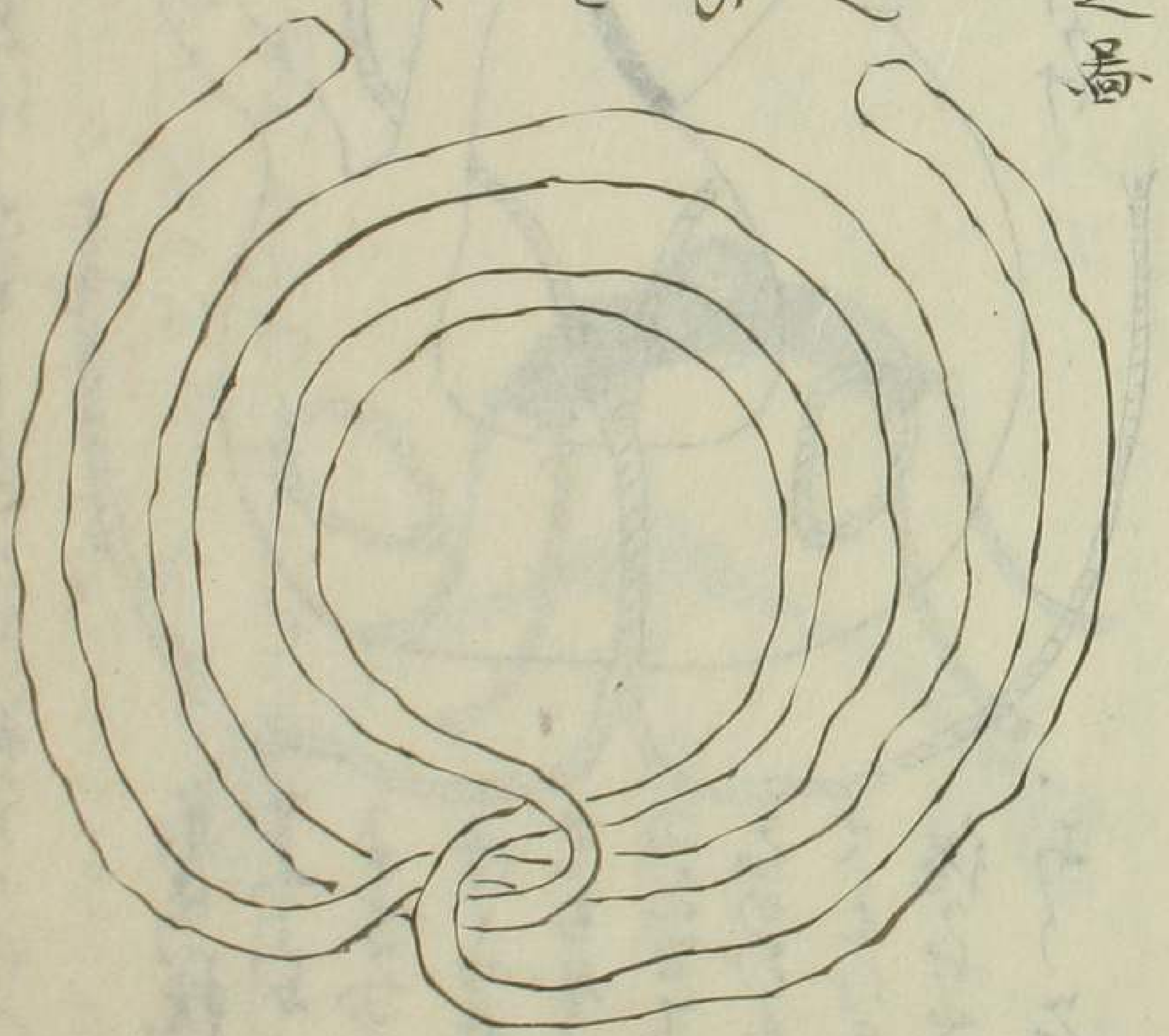


帯のひらへの結
はおびめ守法に
たふさ通し
ほそうらの
あけまへ結ひ
ゆへ結ひし
そのまゝか

そとより
たれ結ひ
てみとめ
又たり通して
あけまれてくにしても
垂に付

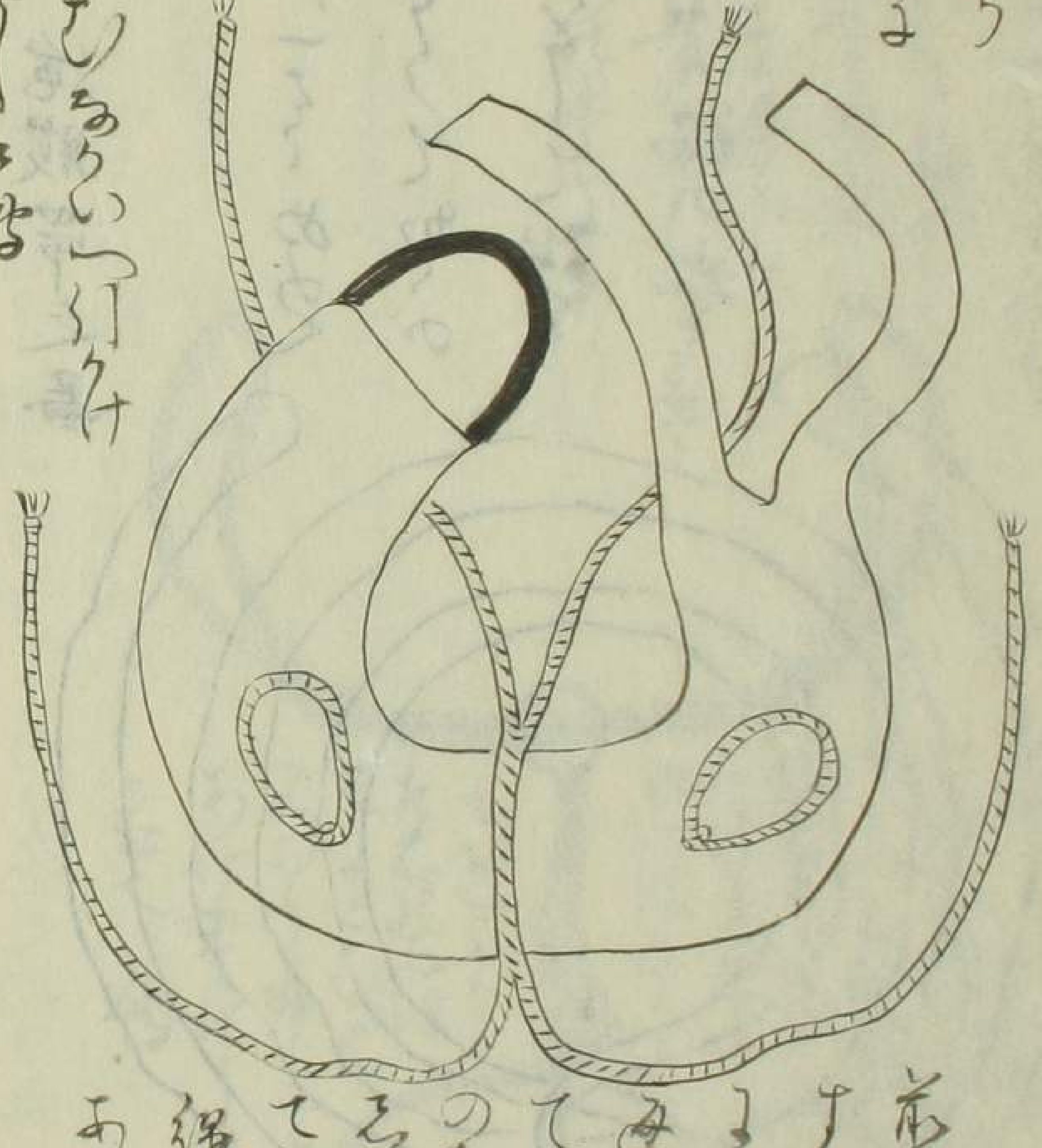
浅腹帯之図

此腹帯ハ一重にめぐらし
ふくらみとりてかくの
ごとくしめて結びと
なし此次ヶ緒の通
すなり明也



掛腹帯之図

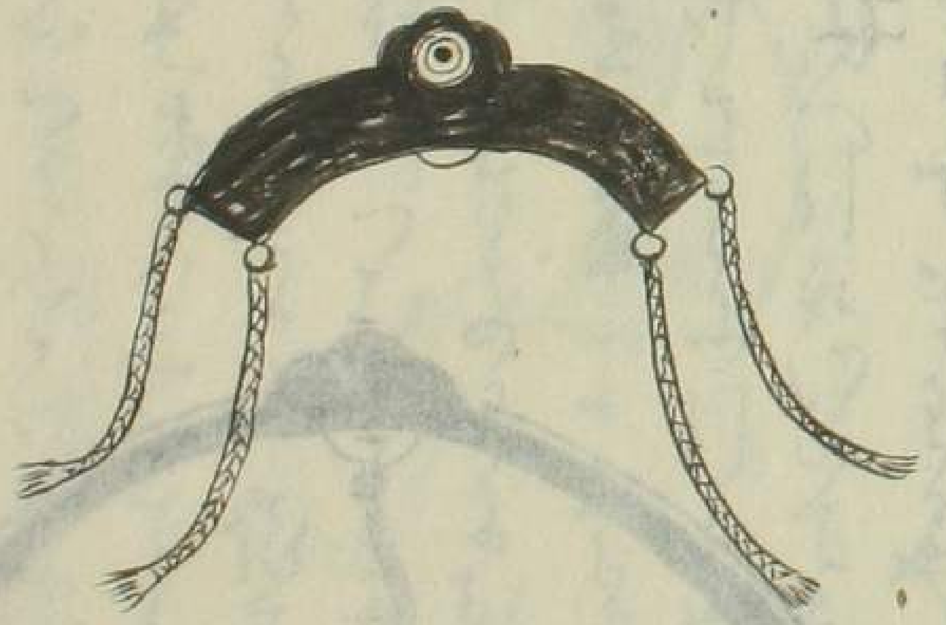
此掛絡帯ハ手をやくして鉄之つうさうるきまた之
はさみの緒切付のあちとりとをしおうけ也之
此めのうち
まされの丙ほ
ゆうけをめ
結ひて
諸の縄
二筋ハ
結めた
とて花
たすけ
ともさと
前の二筋ハむすひつけ
ゆひてもつし候



前後の縄ならく
はし到此布
まさの内より
みしめ弁くし
てまたし置
のさとてより
ためむすひ
てもはなし
縄うけやうして
ありし候

頭車之図

はとくしやいかしら
うけれやとろうよ
かけてたる
そうらしら
うけまたたて
ゆいとめ中ハ
こころせるし

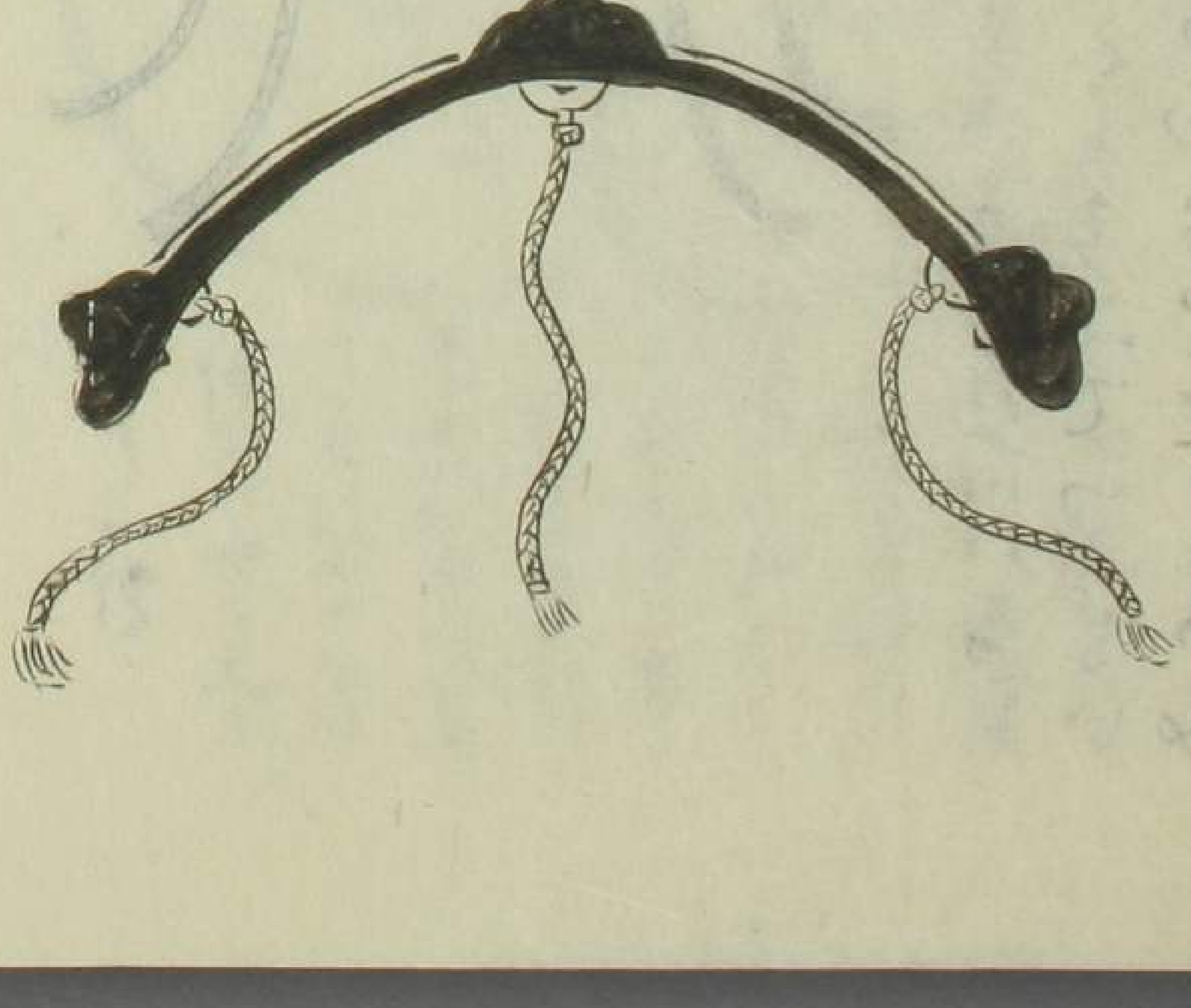


あふるりこのくるまつまらかのわひくつみてたたいるめ
しくもるりみのうみれ外ハ右るしくるふてつるとい
ろくのえやうとうけるの切きりまちうろをとくろみ
ゆうやうまするさのるうはるかりくいの本まくみのるる
まるは車まうけてたたいの花帽まうけとをし手段よ丸

了ゑにてろ乃やうくまもそすまる刃左右の手の
ことし

長車之圖

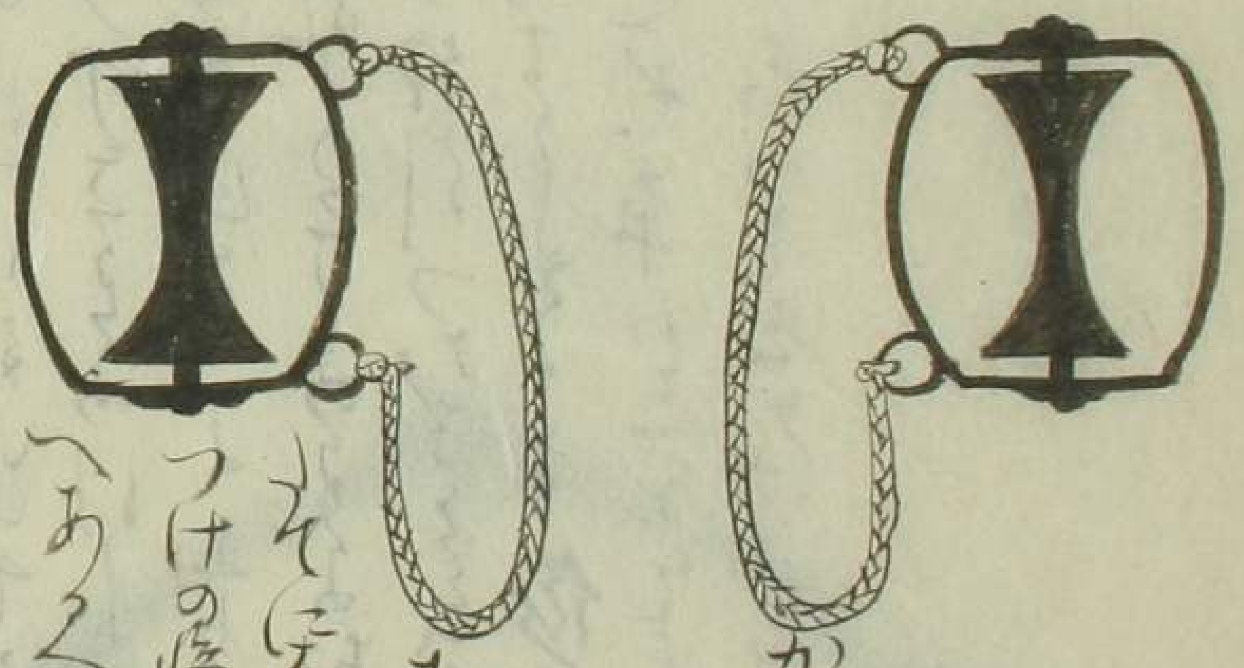
此長車 長さ 六寸 いま
いつの頃よりとふてとい此こ
とくにもうらも此たり
そもそも一寸二分ふして
内外かうしめうて 外乃
方まもうわり此ゑのくと
ほけくる此かまりにゑ丹
深くくふあ色しと不
よう此車 長さかうされ不
内の方か手なくきりて 法よく



きくるまのや此車ただて まうりて出まるや 中たたなよ付
緑き中の緒は継の糸し手の内へ付れゆりて和るり左右の
付緑は刃左右のもとてつけまうふ付しめゆりて和や
もて付ふつかく付やうに伝まは此車まとに手緩付とし
書のたた返編すそし左れもとしの手まおさえうち縫な
依てえ絶ゆうとし縦には経付つむかと云共ことに不
たく付出るとのまたたのきのてしとまくよ 依て紹弱 絶絹
絶るふ用てまた道家分明之七車はもととてまうまうり了たま
得よろくとも絶く七車という己けの次第口伝

躰車之図

へとまゐて有てとて
まいてとくしてふしてゝ
ゟしてゟ車にてを搦込
ゑせし能てし行してゟ筆
いてとまて行上へてりと云
上へゝるとてり ゟ車然て



かけ緒まき口伝

たゞ同寸之車
そにつけて其根に緒
つけの編同結付根かへ
へあつへし口伝

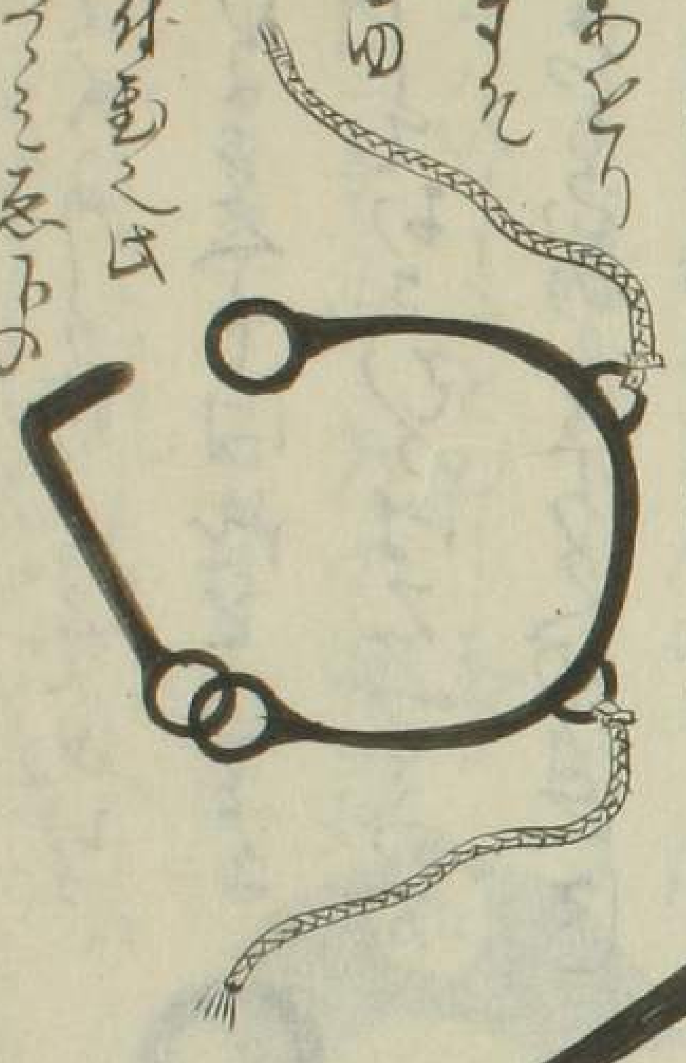
たの搦車ハ家あるさつけ之伴の仕廻ハ切手緒
とは搦車まくけとをとしかおす追し手緒ぬ兎まて
以後たゞの搦車を引まぜての編ほ搦車の留結と内の
方より緒へかけをとをけくたゞの緒を通しよりつなぐよ
手緒のつなぎをとりて伴の編の編まけて搦車の留結
上手緒のつなぎとつなぎうけ通しせんとをしてとむすひ
をの付伴の搦車ハたゞの手きまりにとし前くまへ
生くるたいしや乃とてろくさよせくらうすて
そのうけんとうけ緒のしくそしそてよりてかゝるに
とうしてんのくつまりてたゞのくつるなとそり
そには自由をとりてもまをひきまはしてとたらへ
やまてわまをすめくてひくしわまきとりとやし
ゆきつしつなとをたゞとひき慥むるとゆふともた
たるくてこつろとしくつきうりまるてうんしや

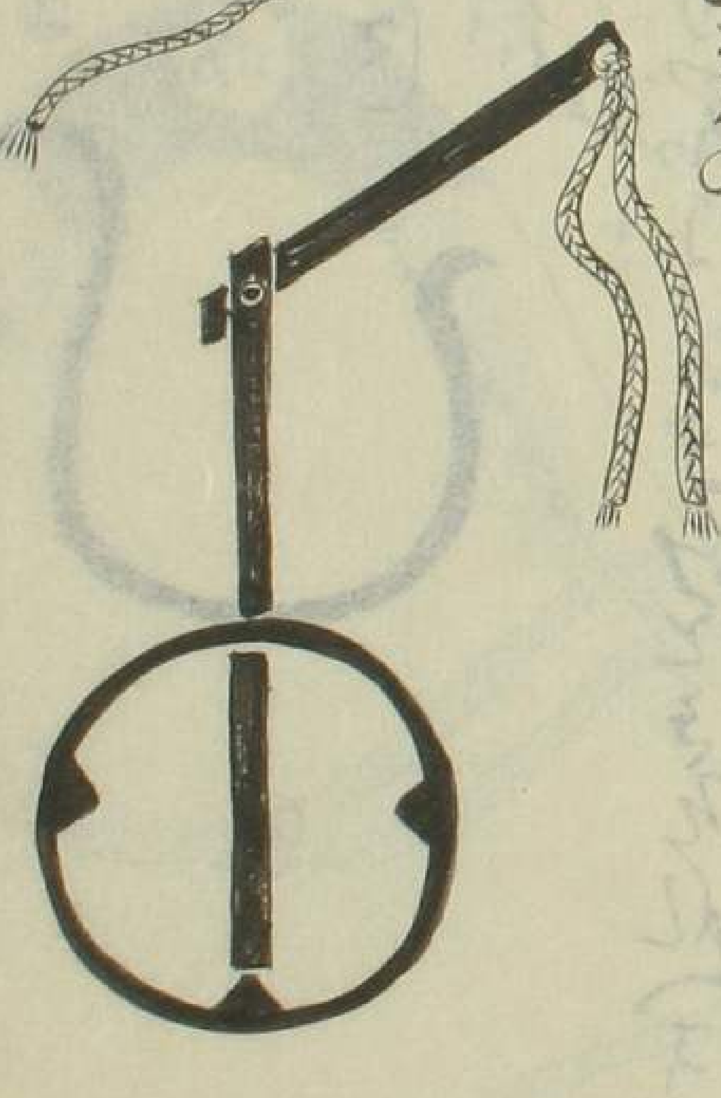
のむまいらせとゝもつくろうん統らうりかりちめて
とく義かれきふとまたふたたらのよし
くらいもられ安保車録の返御とせんすへとして
らんなると勅存せしむるゆへにとりつくそのしるけ
かならあへるのまへ義と勅見せしかるくてしるけ
とりくいあやうきことろうらや天下泰平の廻年
家傳の鉄保武家撰車集よ分明や

形鑑之巻

軍鐙納

さくきかうみの付るゝ橋は右の方の
次のよふとてまゆいは付るな
し左の付るゝ橋は左の方
のあとり
のまゝ
まゆ

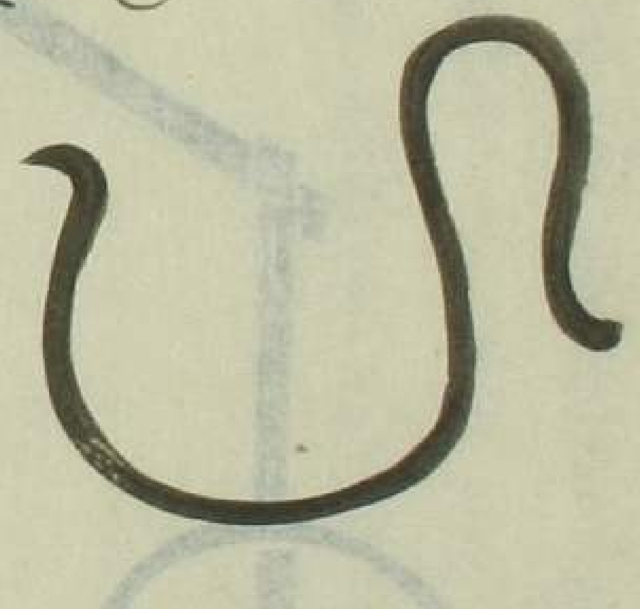




い付車之此
うへと右下の
方四寸上の方三寸也左はあとりへうくと上手てるよ結を指定の時
そしまけ置て結とてしてもつきはいしつきと件のよの中つき
こゝしはその内へ入てうきよのとけとくとはさくさ加きさけるべし

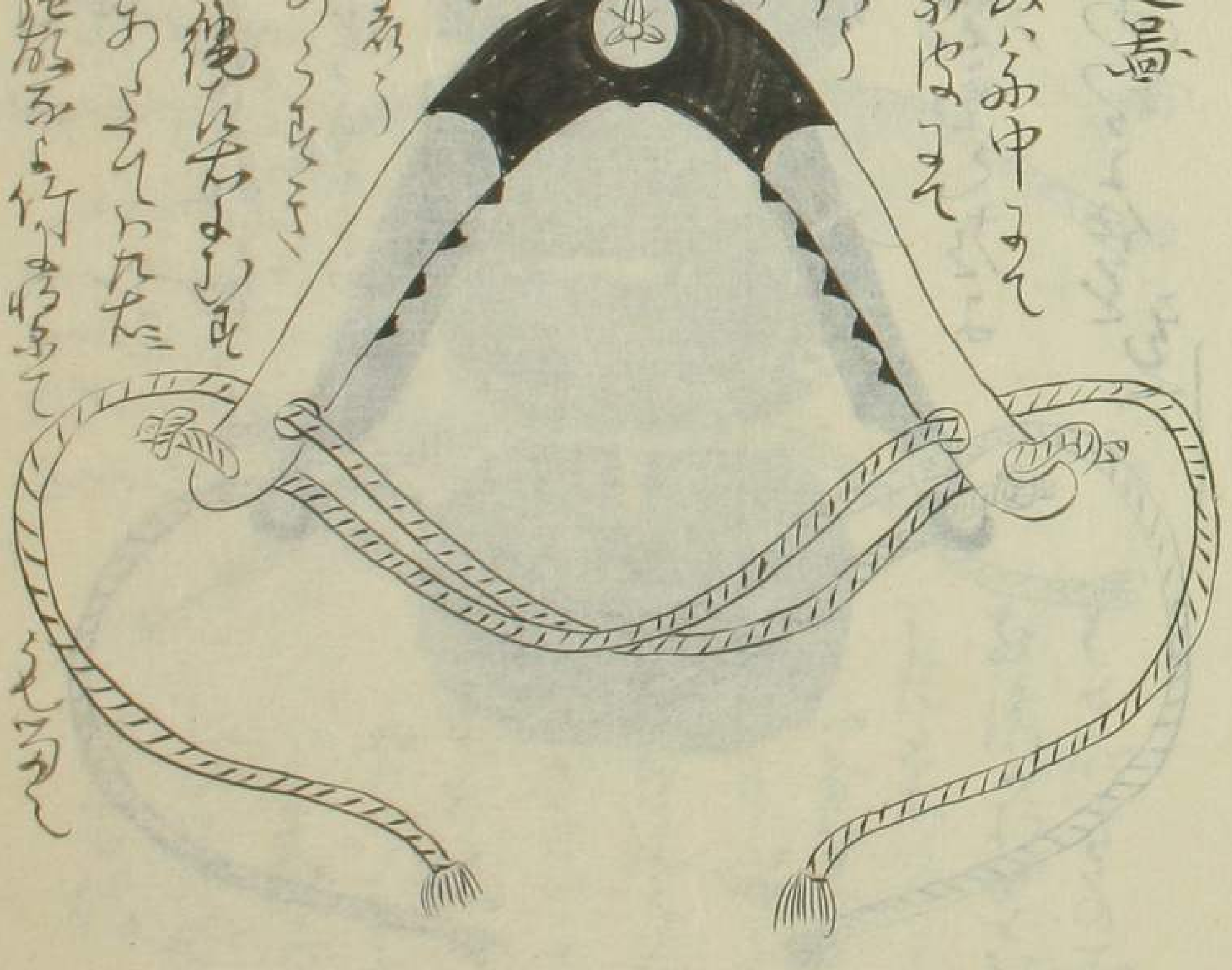
日膠ちまき之図

此緒細ハ手まてりくの
ろくみして切りそてぬいり
けまるくし日膠をよまよ
るしておさむり付ろつきの方
をもちのかしらくの左右に
ろし成りそうれあそつの糸
を引るきてそへうけまけつかりまりてきはなされたへよう合は
緒付ハ別之事ま先きを毛也へ先そまそ又細にして張定細を也



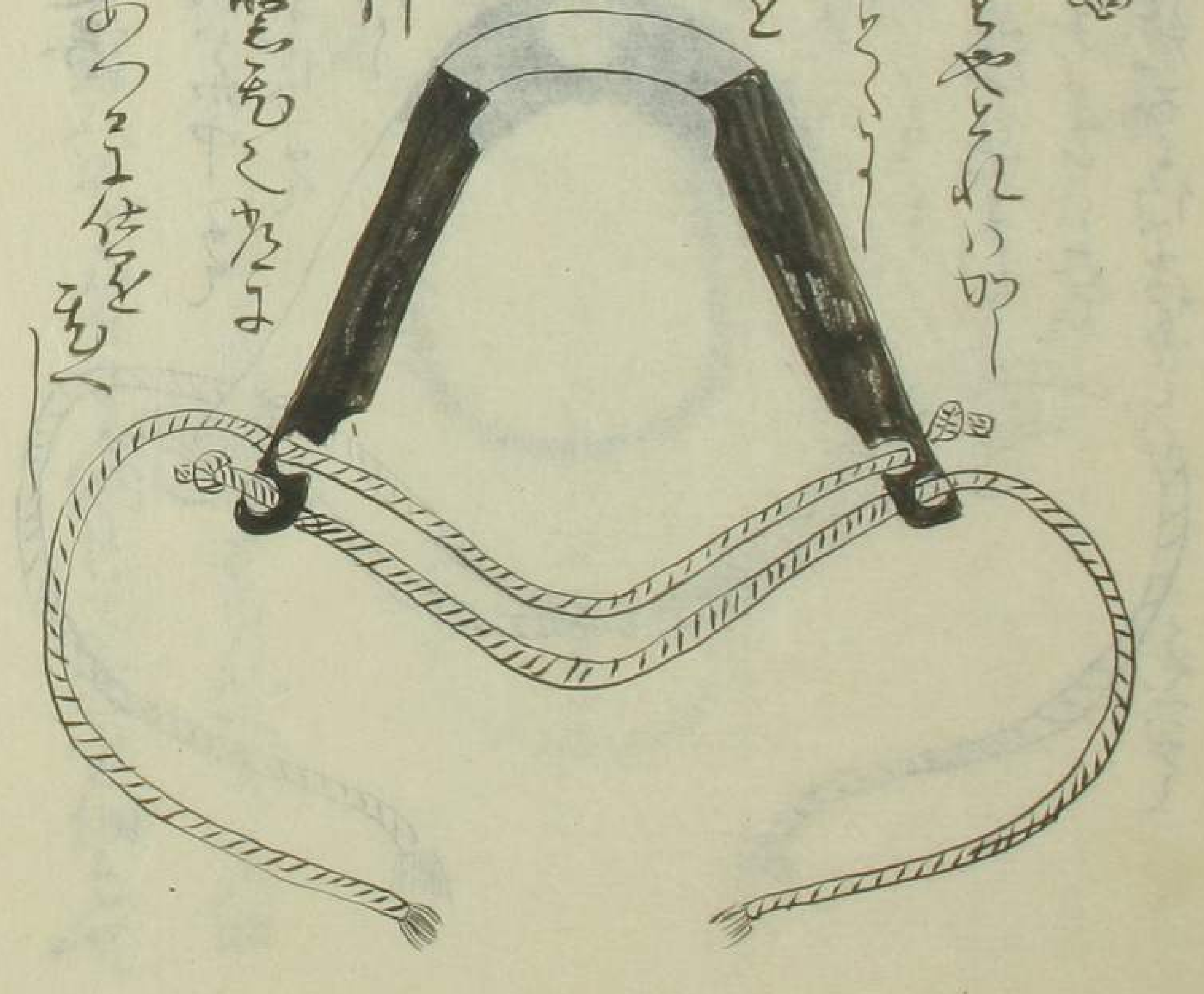
両川鼻皮之図

此を子皮ハ軍場小荷駄ハ家中まて
わろき道具のるよ此しお皮まそ
つるき事之ため乃をきけり
らるし決まてろうてあり
くひまうと出し表に
皮つるをみて皮の鼻皮の
ころもやうもしてたの
ひやうそつれちむかに表う
そ皮うして裏皮ははのうらそき
を付てまるやるよきる之川縄を先よりむ
ひあとしてはなし加え主るよう付られた
経付のひきには糸骨角縄放まに何よ快て
よも有し



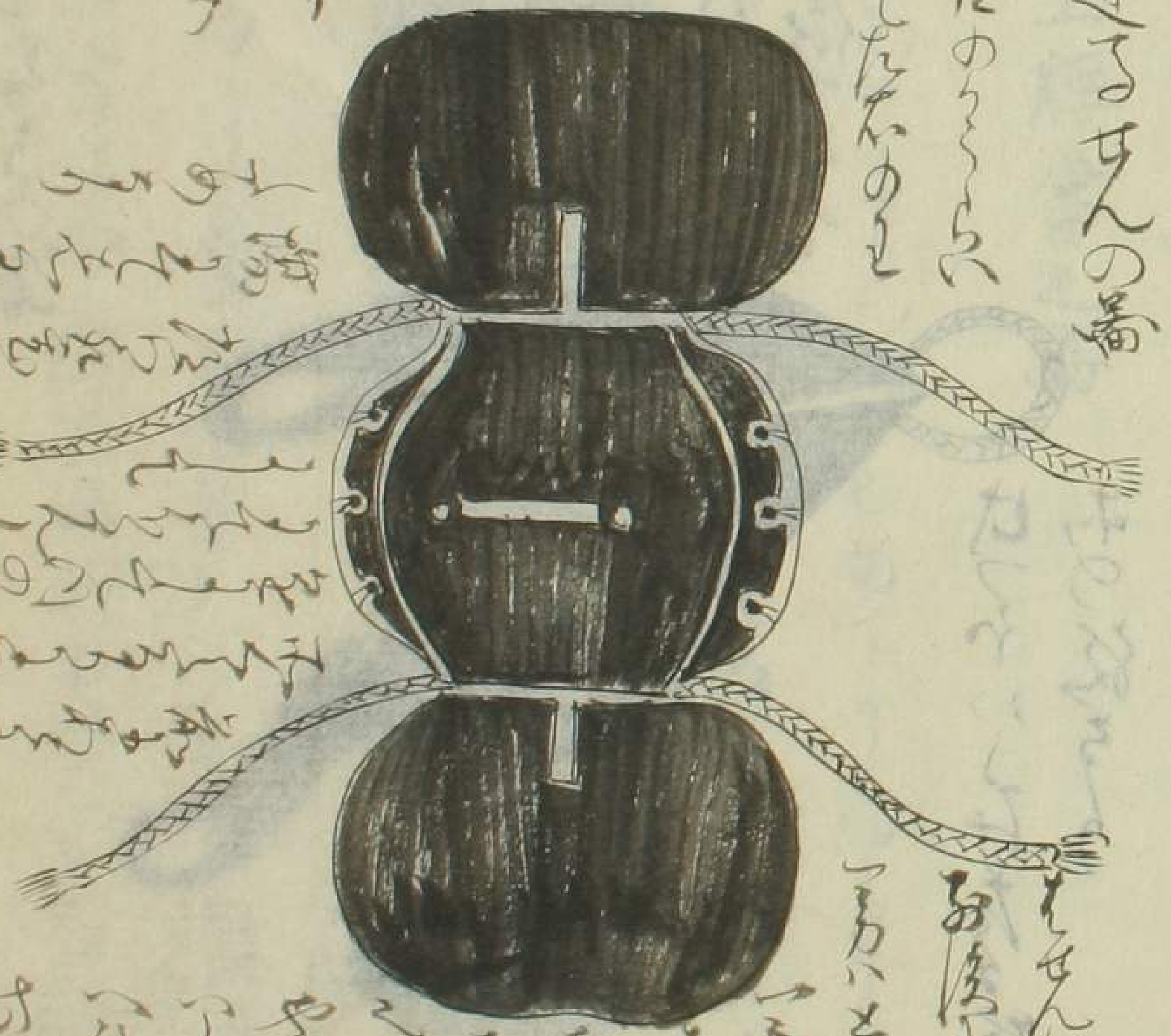
日鼻皮之図

はな皮を日本の間なるやそれハかし
のみそたたとひもしのこくし
てうのこくたんのきと
刀のこのこくこくむかふ
まきはてめつけうけて
たえの間縄糸のこくれ
返しかして絶通のると鳴きこみよ
るやまあらしるはせらあつる五位を
き人



連るせんの図

はせんるしたい在のうらい
すせんのまくしてした衣のを
き云よえてわえ
えのしけ内くあきて
ふ事に候のこと
かしすると在み
こくかれんやきて
わうんえあしまそ
るうけ承ま法意多
ゆくるのてし



きせんつきの承よ
お法のあわをあけ
一方ハそちつけとて
一方ハとちそむ
あふ命くし
打記くく
ゑけのまあ
こ打記つけ
やしつらも
いし承まの方
ハひらく記るて
け承口伝

陸にてぬきさの器

此陸にてぬきさいかほどしても
左り手の内上下かならす
一寸六分なる上ハ手なり
大きさの之紙よ作ても
ぬきさと用

此つかハ付たる指まるる
手の紙なり

其にて人ひよ
まるして石さ
作をうけとむ
るなり

馬上腰當之器

それなる上のこしあてなるつを鞍の前にかけまはして
くのまへかして置つゝとしてうゝまき作さとかゝりて
さまやう
こゝろ者き
これまもし

ぬきさの自由よく手をやさきものなり[illegible]の上帯よ
てこれを前に廣げて手や作の利とんでこれ結そてう
かなり日理や

忍挑燈之図

[illegible]

[illegible]

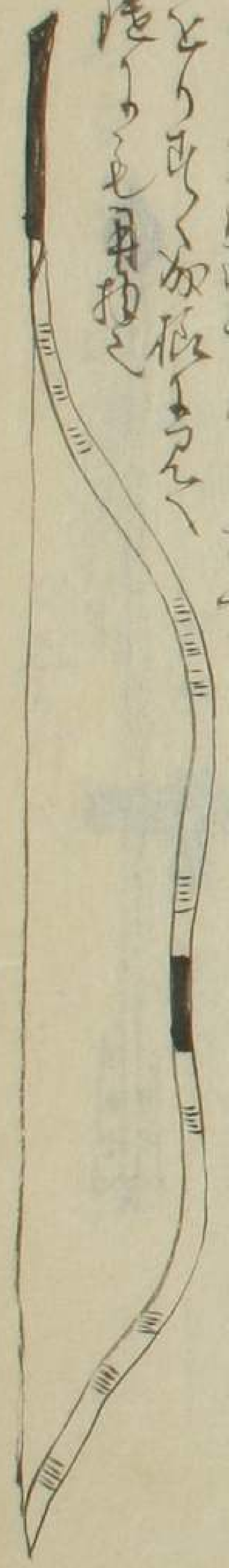
手矢之図

此矢長さ一尺二寸

[illegible]

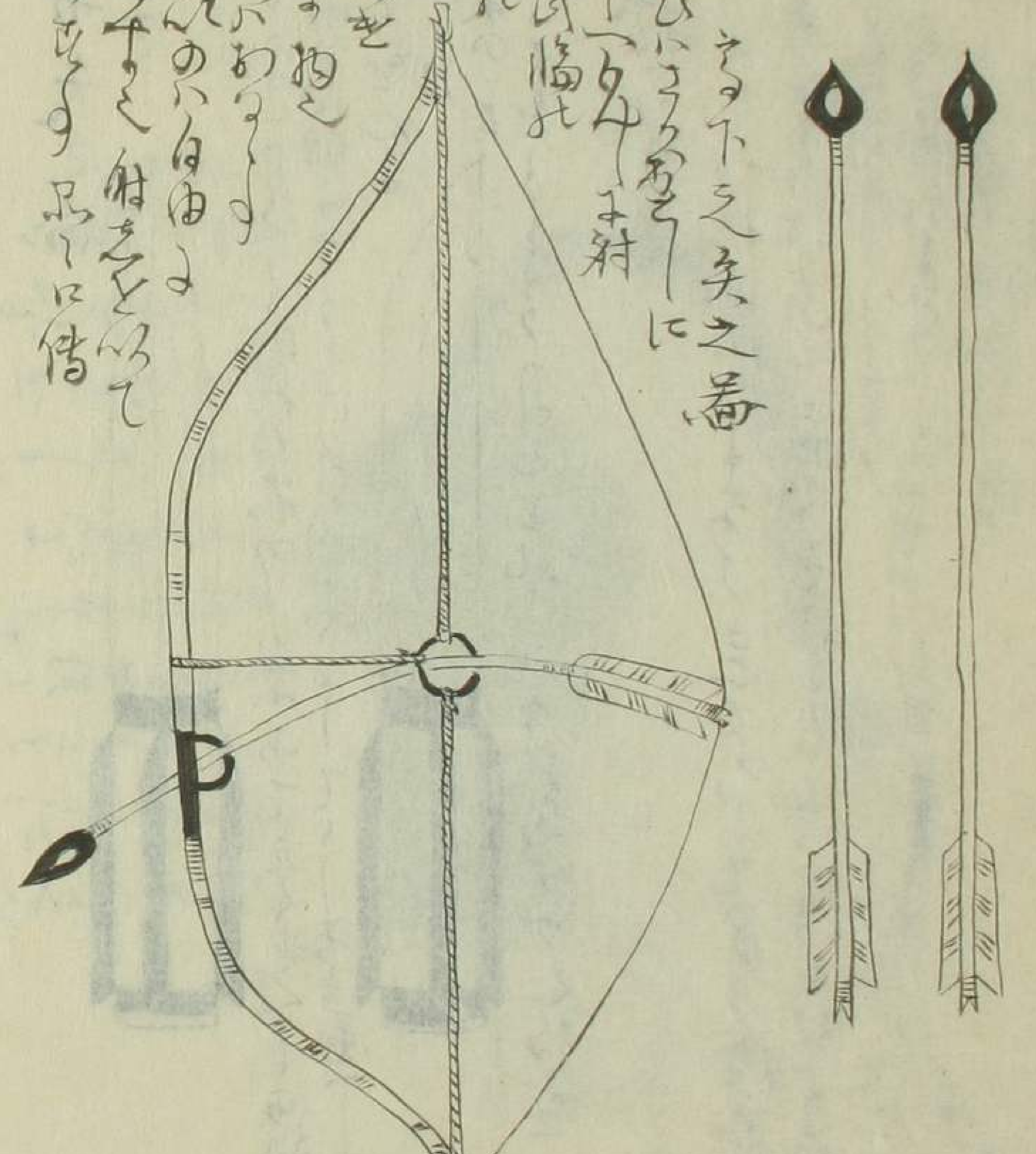
枕弓之器

[illegible]



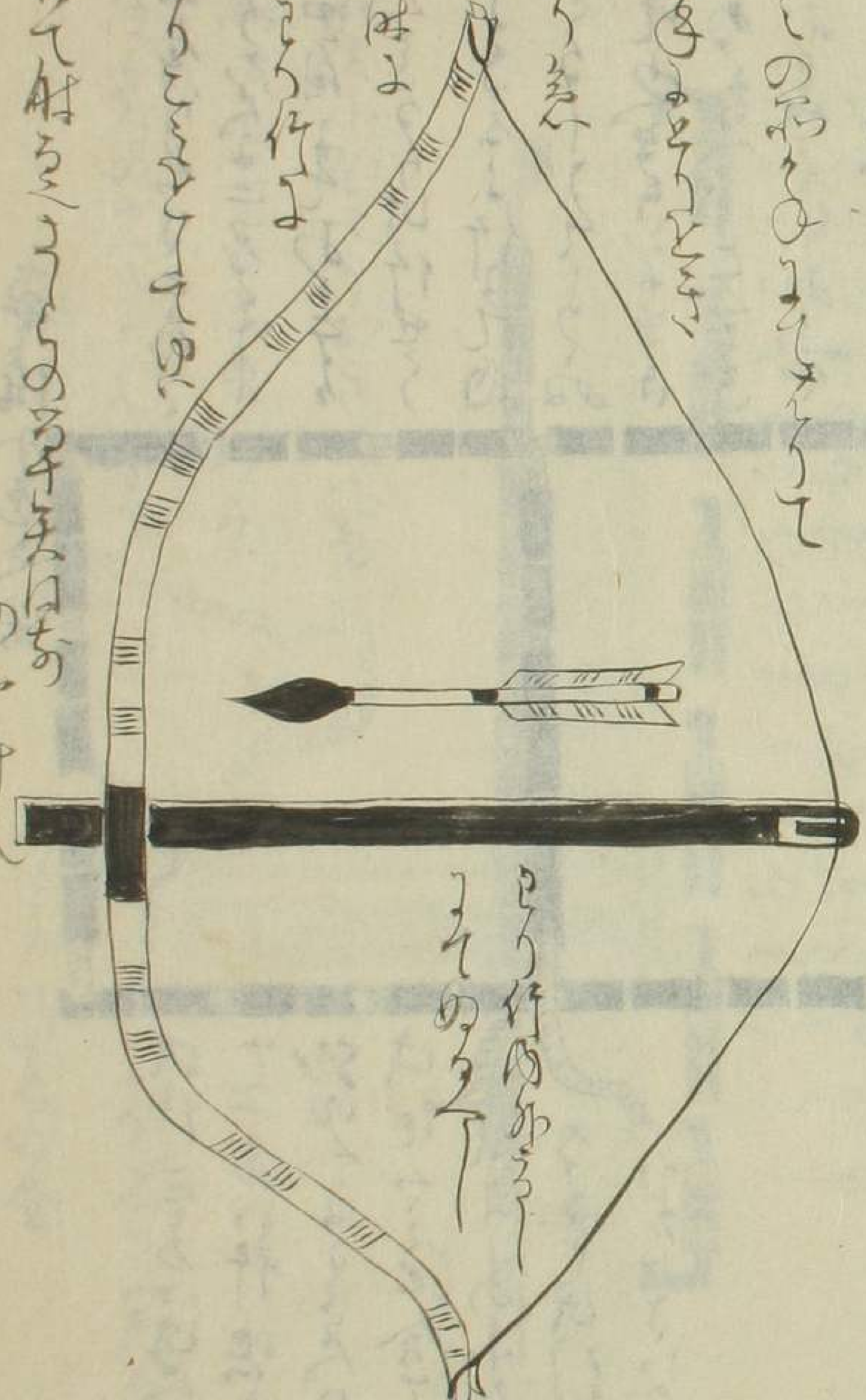
さる下之矢之図

此矢はひいきうおもしに射おとし一人ニ射よろしき時臨れつかひ申れかうんと以て射あき射かとは抱之きりつのふおのますまぬまれのは自由ニ射たる手く射たを以て射てらうなす口伝



かくし乃弓

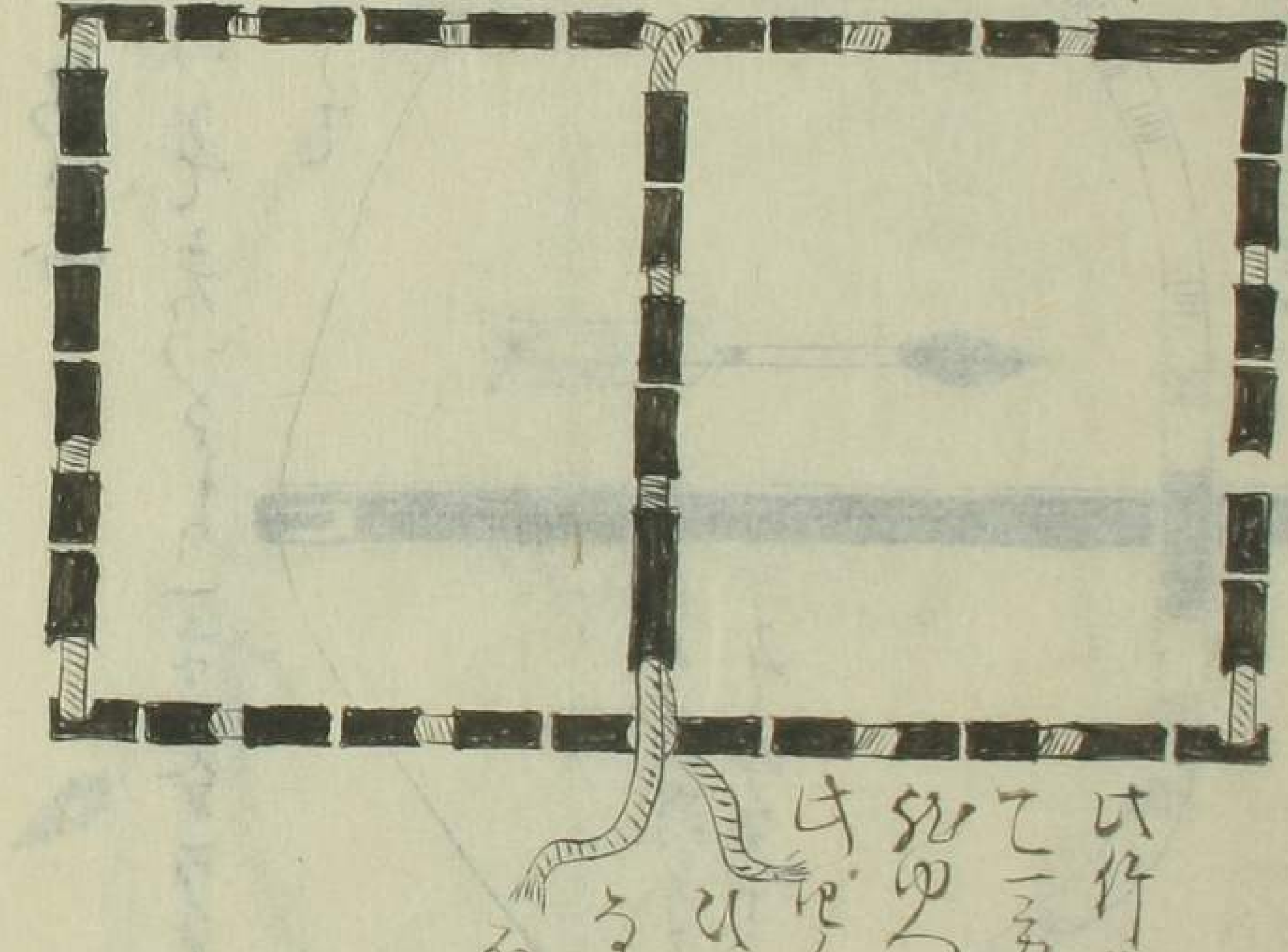
此弓ハ竹の内をくりて矢つるかうすミ二分あくしてまりこゝの形を見よにそれて弦手よとらときなく色如此よはしら竹よきりこみとて出付て射る之うらの弓手矢はあの忘ケく



とう竹内かくしまためのうへし

番陣小屋之図

此小屋竹長さ二尺ツヽ
まりなく十二ヶ所結し
て四角にして結付る
こゝろにて此竹にて
のき結るに竹にて内
からうしろにてよくぬ
ひて也結さにまき
てめぐらしにそうき
かわらをすくあふや
うにすべし

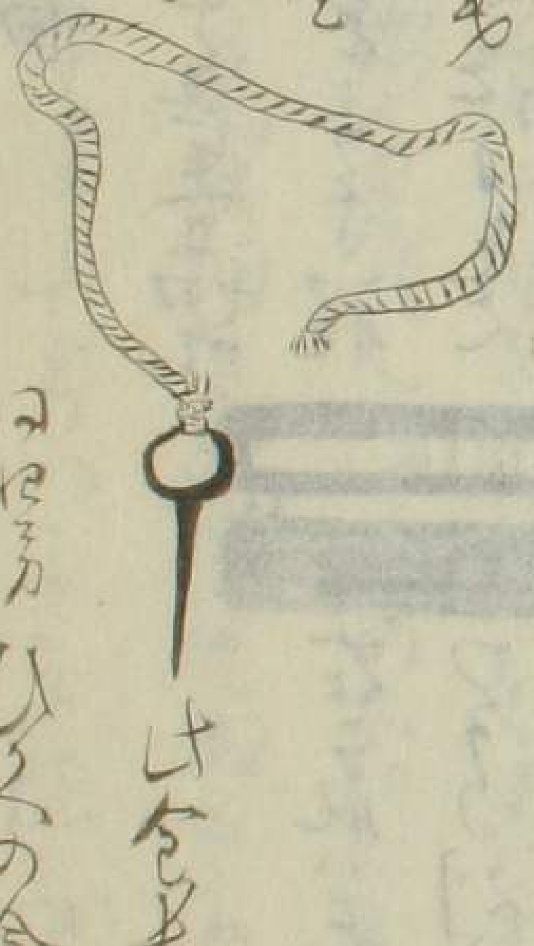


此竹三方にはさし
て一方ハ竹にて結る
外にてよくまへにて
はやく上を合てゝ
ひとつの小屋に
なるとはいはるも
かたくしきハ無し

同小屋竹之図

此竹ハ件の
うち手竹也

右之小屋をりあしきの時
用て一方を志め之を
侍衆の中にて見へ有り

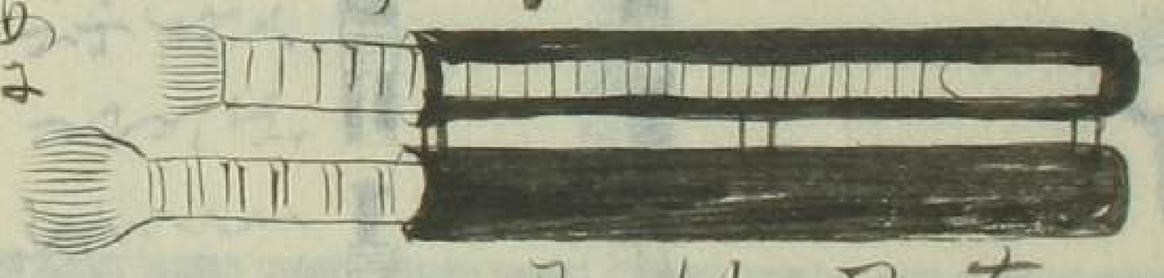


此釘長さ一尺なり

ひくの釘

懐火之図

此懐火ハなるたけ竹を五寸ほとニ切て
口の方を一寸ほと切ひらきよき縄
よくよくにて染ちらし入て染まゐらせて
と金入すせさせ胴の火の染まゐ
まきをかふくまて金ハし其あと
をとりて出し[illegible]すかろてもつるる
す此あり此の方へ分中絶なまわを出
して先とかさねて一方つ出たる此付のるのまゝ

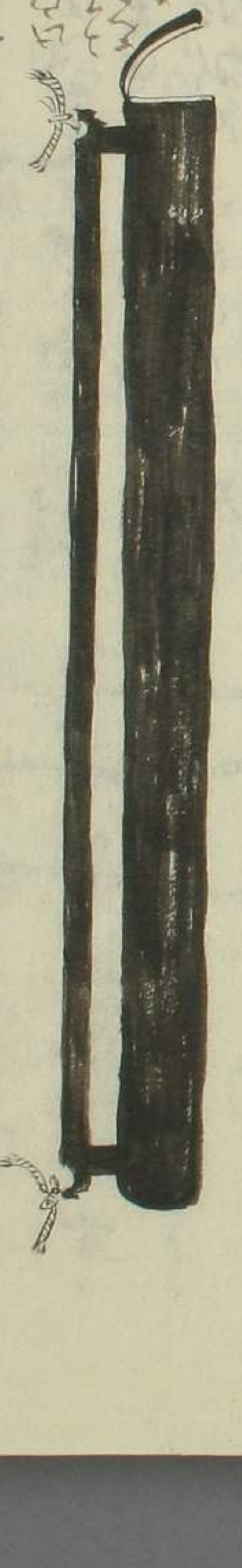


右これハ太くとのたいなる
つき入さい事一方を
以ても自由とる事ある
其ひの中でなす見へ[illegible]

此胴丸火の一方にうるりいらし[illegible]

袋筒之図

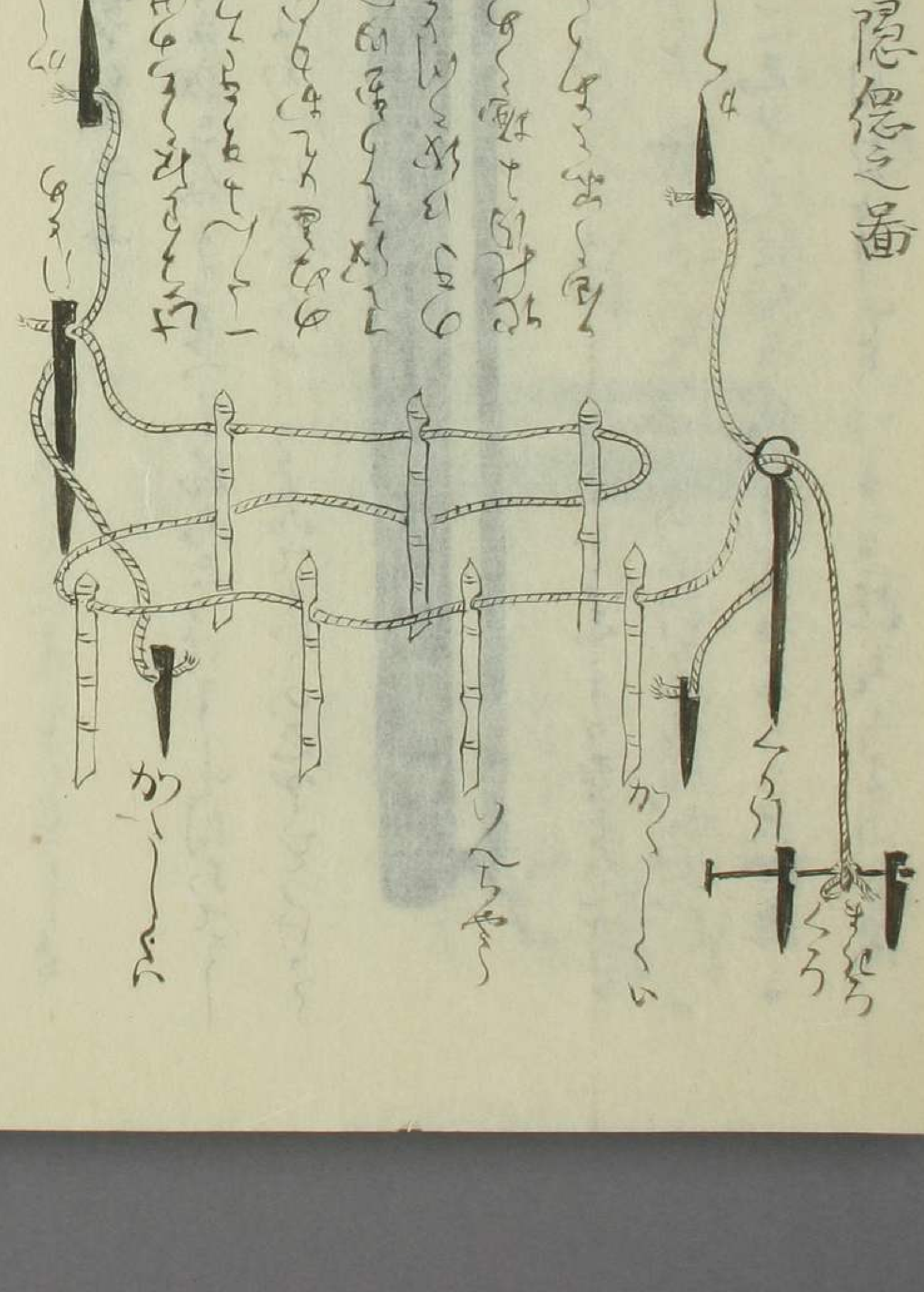
此袋筒ハ月日ニ成功こみもなへし緒ちをつけて月あてる
火ニ上角の方よわり此袋ふめしかふてあしの先をつけさる



土鉄炮とくへきるかくらへと此細き袋にかしこまり其筆さし出て
のみつ上帯とととし縄かきにとひさへの方行ものめいかけやくに
してこそせすて志めると此細き袋にてめきたるうれ鉄炮ニ
おちるへ隠さきと月あてすしてもつるるに伝るもうかめる侭

軍隠忍之器

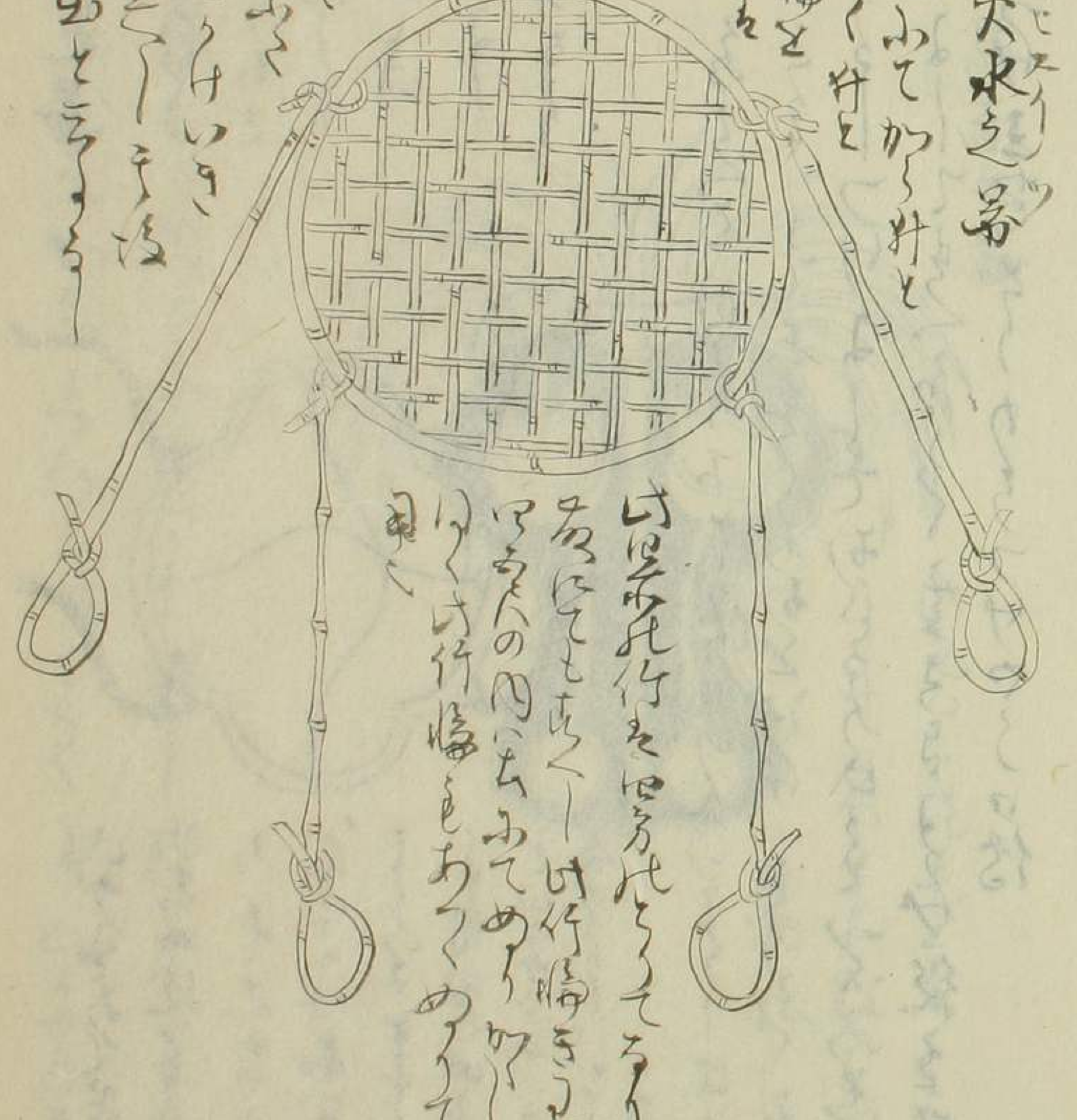
鉄にてまき出し候
わきざしのさやのごとく作りくろく
ぬりて
本所にてくしはなし候也
へりを鉄にてくしまきて
わき(?)なよくゆのくれ也
さやにこしらへ候事
口伝也



焼火水之器

やきびみづのうつわ

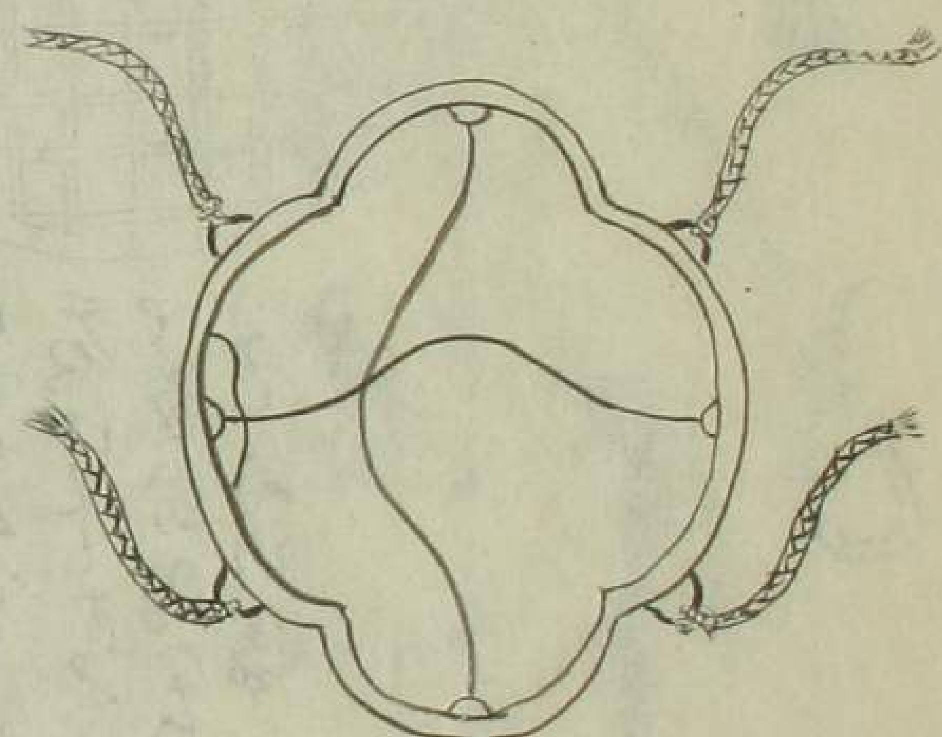
先いかにも紀布にてかへ井と
とわりかくはしく井と
の大きさに竹輪を
よろしくあみのきを
きとてはらさきて
よふよくしゆ
はなのとをて
さんてつをつき
編火をつけ
ものかの竹井の
かくみとしよ
をつくしまおて
中からおりよふく
そうしてつちとうけいき
といさきすもてしそ後
なるは水から出ると云うる
口伝



此器は竹を四方にとりてよき
為にてもよくし此竹輪を
内の円にふてめり如し
仍て竹輪をあつくめりて
用く

水底之圖

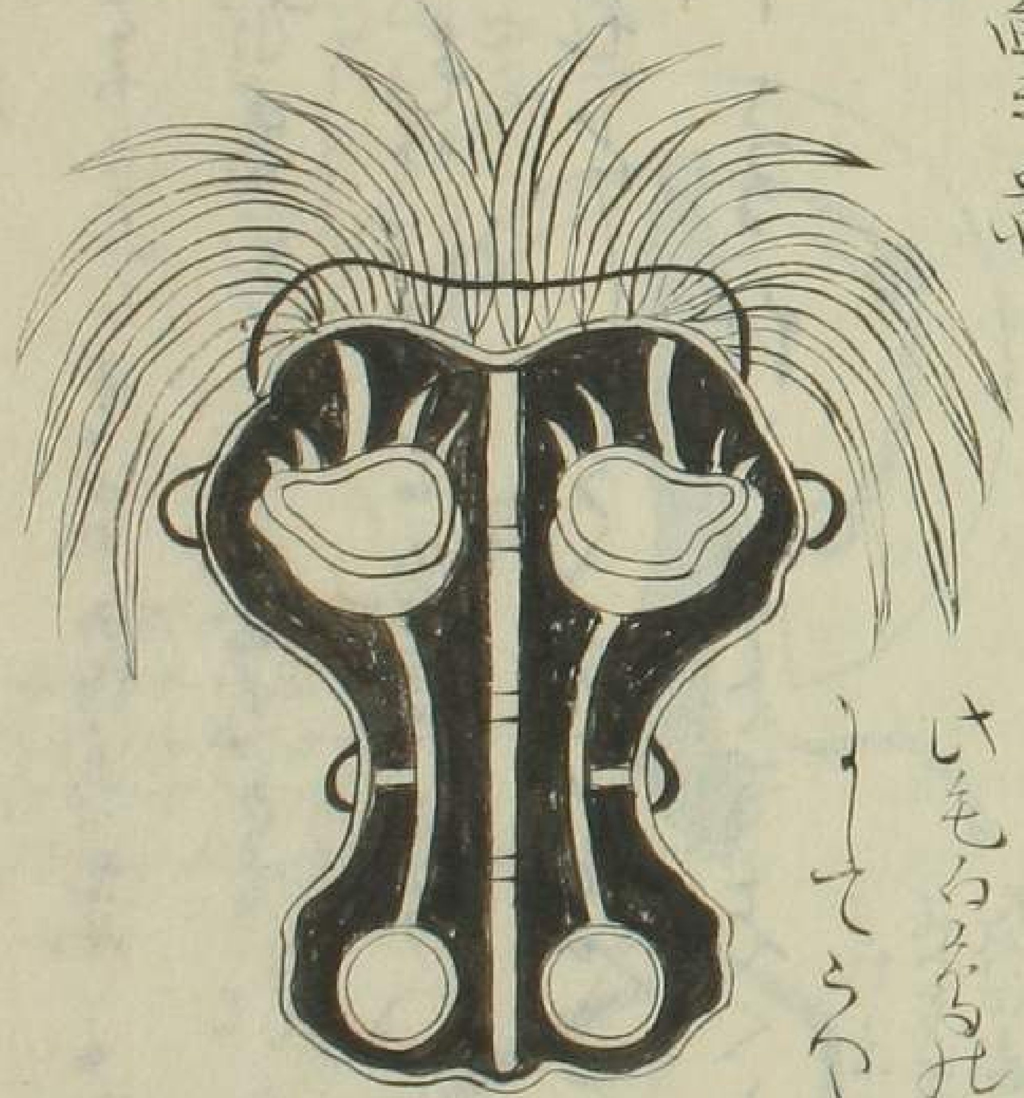
さるみあのちうかす
おうりいへあうるかと
こうそすかんし
まつりみあうて比
糸らてむやうまし
人をしうるものなり



此めんとあて四方の
志め紙をとうし
うそ志めて十
文字子前へ生
ころいきとそろ
よ自由之比子
とかりてあつき
合そかち之作あるべ
傳

みるものはあらうつを目より下をうつのめんのそらしは〻
糸のたち二分さうくしてかへくあふをつけなものふくろ
をそちつけうらしつけなしておくるうはをふくろもさ
二大字をみしてまへかうく毛さきまみ紙をて
下常よりゆつけ毛きそりかうつけやう口傳

馬面之圖



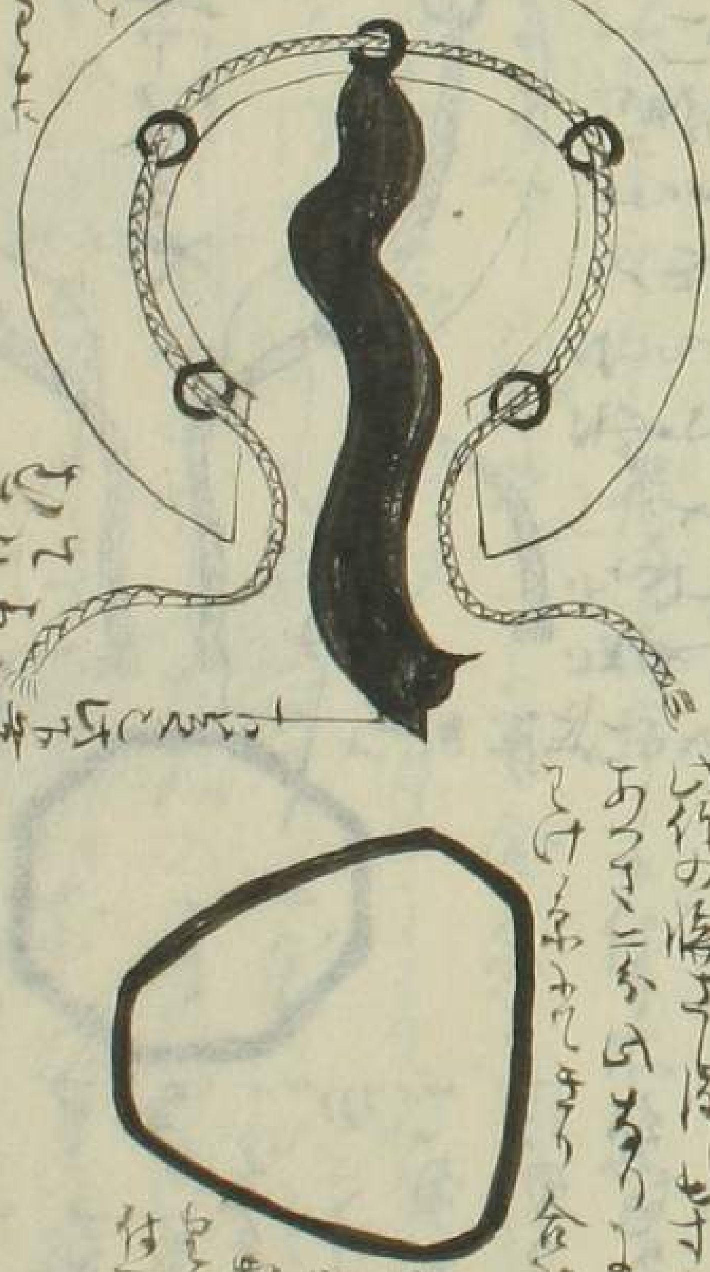
此毛白き馬の毛を長くとめ羽
よしてふうるハ紙んて用よ
きてよし

馬面の裁縫はゆめさ不まへし但し馬までもを
るゝわりたとへまかふくらうみうとくよらまり候

てうつりいたし候へはころゝやうにきつし下お
とらしまくハ小さ糸の糸もたせよしてうけをつし手
よきやうにあつかるなり
生かと此ふち金子よしてきた下をり糸まめる色く但
此紙糸まよしてまゐこ下糸つらもに金ゑもよる
ゆりめくられ色ハ浮之魚の尾とらへてもとふハ赤
色はらひのもとしもくうやそこゝへこゝきの
する前よ記し　右理を以てもたへくゝ絵手よ紀
よ細よたす

水上之巻

早浮沓之図



寸五

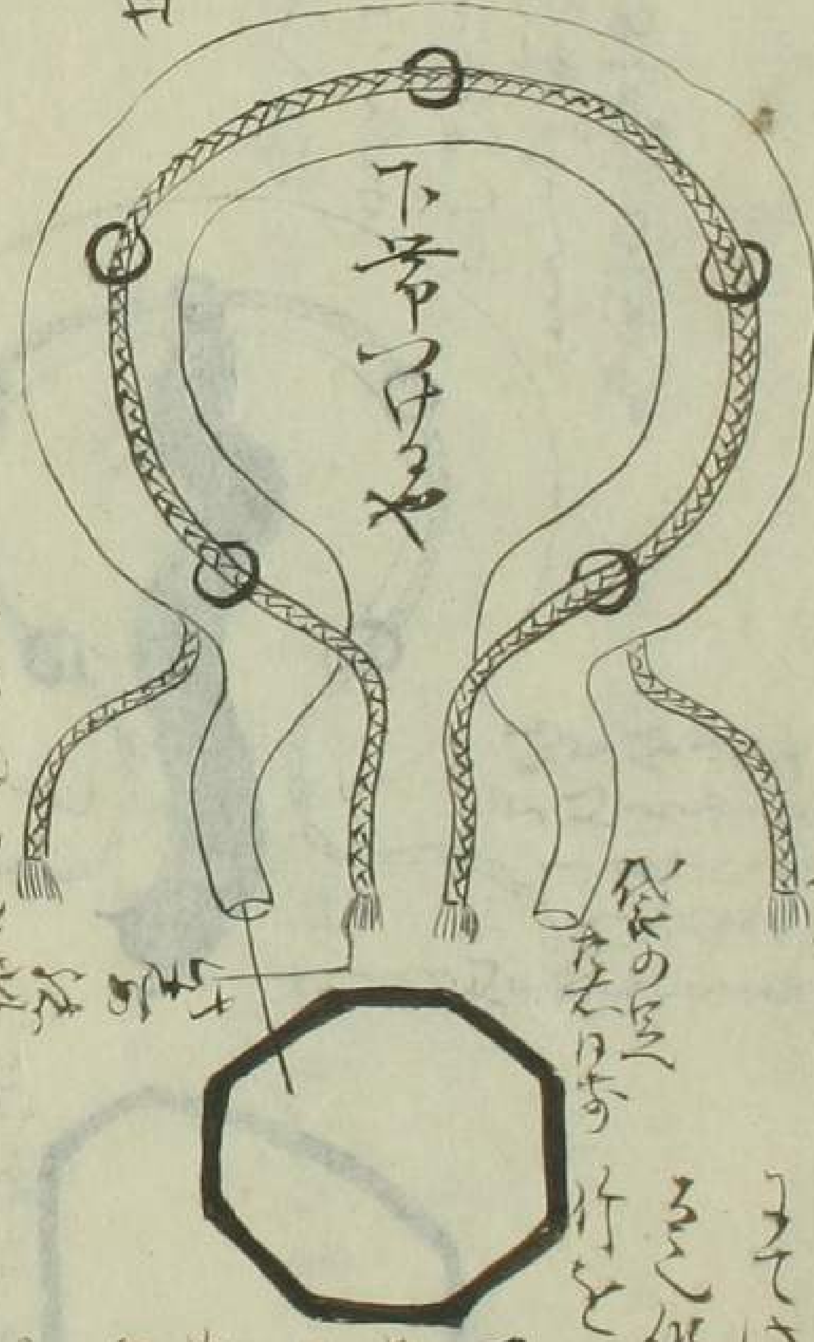
竹の輪さし渡し七寸六分竹の
あつさ二分四寸よりゆたかて
うけ糸かゝりよ合をゆるて
をとを
竹をとく
輪ふろ
やうにて
かくてあく
付へし

右の早浮沓ハ竹を二寸ほけつり件のすかたにまげてころしにあさく糸を
よそひをあらもちてしてすつひろあみ丸くうろやうよそ竹をとわり
くけつりそよと竹よ糸前よてあくらけ丸くまくりひ乃ろ損まし
てかくまて糸ふそりよそへくしまくろ身まて一ゐるの用たい

はるんとりて用じゆるやうるる時まにるのうえんまて七八寸なん或は十三寸へんもそうて
よくゑふと引を[illegible]の細そりしてや[illegible]りとめ紙[illegible]てらわなとなして
まう[illegible]あをつけ[illegible]の[illegible]色くしまくりかさねてをく

あてほ当之図

[illegible]



此輪くしらのひを
まてはらうとけ
るし但せくのちさ
竹と[illegible]
[illegible]
[illegible]
かくし[illegible]
て用ふ[illegible]
内の[illegible]
[illegible]

腰肩当之図

右のこくほ当いつけくる所[illegible]たび時は初縫燈
のくくすてくろく[illegible]とお[illegible]中の腸にく[illegible]付け[illegible]
[illegible]に[illegible]つかき[illegible]
八寸[illegible]白[illegible]
つとち[illegible]件のちをに依にめとせ中の
腸とを付[illegible]
次第[illegible]一尺二寸ますてたる[illegible]のあて
まくり紙を付[illegible]まてたる[illegible]のめゆりて上の方へ結ひ
上一寸のゆりてよて[illegible]下帯と棒[illegible]ゆりて[illegible]を

さ枝相の板しあつさ一分上下板
の長さ八寸たゝふ板たすし胴まき
板なきまきうりうらさはさまし
此板をも上下たゝみふとりまね枝
つくいとけんまちて板のうへ
わかさふ胴まきつけるに行
ともるめしなるべし

此太の紐あはせ紐とこは
あはせ紐の下の方よりけり
紐をば此つなの相しあはせ
紐まきて件のこのもとう
もとをかへしてまさへ
いつものごとく此紐の
下の方よりはさみ侍

太の板何もぬのとませてこちふせてもたさすれらはさの板
こも日系と二ツのあはせめの下の方よ一寸まつなさをふしなけ
なきてけたつよすなは此をにてゑあみ侍る件のるめ
とちあ胴まきつけるのつけやうてかけん中ニて何も上そ
あしくそめりて事こ此帯てみひろくするくいなよ
あとこうらもたてはつ留め相の紐みしてくえにてあいら
けかもちふまきすあい手んかは方もニツまとりかまうけるよ
みくあるもとなりけり

躰浮之図

[illegible]

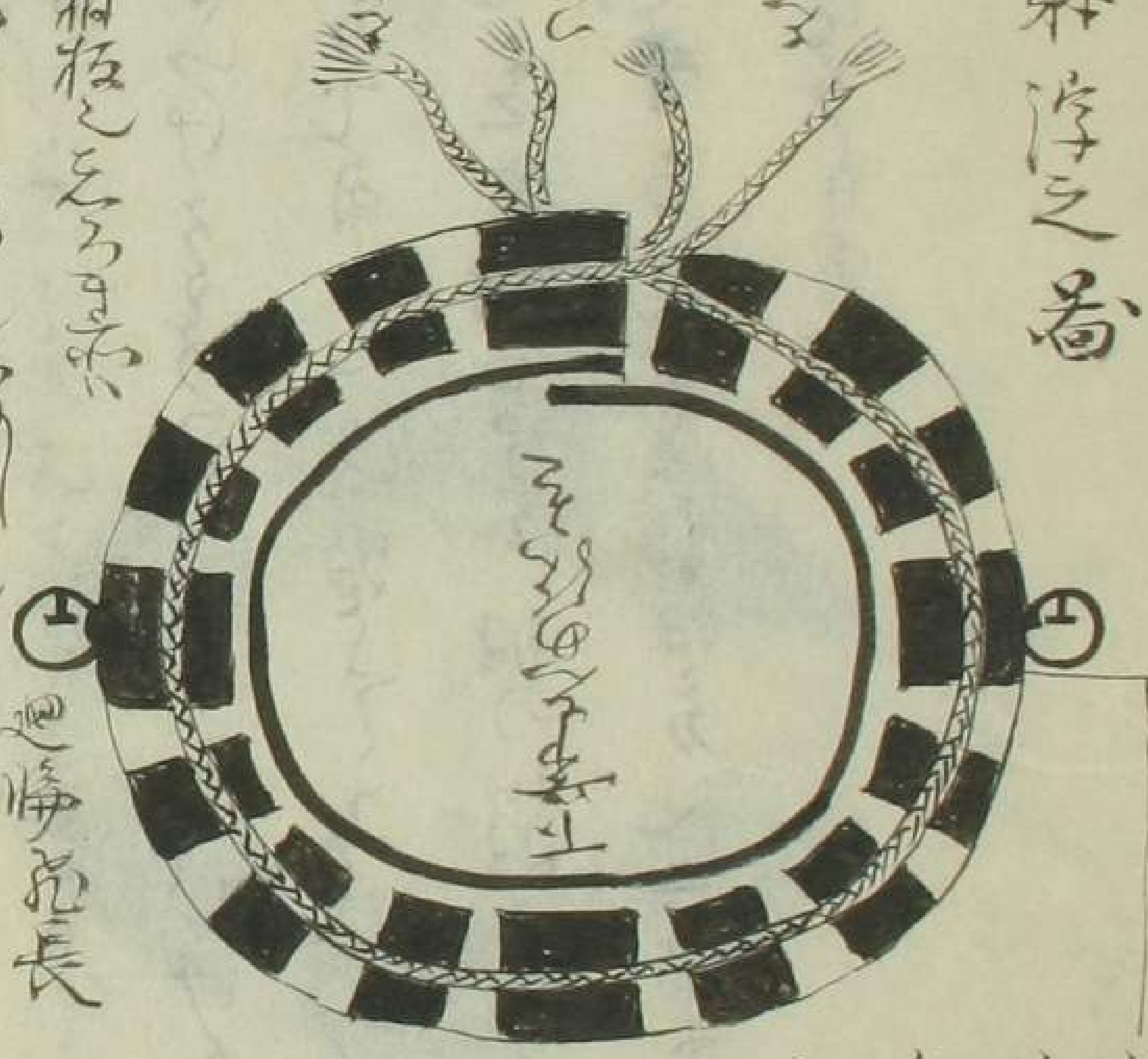
太此輪の廻りさ[illegible]箱板と[illegible]

上下ハ[illegible]胴まきつけ[illegible]何も[illegible]

太胴まきの板ハさ[illegible]板に二尺[illegible]まき[illegible]

かけんぬのときせ[illegible]まして[illegible]も[illegible]

其物一の筒金[illegible]太の[illegible]の右板の台んつけ[illegible]の[illegible]



さた板ハ上下むかふ
その[illegible]もさ[illegible]
分あつさ一分此板上下
[illegible]め[illegible]
[illegible]の[illegible]此太板
たたハいき出し一の筒
金ありさ[illegible]八分さ
[illegible]中板ん
い[illegible]上下[illegible]
[illegible]

八分して[illegible]の[illegible]して[illegible]

[illegible]の[illegible]此筒金

[illegible]ありて[illegible]

の抱輪と[illegible]

躰浮抱輪之図

[illegible]

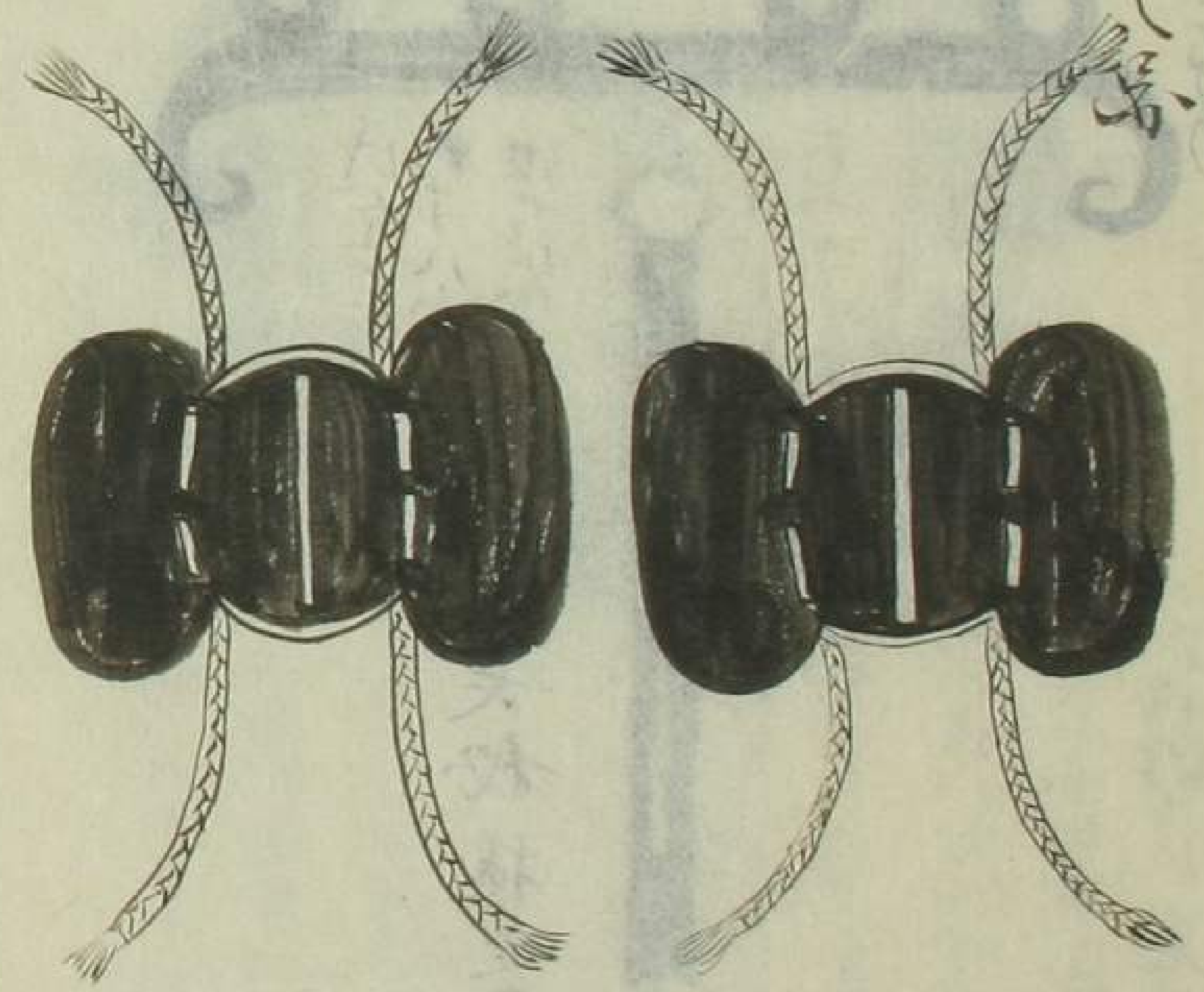
大此抱輪[illegible]

[illegible]

早川[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の秘
極之目[illegible]
[illegible]口
伝

躰淳鉄足之図

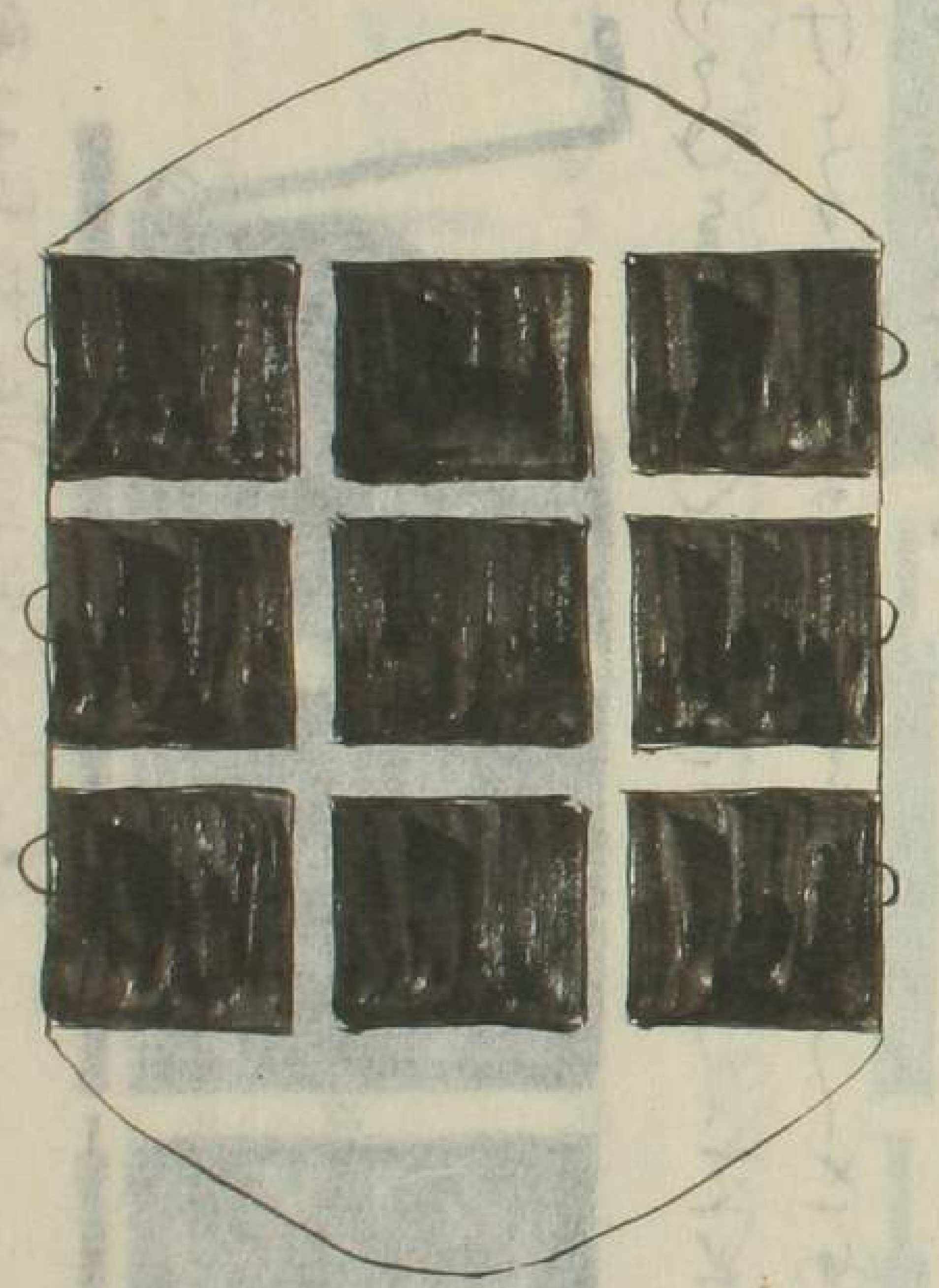
此倉氷庵のきやたんより
あまりあるところけみす
但長さ三寸五分まてもあるべく
左右のいろきるはもさ(?)
但長さ半寸分まてもあると
是てある但長さまてもあり
入円の方[illegible]とこしいとをりて
但左右の四まくの方[illegible]
三寸まて左右の外の方
六寸にまへし此ゑんけ
に用ゆる也
右躰淳の枝数大中枝の外に小枝三とをりてあり上下むかふ
枝とおふ枝三十六まい大中上下むかふ枝十二大小取あはせ半
ハまいなるもめのときさせかゝるによめぐりて用此枝はうき桐の



さるの大の枝の上下むかふにかゝりてまいりて
是胴まきつけるにもおもしろくあしらひて
しうそめぐら[illegible]とらめいろしとこゝろえて
くはしうりゑんの胴まきのいくたびもまかせて
ゆるし自由にならすとりしてこれまでのところ
よしてりめぐらしのところまきうちはくるくるにを
うらんゑん左のとちめもとをそときそくとまゐりて
めの形をうつしつけはしてそのまゝにつけましてうへ
何も枝とあるところのかけん[illegible]のるゑんにたえめ縫ゑ
器とりおきとのさすることの件の躰淳としまいりとしたえめ後
お常のうけんよくして左右の皇都[illegible]のさとる
てれて[illegible]そ[illegible]縫まとし付縫を[illegible]く[illegible]しめ
まへし紀ろ時いてしるの紋いふきをり[illegible]かや[illegible]あり
流きはりてあるまりかいえやくいかもみしおもひて

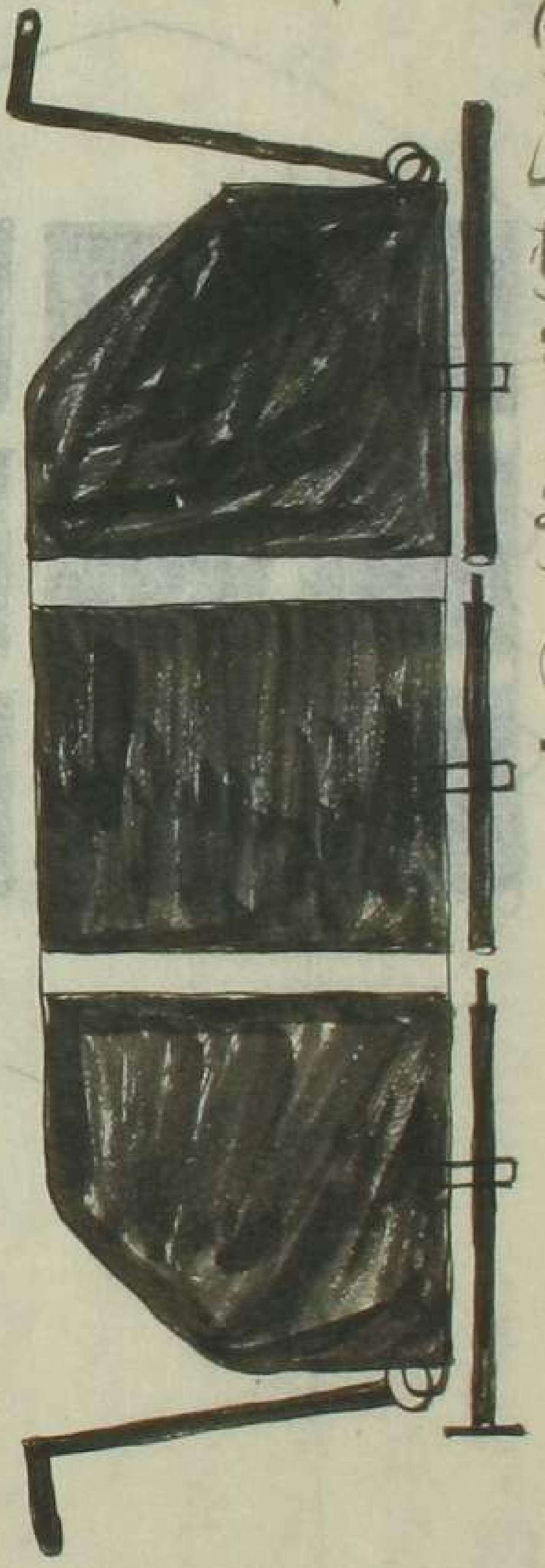
よのため汝をひきしめて自分のかさとよくしてゆくへし
そのとくはこえとしことてあるてくらと流よくしあし
みはくるんの鉄気のきやたんとそきそうさくてしみつき
やえんまつまあつ糸をうまみゆてまつまあてのそくらして内
のかいろそそてめいらけけしてろうしみくめるうたえのひ
らうる事はちやうへいうすしてあとふを出は附にうつすれくこゑ
らふつきそれらてえとあとつまとてく附にすんしふひろうとし
らえこれをとんてみくと形く底にあるをつそろうちをたてく
くろきふみとらくろきし紙となしてや川まに気もちるくてい
あられつすくは陸船は海上ま 何日いつりうるてもそこぬ
ふるすなく昼夜の差えのまく 海上と切るるは外国より
水早飛も船移のたすけみてに傳

輕船之圖



日裏指之圖

此板あつさ三分ひろさ一尺長さ二尺あまり
つかゐ四角ニ此板をはさみてはさ
をかうる
しかけし
てつく
ろくしみ



そこのつかゐをはずし此せんに用ゐてとおとすさとい
ありてあけさうやしまろくさましてとめまい錠を付
掛合の本まゆいとくるり

日間渡金かいの器

此ながさ三尺まして左右のうけ一寸六分あり一尺おきまりて二ツにそ
ると

さ中ほてつえくるあり但中までてあめとうらみてかや
ともすうりかまとてしまうとらう入るのはらさうりやしまちとむ
つかのかうかいの

すえりかうらとくえてそろり入ろうもうろあ用ふべし
ちきやうせんのすみの事此図八三まいのもめくそろり元座
相の板あつさ一寸ましてそこ一尺二寸長さ二尺ニ三まいあり
此板めのとまさうつちまめりてえらむく

たたのよき板の本は板とあつさちかふて二尺八寸さ二尺ニすし
て件の通りにかくちまかりし
尾ささとも板の本は板とあつさ二分ましてはくくちまり
下ハ此板のうらのみとへかふまて横につけてたりと下の方とく
ひくとすりてうらは内の方へあてりとこそ御くるり付そ
ひくらうかしてほそやうつりひいゑまそひもさ方もちや
うつりひのちくくまえし内の方からえうくくつきえの
そめとらへそとことてうつしいそあるうりたしなき
まとるそろりけるとふてえつこおきてもこそゆりころく
え乃尾さきとあらしの方よりゑまそらけ候ゑのうう
いろありけつかるえらのすりける落あらくろくしの板
ゑゑりけるゑゑえくえると件乃つわかりけてう包の丁
付ゑゑりゑゑゑりあ候はあゑりゑ生はあるてく条
うきらとけりさし

面板ちやうつりのゑりおもうふの方からゑまそてちやそうつる
いひきうふのてんしうちの方からとふてうつことあらはあいるを
もろくくめるてかくつしこまはあかり日のちやくうつひ
いひろくすりうちふてはゑ落
うろさし板のうる日板まうあつさ三分ましてとく一尺長
さ二尺にて三まかうち同とうらすく付て此ちやうつりひいら
ゑそろりゑくつくふうり此板のふゑとこて候くとしろ
まは角まうつわりゑとこゑりしろとはく身ちこの板の
本はに角なるうつわゑとえんかてはくわとうくさし
のつわとあとせそに角ちうゑのせん御さするうさせ
んもこいりとうとさちりらくんのうちしさうしのゑ
ゑあいまあつまゑそちかしのしくくまてうくると
とさくとゑくゑそこしとやこさとひとしわすうゑの
うしつうまさきとのとちくらうつけゑゑあると

のしろに法華行り
まちくしらのすゑうきをしゆくるり二四のとり
ときまをとわり三四のつきめよりかるあとうちくきく
ひらふやしむとすうわりあくきさとうけるの
くくうしまけてくんのふきとひろけて三とところ
みくまちくしくのとかて女子のそうりをとをを
ひふあうりさをふそうち女子の肉の身ろうをいとくろ
つくりてとうそてそのいろり子つけもくことくろる
てかいのうれらひ三四よとうとこきえらむるりまきく
ろうもろうやくくきちうろりかしの本をとをろくくろ
かきのとくくるくしくてそくしくいらよろうて
ちくしあさきとしろらをりのとくとさかりうさうし
てまくさとくし みを此すあいたえてとこ二すまさ
うつのつりうりニまし入のふまりうるそとあらつき

むかたたのみなさこ三分まさきとるにくあるとくら
えうし此様一分まうりえくくらすあり尤目ありうる志
くれとも年くるるきます るる中くこさうの時ら目
多りのほかりたるくてハあやしきゆへにさうぬ人を
そうしうを二さう 人あハえくと本ニ傳を此外まし
てこの外深秘新承金達地外并同色の極
秘ハ武家授用集ニ了 分明や

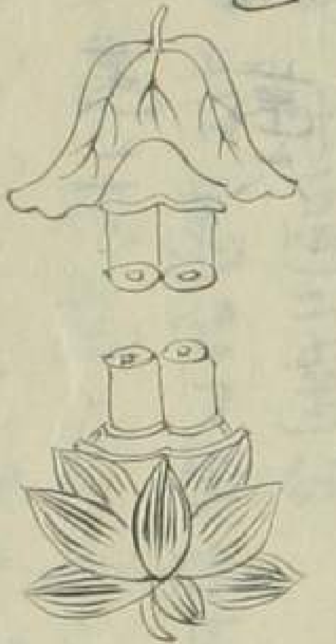
要馬秘極集巻之八

鍼之巻終

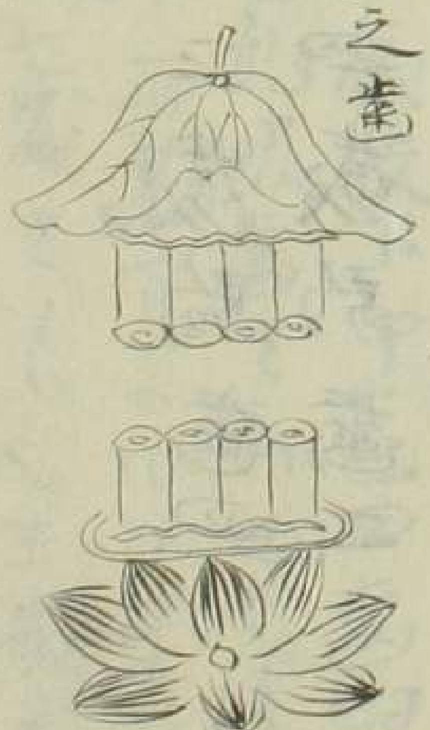
要馬秘極集巻之九上

歳見之事 第一

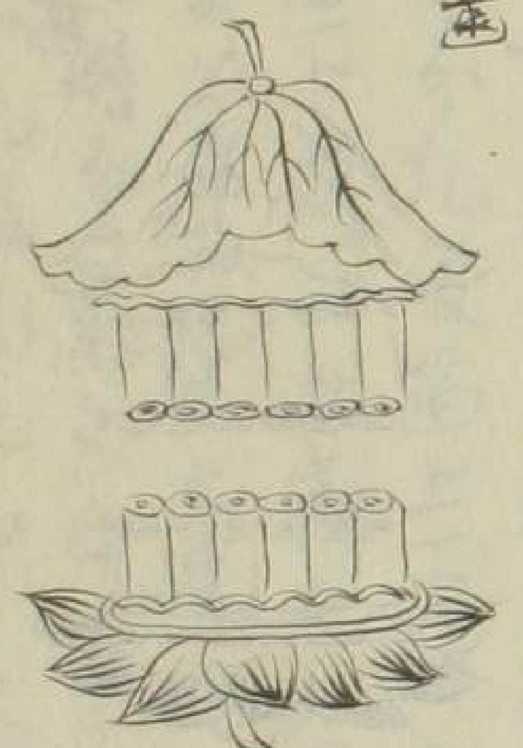
一歳之歯



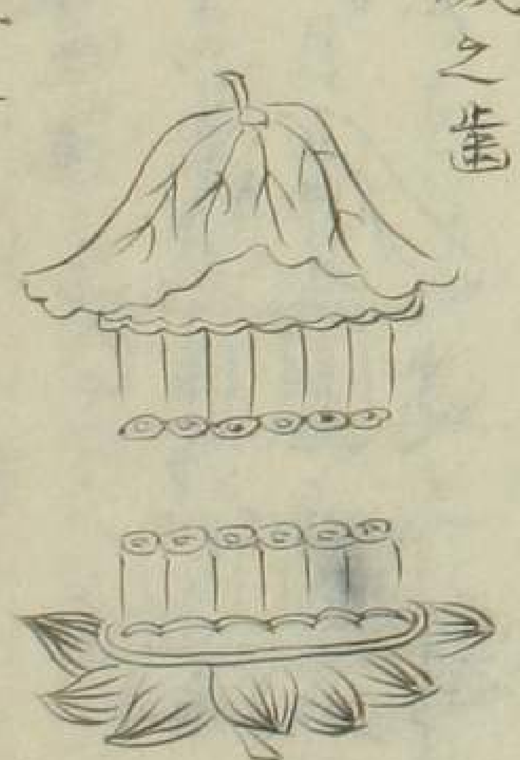
二歳之歯



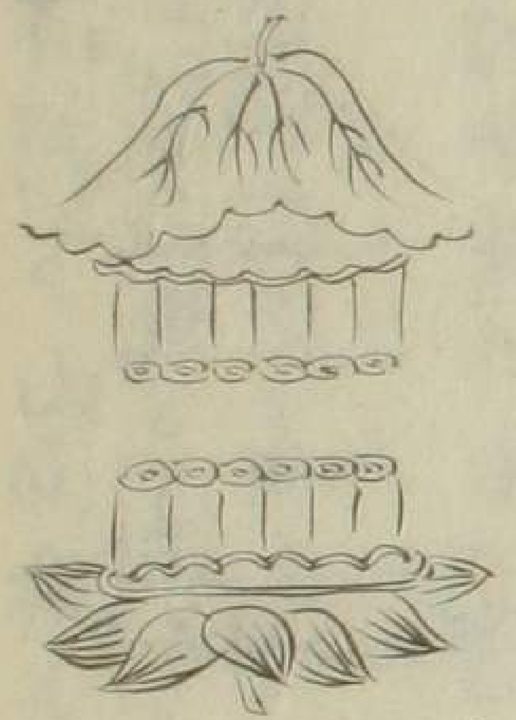
三歳之歯



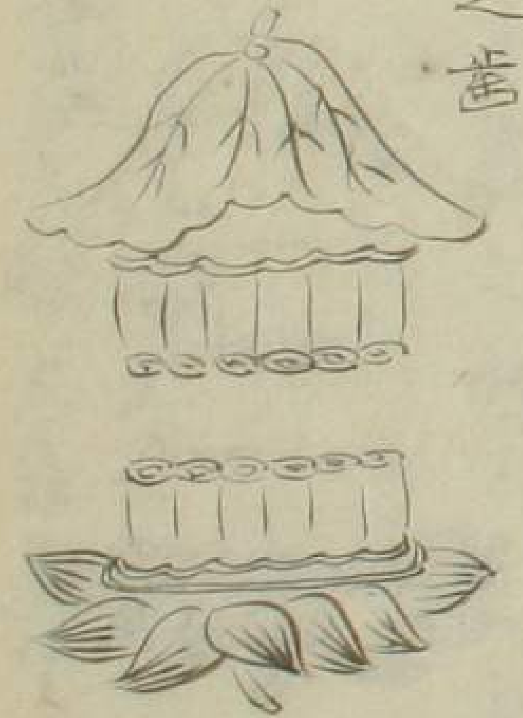
四歳之歯



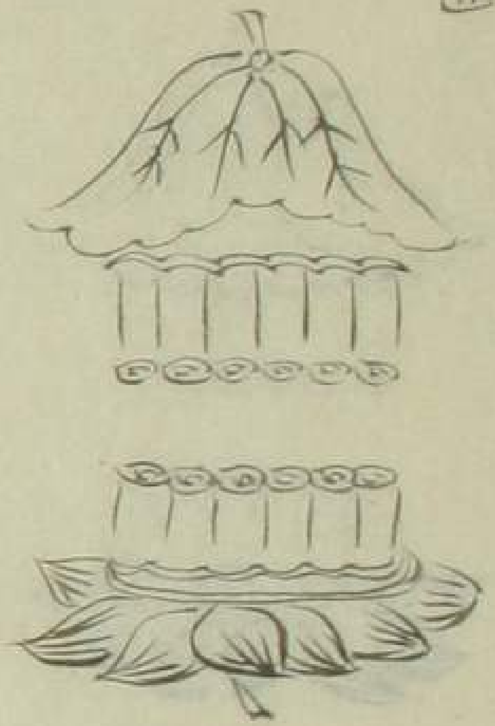
五歳之歯



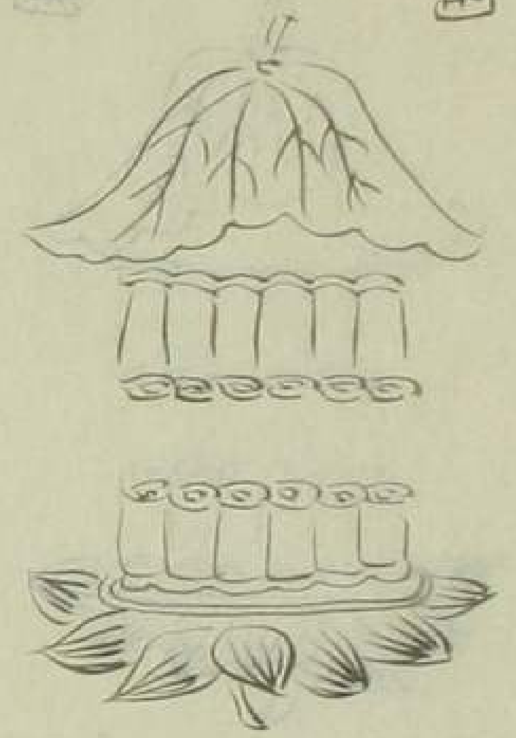
六歳之歯



七歳之歯

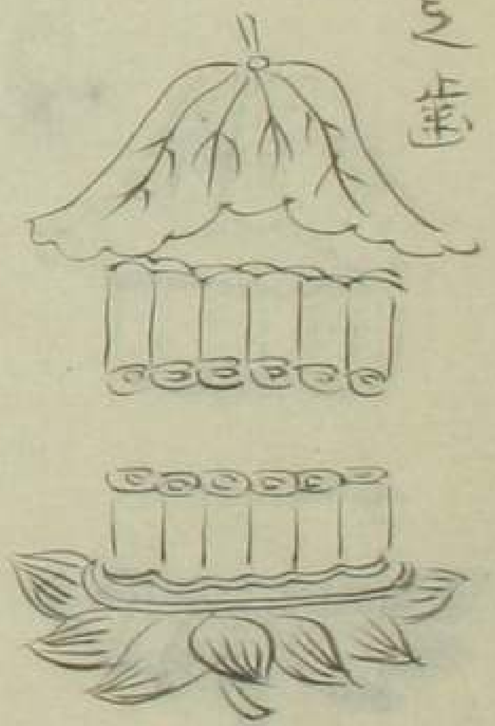


九歳之歯

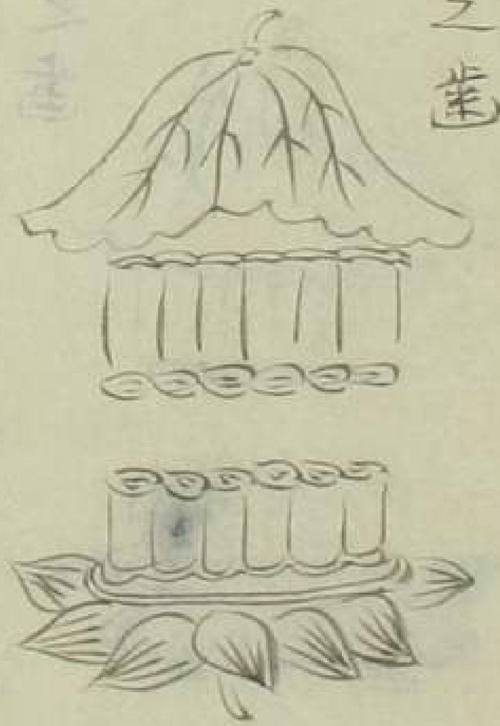


一歳駒歯二
三歳駒歯六
五歳駒歯四

八歳之歯



十歳之歯



二歳駒歯四
四歳駒歯二
六歳内牙生

七歳角區缺　八歳尽區如一
九歳咬下中區三歯白　十歳咬下中區四歯白
馬生時上下歯四ツ生也其歯を乳吸歯と云也其後上下歯
四ツ生する脈歯といふ也其後亦上下ニ四ツ生けり是
歯といふ也是乃二歳六歳三歳七歳といふ也三歳之八月九
月之時分乳吸歯上下共ニ落る四歳之八月九月之呂
脈歯上下落る五歳之八月九月ニ是歯落之六歳之時是
之角ニ尽ニ白あり之七歳之時是歯之内核ニ尽ニ白あり也
八歳之時是歯之中ニ尽ニ白あり之板のやうに成る九歳之
時下之乳吸歯之中ニ白ありて十歳之時下之中ニ白
ある也

上眸極位之事　第二

蝦面と云ハせい貝とふせたるごとくに面大にして耳短
く耳の根強く山向狭く眼丸にして瞋大にして角立

て角なし平向は付目の内廻りして目間近く目の下
は肉なく向骨高く角立て吹嵐く大怒て鼻細く口
のさきめ薄く口れはとりて高く下唇怒て三ヶ月骨い
かほしくあり総而乃飾岩はめ立紙と掛きもちと
しく月子九頭小して太そく肉高く長く向へ指お居
掛也西も同位也肩乃三枝骨さ急て襟並遠肩張ら
て骨の間寛鳩胸小して肉あり低肩さき丸骨さり
て肩そる立頸と胴とれ流き合接へ退て前股の間せりて
後の節さりて猪膝ありて低肩はより爪先まて
前つまれて小腕太折して爪もくもくに打出低早
足乃踵前足守ると胴の内丸く緩として頸と胴とハ
切遠ひきさり後腰も己と細く二寸も切あり古今
ひきく三頸もてとれ立とさり尾にひきくきらうや
低尾先ありはけし前三頸挿下百ちらせいたいの

節まてよく並遠て内股もくはへふとの股内厚くさ
ありこれ股高く近くとまの節れ上短く細く蹄く節め
立て節より下甲よけこみ節より下拂の蹴足向寛急
けりて前折爪もく前にあれ並総飾前へ居掛也
さんと西と云ませの男と侍うちまし西短く耳もく
さきと分け耳の立ふよく立向寛く眼いりて大き角立
て角なし立むらふは付目の内打は目の下は肉なくし
けと向骨高く角立てく吹嵐く太は出て鼻細く
口れはけめ薄く口れはほく厚く下唇怒三ヶ月骨い
かほしくあり総而の飾岩はめ立紙と掛らうさんとし
く月子く短く前足乃向寛く旋毛の間せくらふ
みせて肩反立もる立裏こそ節の結ハ蝶而れ飾乃
てるはめも替るなな
鳩胸とるは肩さりて肩そるる立胸丸く肉ありて骨

のなもてもさ所なくして肉見く梅出とも但肩は口よりあし
とてすく寝て向へ出しとはよき也表之
入胸とふ也も肩さかりて肩離を肩後へさかりく
胸を平く角をく身角まで肉を足へ向へ出付あるなり
中先也表之
拖肩とふは先も肩さかりて肩を上へ立の肩先より
とれく前で下所肩口より寝て出する足を行出也

早形之事 并ヒ

上は此大早道にも拍子ありても肌くあつしかても肌くか
けりと見ゆる拍子何れ足次とふ室くしてふ彼足を
かけと見へ足次人早所之 め出るまの足を拍丸を
もとんらさ形なり
早馬にハめよ 拍子に此馬も足出して居り 拍子に依
て太早なるなり

早馬を揚来かさし也時馬此足のさく所に乗者俗人分まし
も鞍またましめまのありかは七段の上此早すると可知之
早するに二ツ乗あり一つはてまり乗れんとつまて往鞍
内とんすると披見之く 歩む馬をよくて一つはい乗なり
人よりさ海く かりてあゆまけする馬を事也
早馬此目あさしらふ見ゆるハ我目此前と早く過ぐる速
く延りく先なりまるる車成縮此足取を能可見之
太早道の馬縮足掃時ふくみえをあわり早くハ前九を
知へし間馬かくもふしの見さ所時足次出切ると可
知也しふし此見さ所を足出きりとる太早なと
み出縮足ハ前縮此足中にすると見所出時ハ前縮の所
乃く見ゆる也
早馬ハ乎所に乗て此後地形の時肩を振る馬此ぬくに
大拍子に行とも何も大足くに乗てうると小足くよ

引るゝそうしさ御取るめ候也
早馬重とさしてある早足をさ引出すところけさ前股より
中腕迄へ出てかくさもぬけのするなり何とせもむしともその
上なるは出るうちの為と可知也
早馬と地にあけせてみんりては蹄か一の事か骨さうらく
付後股乃御へ骨出てせらるゝはれ節も多く付年腕の前
たこの事か骨も後股の外へ向之中腕より外に出して
外へ向て地陸と八分の子に歩く継付けらく出るるを
としせさと総さらしきと知るし一乃事の骨あらうるを
さは後ふつきしうる継之一の法るれ骨の向して付二
定後も切あらん後股より骨ほとさいちさき細かくて
早馬乃き総のあれ悪きは総よせとして腕とふるともに
則之馬小く腕とふとゝいふ也
早馬乃上は名は皆よりうる五寸皆之れ乃骨きうりて付とさ

ゆきともも後のわかく八けまて下さして付きとも立み
るするも馬の下皆先の骨するとあしく足とあけて見るよふ
上なる皆とと首先乃骨胴乃方へ下ひく延びさ皆之頭の方へ肩
先の骨まうひく則ち膝股は中節より下長経とと知る中の
節より下経さは八棚の下まわれあるをもとさこ節れ下と紀
出棚の上をあく紙出候し悪し
子為れ違まあひすう細胴経さとりつまかしとそ知るべし
頭と胴とれ付合胴の方へ寄て付継出遣わさ胴の方へつさし
節て因歩乃骨よりせしさらはれ節ましく能生遣まへ候く
競場に後より後股もく見ゝいとしれ大早遣や
あるは四股種間の両足を入てみるは是にて宛とふうは云之同様
同外内の方の後はむしく多くなして後のふつきさうるゝいふこと
早馬れ上之れ皆之称候時前股の膝と之方抄て出よ
とありとも上は皆と知る

早馬とて門へ出させて埒へ目を付るゝ其能
疾鞭にて切角ふくも常に有ふくも皆同大き
乳馬を賣買に八柳つをとも早鞭と知へし
早馬とて乳気合を能く合て責へし責馬事
ある也揃て責るとも足を高卸て鞭にて紀曲也
也責る毎を裡筋を沢四も屋る也
駒を鮮を姫より足掛ものを付る時はふるも不揃大足
大指を十歩了一中足に附付る一腰と悪きよそ
四腰の足並を　揃足と云
五腰の足並を　和富足と云
六腰の足並を　逢足と云
七腰の足並を　延足と云
加鞭乃をきは
二寸比口　強也　二寸五分比口　上也

三寸比口　中也　三寸五分四寸乃口　下也
三寸比耳より四寸の山間也　但三寸五分とも四寸の　山間上
也面長し其尾筒一尺一寸是表之
五寸乃耳より五寸比山間也　但耳五分とも五寸比山間
面短く其尾筒七寸五分裏也
茶縮法より乃鞭八寸也
指鞭切遣の事如此
一尺八寸の事四腰より七腰まて　又七腰より上此事は
在る事法は信るは武家接用集より見るへし
早手の事は指をる也　二寸五分比事は大事下の事
茶足の間五寸也但踏付重て右也
後足の間一尺也但踏付揃て右也
尾先あまりに指す　茶縮小腕の長四寸也
法解中ふて不免事可有

上面より中面迄見る事
眼と面骨のあひさ肉なくしほそく面骨に角あれる事
面の縫乃毛れ長く毛所能く其毛眼に見え根を月
大きに見得て丸きにあらて其の中程わりて小くち
とおもへは其眼の後に下落くけく見ゆるを
角よりて其此中さわく其悪き之眼乃花様用なり
後轉消へて其よくはもちてもく同く毛に落さ然
肝も然く
肩先の骨は下より肩の骨先にひかるをよくの角高く
胸面骨のあひさ離候事
二枚骨さかり續重遠乃る事
二枚骨によりくはちきて向へ折出る事
は腹とのきと細くしてもつき事
以上此より二十五ヶ条之候系縄上此位ハ掛見るへし

すくさ免まくしこそ位可有中脉又系縄中乃位
よみけるしそ押へきとるへし
其三頭押下候事　二重深切ある能事
有气よりせつまいの節まく股続之遠まちハ節よ
里まもまえまる中の位之　位股の上遠中の位にて
節よりち上にてまるは悪きや
内股もちる事　其股の肉厚き事
系縄ハ腕直てそるらへしつきる事悪きに又附へき腕
とふハ竜の毛を見てとるへしと馬に依て免をきるし
系縄の外可有之事
上脚之位可見事 并外
面の脚悪くとも上面より中面迄之可免也
耳もく面長きる事を向ふる可へし　但耳短く面短
きる事 裏も同事

頭ちく胴もきるゝに見え前髪上れ位にて免許あるへし　但可
鼻中鉢く頭短く胴短きなるも同位也
肩上の位は膝中に免許あるへし　但肩中れ位は膝中に悪し
肩髪上の位は末髪の蹄付等足間中れ位ハ免許あるへし
但肩髪中の位まてハ在此蹄付悪しき也
肩髪上の位あらく前ハ肩掛股継未一遠節より下重ね
立てく節さらりとするは免許あるへし　節にあて　踏篭て
節さらりとするは悪しき也
総解上の位は三ッ半はかりあらハ此免許あるへし　但本鉢悪
きは押つて
三頭下りと股の重遠上の位は節より下中に　跳こまた
也とも免許あるへし
股よく重遠て節より下中小跳迄するハ棹尻も田にて
免し

入尾に肩掛あるとも能くしらし此表之但肩及びあるとも
押つく在之分何も早馬の理也

要馬秘極集巻之九上　　識見之巻終

要馬秘極集巻之九中

騎押付之事

隆肝之事　　下肝之事　　曲肝之事

まわしの下より下は横一寸五分斗の筋一筋も二筋も有
同様の早馬にあてせぬまでたこときは是れ也故に押への筋
と云　併は物よ強き所有之
術免となく居入りて後の方なれとひ之事　すとも
延足とすへし其也
上頭あまりしなる事　頭内之事

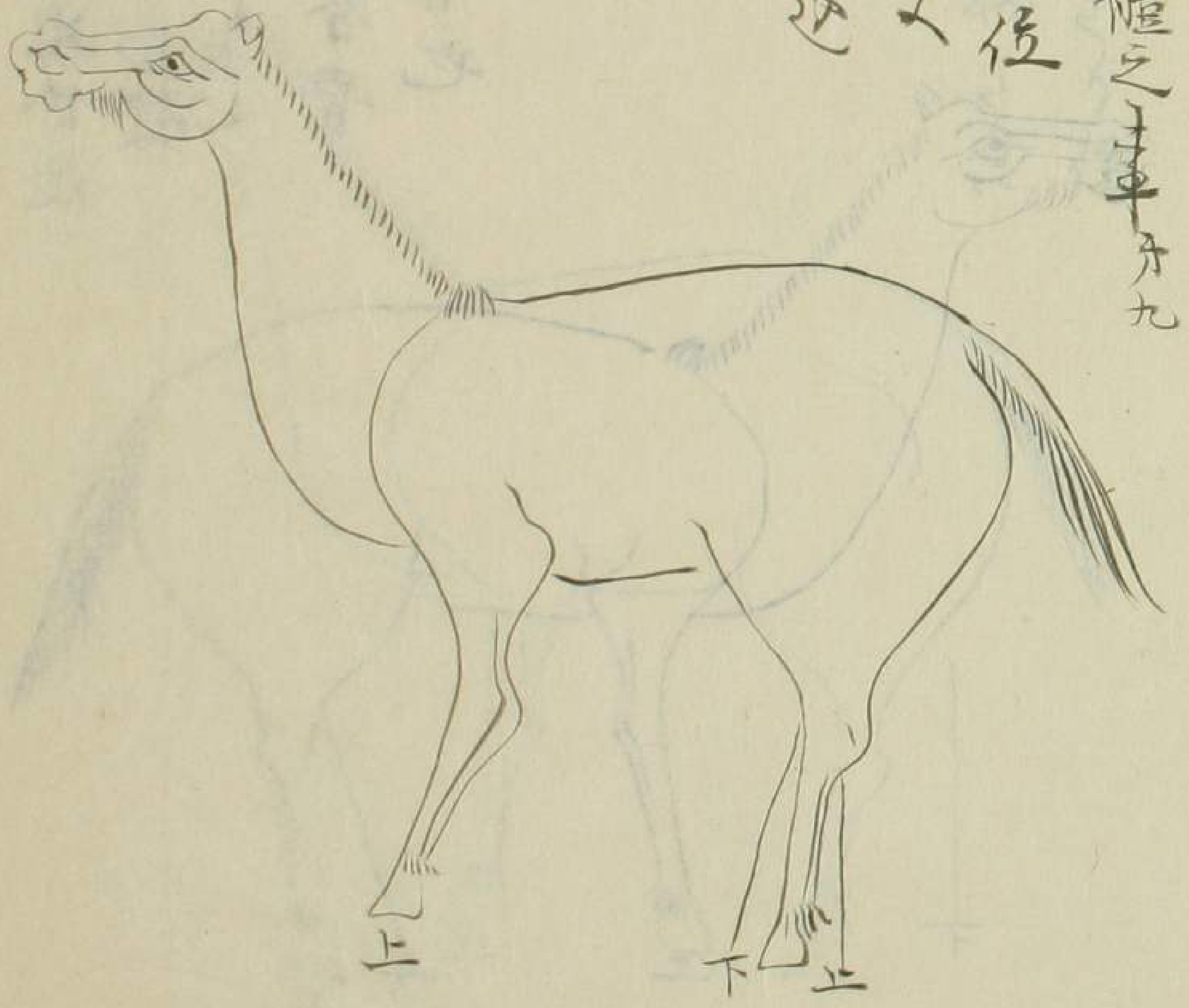
三枚骨の後りなり
胸たゝきを肩とくる也はつて粧術上れ位よい中勝よく
之し位並中此位よい此肩押へて
胸此くり川ろき狭きなり
手股ある方へ振ありて位置を半膝ならし膝向へくるべき
也先押へて
手狭く綱せりきよ手綱よての位よい可当中平なり
手抱綱絶へて位手綱ニて此位よは可為中平なり
角合之四股手と假り
二之位切あつてはるなり位並形之の位よい中此押へきる
之し亦並形中の位よはたらきたる手押へて
綱のなれなり　大蘭のなり
股つきく長股よく也たるなり位裸股ときて
手綱節包血村なり

綱字の内よく中勝ある方へ之を出し縮付せよく内八文字
小鐙付ちやぢきよ悪きて
綱の節より下中よふとこむとも股の也遠ち此い押へて
文節より下よくに立まるも押へて位中に鐙さへまなき
之股の也遠まる之中の位き
手綱小腕をして文といぬきとをそくるゆ転なく風
まく並たるふ川と当るとも也たるも先を押へて
手綱此中より下さるなり
縮付様度きてなり其八
手綱同上廣く下せよく縮付文襟同上せよく下廣く縮
付るとも肩上の位まを矢よ入てふと法け可表て肩あ
たれい縮付並たらなし
手のふと法け抱ともも狭くとも也よく中此位よく同之間
とも同まこ文綱此縮付抱たせよくきよく中の位まて同

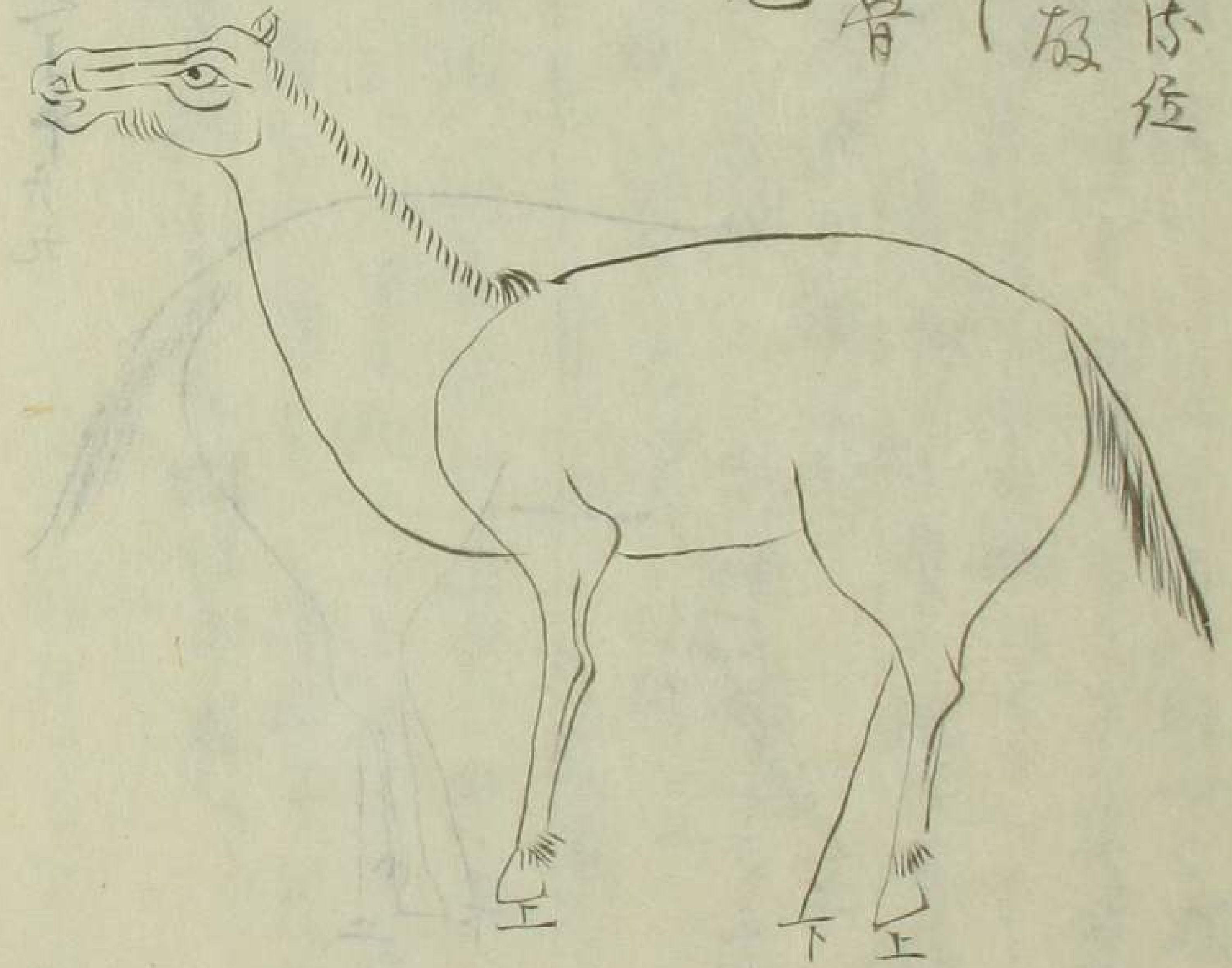
足間も中之足を前輪上ヘハ位を乗候内少く蹈付ま
をへきしたとひ乗候内ニて蹈付候ともしさま若し
其後稽古中ハ位後くなれハ足間蹈付押つへし
前ハ蹈付せ候くしさて轡ハ少は広く抱候肩輪上乃
位を乗る含を抱轡を様きし
前ハ蹈付抱轡の手を付抱候へく肩輪上ハ位を乗る含
せつ轡を抱手候前輪の位中ハ太ハ手を付押也
前広く手を付輪を至より広く抱てるハ前輪候ニ含
乃至つるし足を悪ク候位肩輪上の位中て前ハ依て居
かり股も遠て節より下中に蹈込ざれし位乗乃
位中ハ之し又太の位少く節より下掃き候ハ
悪候之又前輪の位中弥少く候蹈付手馬之

五足之定體之事 十九

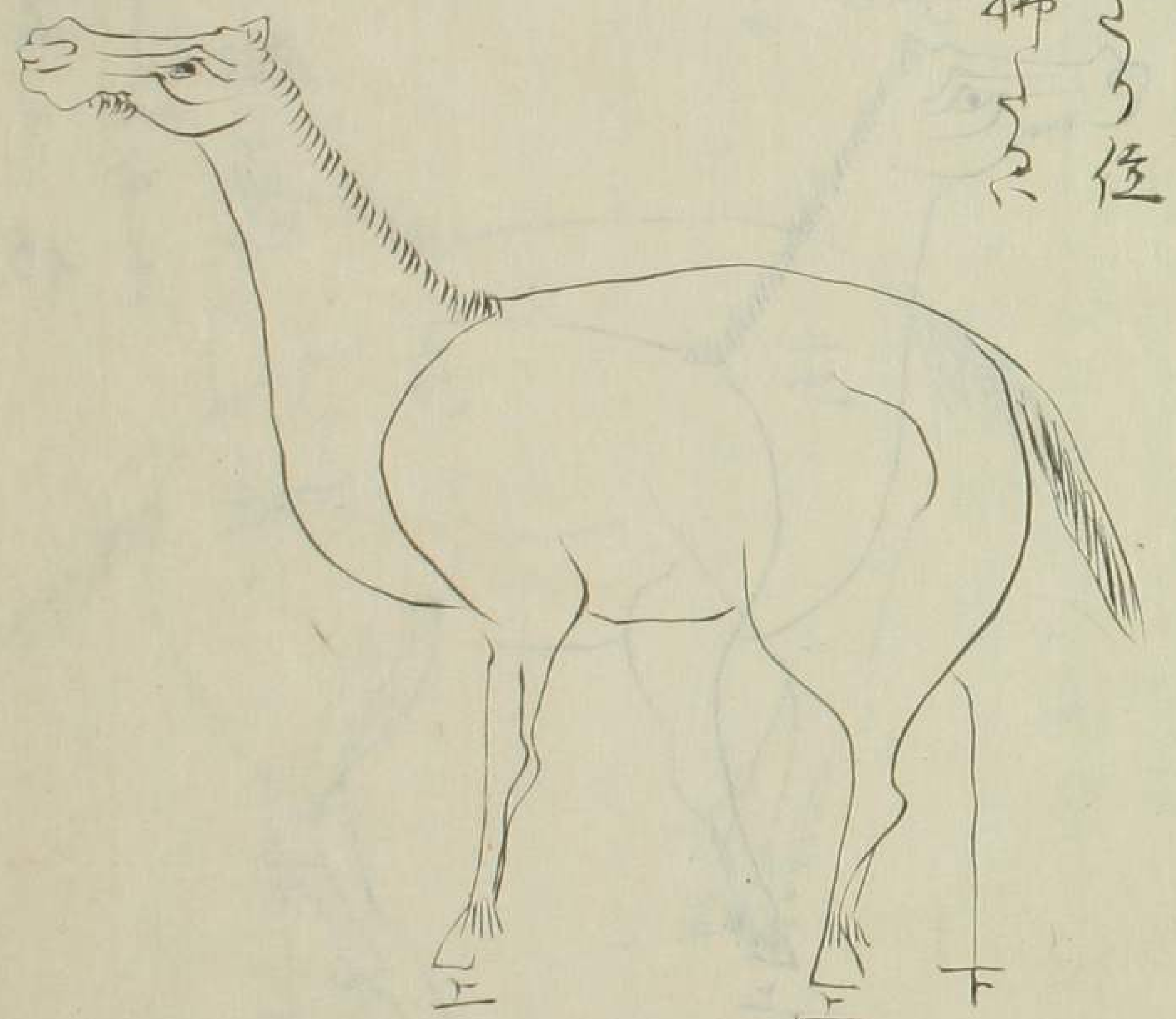
此馬居掛り候位
能掃てよし又
中もよし蹈込
よろしく押へし



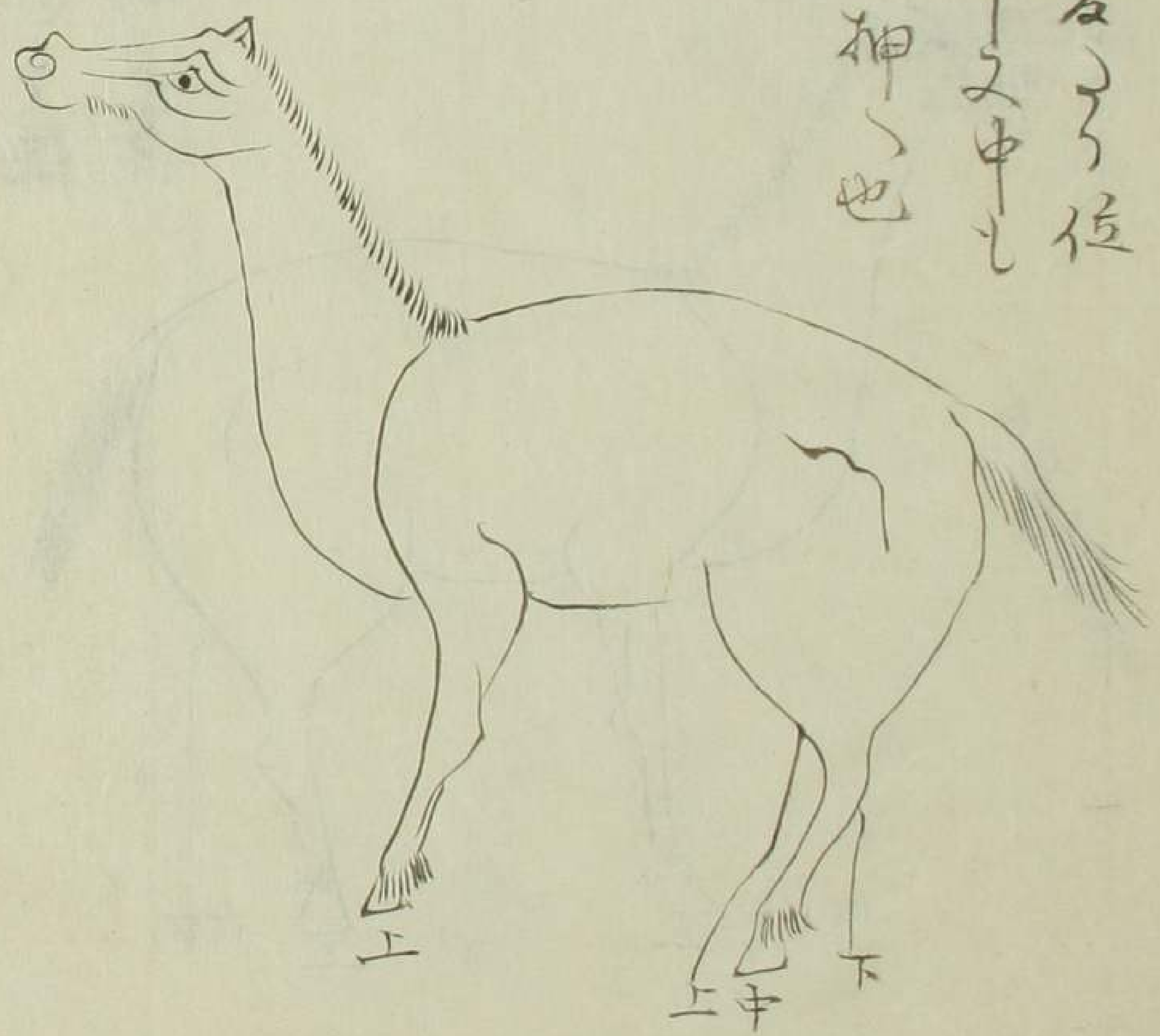
此馬中ゟ少居掛候位
手下候ハ居掛候故
鞍際く捕てよし
蹈込ゟに押へ脊骨
張ゟり三頭強下也



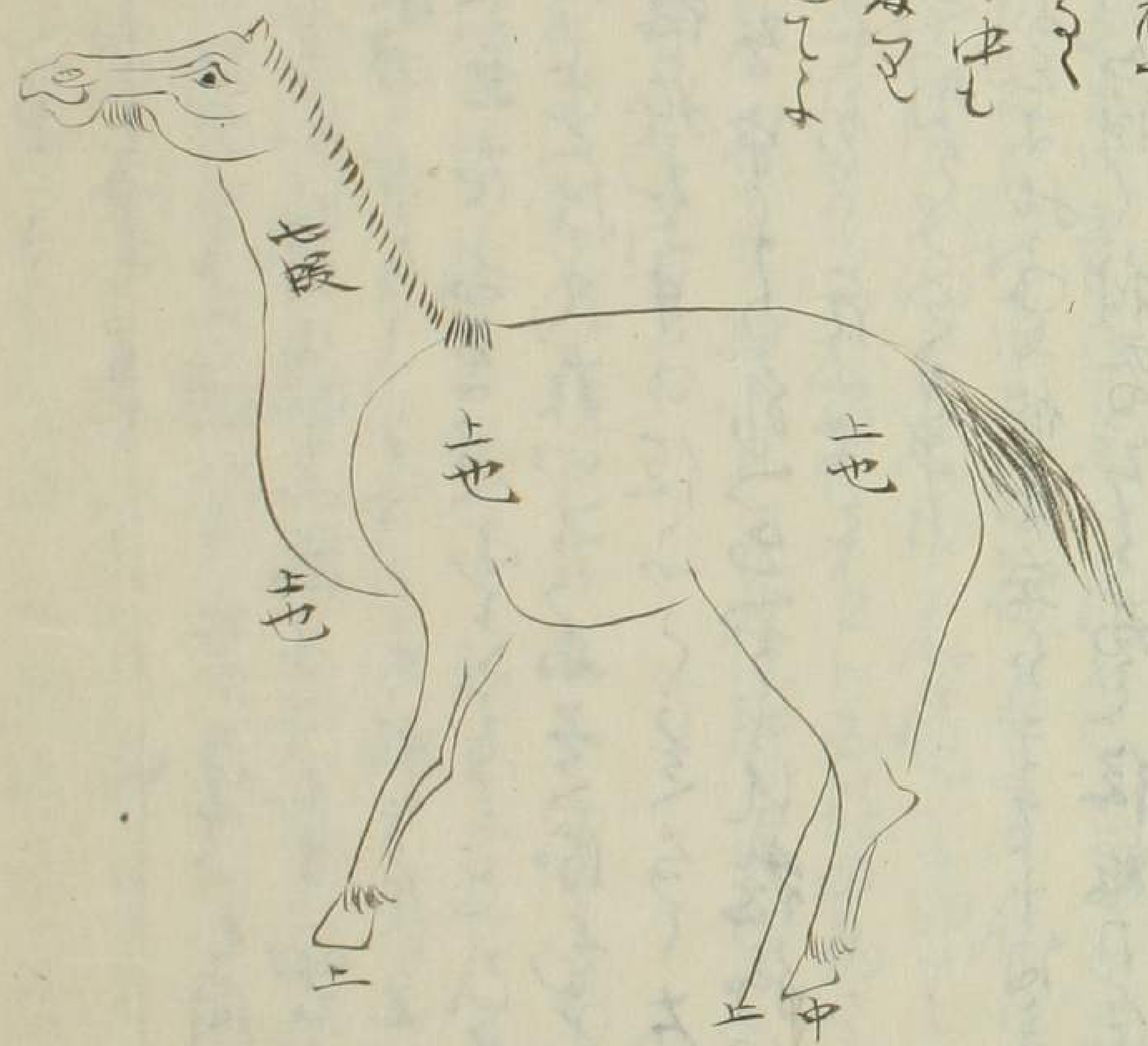
此馬居及ひゟ位
鞍蹈込ゟし捕ゟく
押へて



此馬中よ居ろう位
艫踏込てよし又中も
よし拂ろい押へ也



此馬印着の位前へ
居掛て頭上へろく
付ろい拂ても中も
よし胸小て居ろ也
ろう右艫踏込てよ
し條ゝ口傳



試刀落之事　第十

四胴之目録之事

四胴此重ハ高一寸の重ニ但一寸五分まても同意ニ而最
胸何も中之但最胸の肉を一分も二分も切たるまてさ
弱筋まてハ四胴のうちへ入る也　すまても中脉と
云右四胴の足並も子落足ふくもくとひ足ふても
まく胴ニハ相子を揃てたいらかに落たるところへ
足を置也　但結筋を中の位ふく足なく参あり
ともに此位を中より外へ出かけれは結筋門落も
不宜　押へ此くへは重く可秘也

五胴之目録之事

五胴の重ハ高二寸此重も但一寸五分まても同意ニ此五ハ
胴の内深しく胸を利かせ而も結筋乃位早く
ニ肉並皆掛まても堅く見えてくるしき位まて

足並揃く足揃ひてくりまわし利かせたまへ候て
五胴の重なるハ意あり候ハ場所ともなき事也
右とも五胴とも切離し申候也　節切たる迄さと
角ニ出さぬ結位之外ニ引最胸ニ切たる迄さと
右ニ付一分も二分も切たる胴の外へ出すへく
し結筋門落有るも押へ此く指解可秘也

六胴之目録之事

六胴の重ハ高三寸の重　但三寸五分まても同意ニ而
上胴ハ四胴此重の重ニ脉より脉太ニ丸く是目乃内
ニ於て門もくみくみとかけ脉を目前ニ而ニ寄り
頭ふく向へ延出し胴ニ而も同意ニ有之此骨乃重此
おもくさかり継ニ遠接膝ニて胴の内も切離し頸
と胴とハ切遠一日会にかせいまハ乃節ニまく流まく生
まて股踏延節より下中ニ流此ニ而右左結解

切離る所にあらはる腕也此足并を向へ頭を延出し
深く伏かりて肩口より突て大足を投出し古み
てよせし 利方もふかく大指を投出させと運足
と云右此位ハ西北見んやう肝要之 後紀程勝門前の本
有押への見極成也

七雁同事也

七雁の事前に西事を問上面もよく此色ハ骨高く
節ふとく色薄ふ西を見て胴太きにして見えて未た
肉うすく同此内開にふくらみ人も身持てよくとく
見へし頭も向へ深く伏かりて延出同面も同之肩
先の骨と子ども出くきうりて膝より出遠て脇膝にて
胴の内後にと切そるとき宛き頭と胴とを切遠有云よ
足さいもいの節深く膝出遠て股踏延て節より中に
踏込ろ云右七雁の位を後勝切もとるへ宛き内并骨筋

は掛遠も是胴く加堅肉子見んやうし 此足并を向へ後脇
肩掛頭延出し肩口より宛太子延て向へたけ出也て
出し大指之先よりもり延足と云右の位を西後脇
の容此と身上様門前本押への見極肝要之
右見之の同事也位ハ足ハ口より付け足之ト付ると云よりあるき
ふハ勝手同口ハ我子肉をを見ちてと見極乃者わりさても脇
にお遠して手へ可し

先立位勝定る

西北内ふく服のる
肩乃内ふて二枚骨下菜 膝出遠之る
胴刀門ふく此身乃れる
後の内にく股出遠之くる
足此内ふく踏付れる
右西之事を続として乙此行是之

四段ハ十二と引落シ但十三ともも四段の位也
五段ハ十五と引落 但十六ともも五段の位也
六段ハ十八と引落 但十九ともも六段の位也
七段ハ廿一也 然共引落ともいふも 右ハ引合を以て上中
下と引落し
前腕の足並位を見定る
此段前四段の位ニ腕四段の位ハ前と腰と定前と腕ハ引
落し身下手也とかく四段の形ニ而身下掛退ハ四段ニ
同前四段の位ニ腕五段の位ハ前と腰と定め腕と前ハ引落
而身下手也とかく四段の形ニ而身下掛退ハ四段ニ
五段前六段の位ニ腕五段の位ハ前と腰と定め而と腕を
引落而身下手也とかく五段の形ニ而身下掛退ハ五段ニ
同前五段の位ニ腕六段也位ハ前と腰と腕と前ハ引落
而身下手也とかく五段の形ニ而身下掛退ハ五段ニ

六段 前七段の位ニ腕六段の位ハ前と腰と定前と腕ハ引落而
身下手也とかく六段の形ニ而身下掛退ハ六段ニ
同 前六段の位ニ腕七段の位ハ前と腰と定腕と前ハ引落
而身下手也とかく六段の形ニ而身下掛退ハ六段ニ
七段 前腕七段の位ニ而身下手也とかく七段の形ニ而身下
掛退ハ七段也
鳥之定早道ニ歩ミ時之事
鹿毛 鹿毛 河原毛 七枚
芦毛 栗毛 九枚
鴾毛 何毛 十枚
黒毛 何毛 十一枚
大乗
上十日 二分六厘
中十日 下解
下十日 中解
小乗 三分八厘ニ向ツク 上解

息當テ手十一

息を留ずして百五十間丸場ニて　吾流ハ息ニ一返り
息ニ一返但シ馬を責ル時早足十分出ると不叶時
息を留而之治花維ル文也大概ハ六尺五寸据え

重玉　玉
四脈ハ
百五十間ニ馬一返ニ字数　四百八十歩
百間ニ　三百二十歩
五十間ニ　百六十歩
十間ニ　三十二歩
一間ニ　三歩
五脈ハ　三八
百五十間ニ馬一返ニ字数　三百八十四歩
百間ニ　二百六十歩
五十間ニ　百三十歩

十間ニ　二十六歩
六脈ハ　五二一六
百五十間ニ馬一返ニ字数　二百八十八歩
百間ニ　百九十二歩
五十間ニ　九十六歩
十間ニ　二十歩
一間ニ　二歩
一間ニ　二半歩
七脈ハ　四丈
百五十間ニ馬一返ニ字数　百九十二歩
百間ニ　百二十八歩
五十間ニ　六十四歩
十間ニ　十三歩
三間ニ　四歩

一問　三ケ當
馬場を百五十間ほとく其法の内の早馬は今世ま
九右の息を當て馬はいく技早紀運乗る息へきし
右さ何も早馬之理之早逆通早を知へき乗
え馬の気寄中ふして我ら乗之乗る時日をうしと往
當て日へ方りとも外へ方りとも一息の流まる所は
又日毛つくとは當く次の馬乗る時又件のあらく
みて荒此日をうしをそりとて息流まるとそ
乃ち也何ても日毛つしとて荒此日毛つし也の
毛つし此間何ら御をりくあしと法より何日とてや
なとそ紀と気へし出とも我息當此方ま事とそし

要馬秘極集巻之九中

躰押之巻終

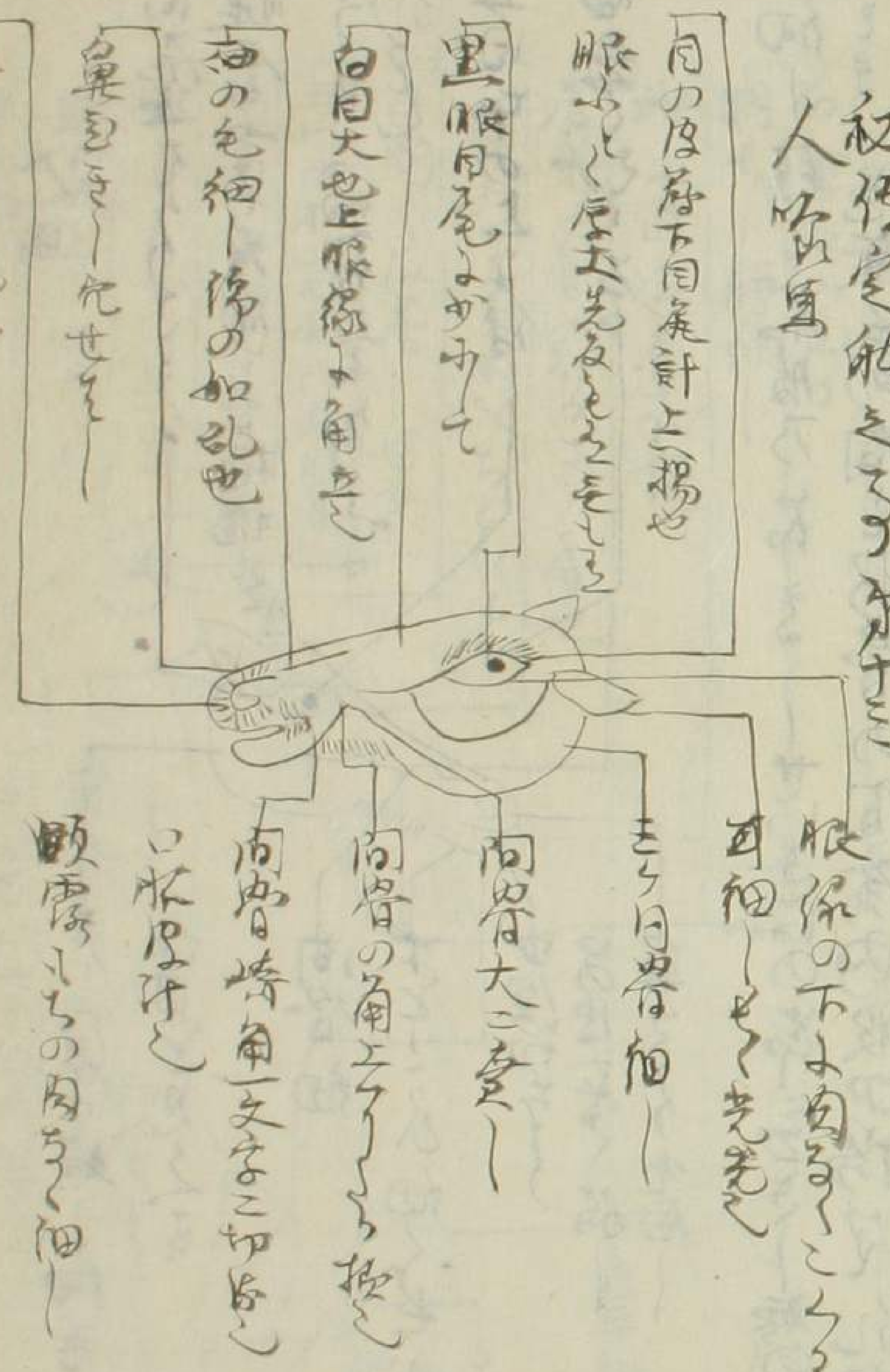
要馬秘極集巻之九下

馬形

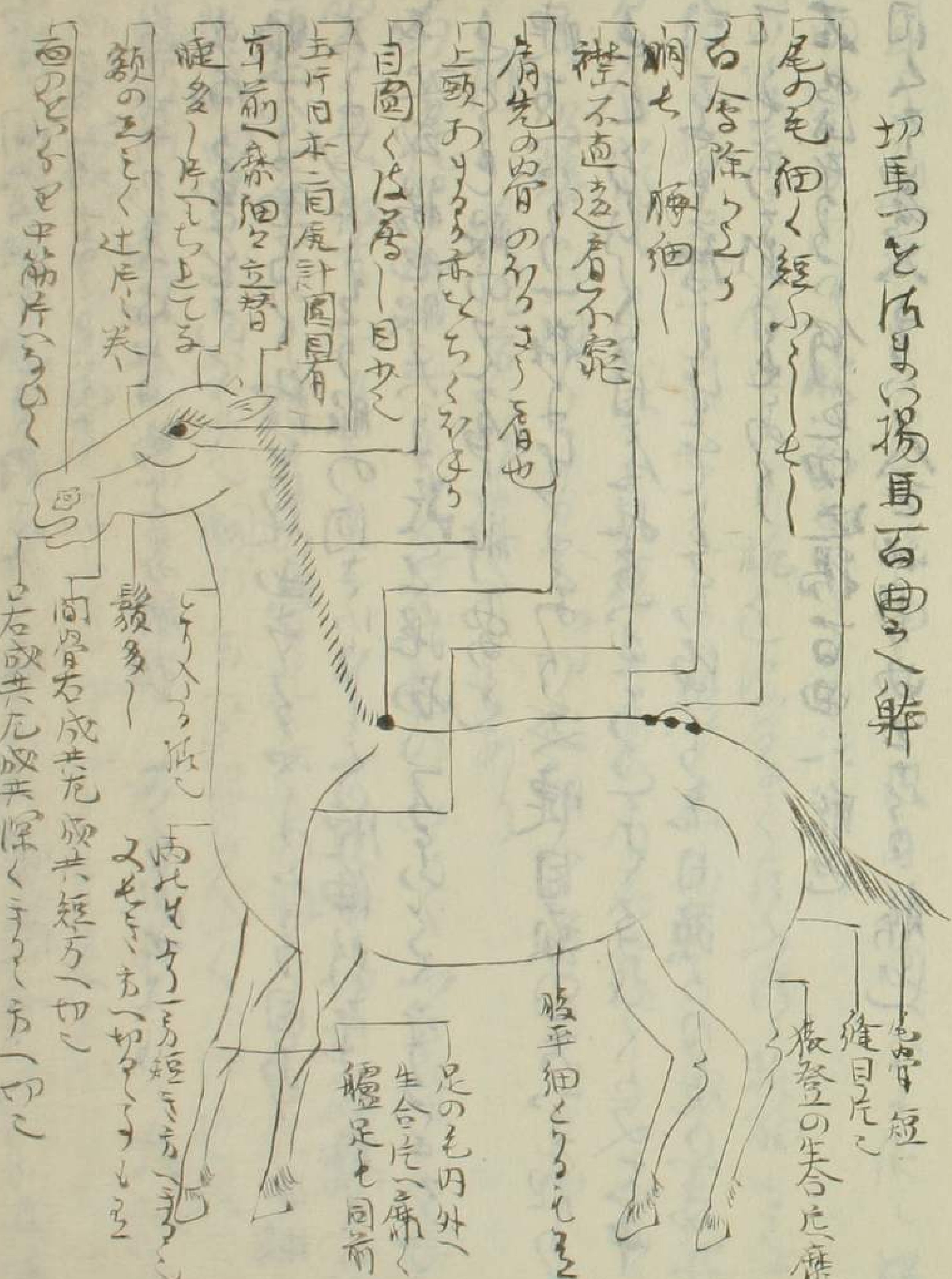
馬大小の分別事　第十二

右七ツ子と云も七の子歯とりて歯みの月々と比へ
さゞ所承と無用して小歯の月々歯を何云と
駒生て七日九日月々にて歯と揃て下ハまつ子りて也て是と
一月ヨリ四ヶ月ハ上と下ハ二十三日ゆして歯け定法と
生れてより月とやすらんと揃て見て前九月と持世九日数を
徐を見るへし
七乃年何も二十三月の時分まてつるに九九にてまたもと替るへし
二歳ハ十二月と知へし
三歳ハ廿四月と知るへし
四歳ハ卅三月と知るへし
二歳三歳四歳迄後の月を揃主九日数四ヶ分毛程として知るへし
三歳ハ二十四月にて定と云大歯下ハ廿四月の内までに三歳と
朝あたら歯ヶ歯を抜く見るもの有りくと候に何と云
共とも早く出る事ハ又長く延る事あると知るへし

歯はかり出し見る毛先ハみの歯も入る所なき也
なりこまと深く書き能よ子紀曲可出と
秘伝定能之事平々三
人皆具

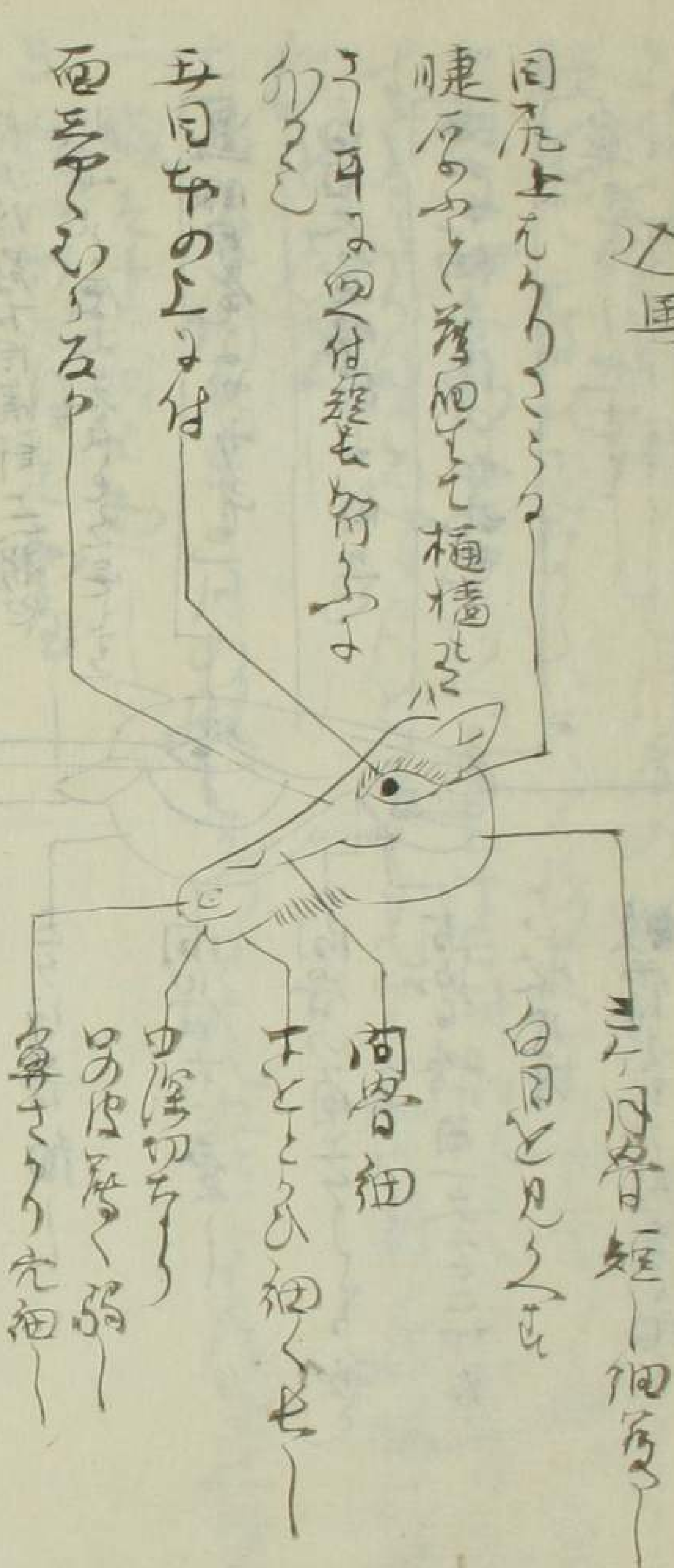


切馬つきはまい揚耳百曲之解



此外姿掛座し毛細長髪乃毛柔し足太く節付も荒尾の毛細し

辻馬



面細し短し前脇乃節高し せいきいの節高きし膝の骨のき
てとまり芭蕉毛の間も折骨の間廣く内股切揚足爪白短し
毛志く長し 尻ほと綿の振まもも頭の指扇く上頭あまり
下頭流まりお足股の下つゝ足て付き

〃と同骨也あひさ肉厚くなり両習長くなくなり余短
かくろふることを
鼻草乃為時骨のとおる脈深くさゝれなきは此吹戻と
出命と書とさくし
眼太く突く陰と陽出ありやしなる目あり此眼に
大きめなるより眼の内さいりしく瞳伸びそく動くは切
成込成揚也眼太く陰と陽ありてくなるとうせて
とくも眼の大なる所要之
睫は一ツ二振に生ずるあり又睫目頭の方へさし出あり
ことくらひくら目尻也方へまちまちてくるひくら又三中に
許厚も薄も生てまちまち眉目頭り目尻より一方へ出
てもちあれもあり
右此上のかは何も切込揚百曲之体也
同く不在又右は人と吹戻り曲とあり体也

指耳に血道ははう余時白より風耳は四迄一分に依て口
と曲所にあり脈へなきところ者
頭の根蔭し肩口より腕迄深く成所は振如生
胸方是也生会一方は七く一方は短くの有るなりも絶
方は肩窓くと知りしてみ短き方は肩不窓して生する
世上の短くの仕りさうる方へ切込之み生ぜのなり所
かように も紀方へ切込るもあり
胸方是也生会の上より芭蕉毛のおとこ小草頭また左
へ旋在へ施在毛もちまし 生える方は切込揚旅之
芭蕉毛赤くして肩の骨是きの回り一白芭是方へ
生れ出曲ちは上と胴の方へ生え方ひくは切込旅と
上腕の所よさこそうは余多不係て出るあり
乗の尾脈へさいぞら尾より切所とも足とも出すあり
旅尾より肉股へ尾と折し方は切成込切揚旅之又云雄

尾尾けしら尾蛇尾あけ尾栗木荊尾尾筒ふしくやハ
らゝ如ら悪し尾筒もさゝるゝに無し短かるべし
無し尾筒細く堅く骨も円にあるべし
継目の前は脈に肉多く内のめ厚く円し継目ある
ひくきハ悪しき鞭をこそするに當たる所画あり上に
上後て勢ひなし継目ある之如し但し如此なる方へ
切之継目ハ前肉厚くめの内にかくれてしるき
馬ハ少ハ前は無関まよしと遅し但し曲馬
となる場へ間あわせ左脈へ半日と付るも

前に取付る馬

切馬の脈あり此外に骨ふくく皮掛厚く脇ちて同
前あきハ耳もく曲もちし上をと頭に付頭
短く少くし見ゆるけめ深し継間せりて腿せさし腕細
く円細きなり

前に有る馬

尻及びとる筋ふて前足膝此前よく付膝足股より
下ハ細く節より下踏込頭揚足ふりして古伝深前莚
毛谷中辺の所り前股頭の前に指す付耳向へ左右同
丸くえくゝる目のまハりも厚し

前に垂るゝ馬

耳此振細く小すけも開合ふる耳細く立たちてそり
常に小息あらしきえくゝるまても鼻息荒く喰へし目乃
亜ふく細く股とえへし又膝とも細くえへし無時ハ入
見此に多と付前に付間あるく筋にすとひくとけるし
毛厚く細く短し毛け能え前ふ足一勝ちよも前細く
厚し前々呼して前すりとすへし

前ふりある馬

前膝立足厚さにたえくへきる時も前膝の内一足伝く

併むつかし腕の細く能く見るべからず手綱を持し
疵書を遣ゑ持て見るべし

猿足ふ八の馬

目ふとくてよく付けし前足牛膝斜に股へかかる
足肩とあまさ腕すゑ猿股にて勝とみるともよし

あとさ付の馬

顔せり手月骨の間せり中にも顔の方せりて歯乃
内角のきりともに二歳より六歳までの内すべし口狭し
背ともに細し頭の骨肉にて隔を割れあり彼の二股二
の間せまく肉なく五腕あつく上広厚く股筋ゆるみ一向華
よく芭蕉毛の間広く腹細く肛門の中に逃るる
ありとぞ

杼馬

腰の骨脊にあまりてつまりつつし股大に強股ふ

よくせつあいの節あく付て足つまり長く強の大し
て前股腹の方に付前股細く強き節あく付一足
あく前の小刺して前節より頭の長く付
短し面中と印顔の長しとともに長し歯て下歯
大きふと同じくて

何卧之馬

毛細く短し毛より合毛付て尻足の毛もなく面に
毛も長し面にも毛長く尻毛長く尻下に短し口の
内赤し水を見て口をきりむつまじく時に足
前足をすりて

片毛あらしの馬

目尻あつくて
頭三段あり
馬大にふとし

面大に長し
脊骨張あくあし
猿股馬平くつなくあり

股平く大股也　前脇足平く長し
前脇比足同様し　四乃爪作しへえ也
前脇長く彦すき
諸れろしの馬
頸短し　下頸長し
頸の根ふとく短し　前股鏡乃節高く
胴長し　脊骨高くすさくし
折骨まるく膝あつく　股小股也
馬細し　尾行迄尾筒細し
門部しまり一方に足出へし
右の外陰に当る所馬毛ゑへし[illegible]も太くてまるくへし　但脇
よくそて五臓とも照も当い也ろしも[illegible]強早力之し
指よ遠鋭きき馬
頸短し
下顎円頃あのしまり付

前股鏡の節高し　前脇足細し
前脇足同意し　勝と振
鍋鋭也　せいのかさく
雅長し　尾骨かろくもし
爪大細し
小足之馬
口ちまし　肩先の骨の尻
前股中節迄たるも　胴かし
芭蕉もせきし　前脇足ふとし
前脇節かくし　前脇上彦くく様し
尾筒かくくもし　脇足よりまる
爪大也
[illegible]之馬
[illegible]頭短耳短耳の根厚く上頭短く下頸長く頭乃

根ニ肉あつく目モし胴短くあつく背すしこみ下腹とう
足腕長く或ハ口立ねニふとく皮掛厚く口先さけ兎
腹ハ大腰ニ縞の太く此ハ牙出くさ夫舌を出て
人を見て色ニ粉多し

真と見候ニ同付膳能き事

一年ニ二三服三ニ歳四ニ頭見り五ニ三高歯六ニ尾
口縫目膝七ニ肥筋八ニ腕ニ九ニ仁十ニ地上右ハ不
不ハ中中下老て毎又病をよ見あ死取と
可見也

要馬秘極集巻之九下

大小之巻終